
東方炎魔録

ほーよくてんしょー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方炎魔録

【Nコード】

N8568P

【作者名】

ほーよくてんしよー

【あらすじ】

彼の目が覚めるとそこは東方の世界（かなり昔の）で、しかも吸血鬼になっていた。だが彼は、弱点もある程度克服して、頑張って生きる事を決意した。

よくある主人公最強なお話です。 オリ設定あります。

ここは穴か何かの中のようだ。
取り敢えず、外に出た。

.....

.....
森だ
.....

うん、森。

さっき俺が居たのはプチ洞窟、もとい横穴だった。

今は、それと木しか見えない。

あと地面は見えるか……………

え？なにこの状況笑えないんだけど……………

「っあああああああ————っ」

横穴と森（後書き）

初めまして、ほーよくてんしょーです。

小説を書くのは初めてなので、生暖かい目で見守って頂ければ幸いです。

種族・能力（前書き）

主人公がかなりチートに
.....

種族・能力

取り敢えず、あの横穴を拠点にした。
これからは家と呼ぶ。

そして、気付いた事

背中にデカイ翼が生えてた。

蝙蝠のそれに似た若干紅い黒の、

畳んだ状態でも自分より大きな翼。

広げると超でけえ。

しかも、魔力（なんか使えた）を込めると、
更に巨大になる。

ちなみに痛覚はかなり鈍い。

翼に付いた傷は一瞬で治る。

そして、爪がめっさ鋭い上に長い。

しかも頑丈で、自分より大きな岩も破壊出来る。
ちなみに黒い。

身体能力が異常に高い。

全力で飛んだり走ったりしたら音速並みで、
巨大な木も片手で引っこ抜ける。

自分が吸血鬼だという事

これは何故か余裕で分かった。本能だろう。

多分、弱点もある。

能力

これのおかげで、凄いことが分かった。

「炎を操る程度の能力」

東方だあ！！！！！！

脳にこの能力の名前が浮かんできたのだ。

この能力で今出来る事は……………

- ・体から炎を発生させる
- ・視界内に炎を発生させる
- ・発生させた炎を操る
- ・特定の物のみを燃やす

この4つ

炎に関わる大抵の物は操れるようだ。

そして、燃費が良すぎる事。

魔力を殆ど消費しない。

ちなみに、最高まで炎の温度を上げると、

石や岩も溶かす事が出来る。

これは流石に疲れるが。

まあ、ここまで来たら笑うしか無いよね？
チートってやつだな。うん。

.....
ちり

強い妖力が近付いて来てるな。
俺と互角に近い妖怪だろう。 鬼か？

この力、試させて貰おう。

種族・能力（後書き）

死亡フラグが立ちました。

次回は初のバトルシーンです。

初めての戦闘(前書き)

主人公の名前どうしよう.....

初めての戦闘

今、目の前にいるのは、鬼。

俺はこいつを知らない。つまり、萃香でも勇儀でも無い。分かるのは、強いという事だけである。

「あんた、強そうだねえ。ここまでの奴は初めて見たよ。」

あちらから先に話し掛けて来た。意外だ。

「そうかい。ところで、お前は何者だ？」

取り敢えず聞いてみた。

鬼だ、とかいうアバウトな返事しか来ない気もするが。

「鬼だ」

「分かってる」

案の定過ぎて反応に困る。

「さて、さっき私が言ったとおり、あんたは強そうだ。

私は鬼の神崎かんざき八夜威やよいだ。あんたは？」

「俺は……………」

あれ？

名前が出て来ない。
今までは考えてもいなかったが、分からん。

「なんだい？名前はいいのか？ならば、私と勝負だ。」

「何故そうなる！？」

甘かった。あつちから話し掛けて来たから、闘いにはならないと思
つてた。

相手が鬼で無かったら多分そうだったのに……………

まあ、俺の力を試すいい機会だし、やるか。
死にたくは無いが。

「なに、心配するな。殺しはしないよ」

やった死なないぜ！！多分。

おそらく、パワーではあつちが上だろう。スピードは負けない自信
がある。

多分、吸血鬼だから霧化なども使えるだろう。やった事は無い。

これは、パワー以外ならこちらが上と見ていいだろう。

問題は、能力だ。

あれほど妖力が強く大きいのだから、能力持ちである事はほぼ間違
いない。

……………聞いてみるか。

「ところでおま「八夜威でいい」……………八夜威も、能力
は持つてるだろ？」

「どんな能力だ？」

「『雷を操る程度の能力』だ。あんたの能力は？」

「俺のは、『炎を操る程度の能力』だ。」

「さあ、もう聞きたい事は無いね？この石が地面に落ちたら始めるよ。」

「ああ。」

八夜威の持っていた小石が、宙を舞い、落下を始める。すぐに戦闘に入れるよう、姿勢を低くする。

そして、地面との差が、1 m、1 c m、1 m m

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

ズガアン
.

先制したのは、俺の方だった。
八夜威が、吹き飛んで岩に激突した。

「っ！！
. 速いねえ。力も強い。」

八夜威が突っ込んで来た。予想していたより速い。

「うおおおおおおおっっっ！！！」

「はああああああっっっ！！！」

そのまま、殴り合う。八夜威は力のみで、俺はスピードと力で。やはり、互角。あちらには目立つ傷はあまり無い。こっちは傷だらけだが、すぐに再生する。

一旦距離を取り、電光石火の如く八夜威に蹴りを入れる。しかしあちらはこの衝撃をこらえ、そのまま右ストレートを放って来る。

俺はそれをクロスカウンターで迎え撃つ。幸い八夜威の身長は俺より低く、俺の拳が直撃するが、力づくで拳をねじ込まれた。

力では彼方が上を行く為、俺は後ろに跳んで威力を弱める。このままでは埒が明かないと見て、霧化した。出来て良かった。

「なんだ、もう限界かい？もっと強いと思ったんだがねえ」

「まさか」

ある程度離れた場所で、霧を元の体に戻す。そして、能力を発動する。

瞬間、辺り一帯は火の海と化した。地面は既に溶解している。

「さあ、八夜威も能力を使ったらどうだ？」

「言われなくても、そのつもりだ」

八夜威の体に強力な雷が纏った。そして、俺も炎を纏う。

「なんだい、凄い炎じゃないか。」

「ああ、この炎は自信があるからな。」

「さあ、元々は殺し合いではないんだ。もう私もあんたも限界だし、次の一撃で決着を着けよう。」

確かに、俺はもうかなり厳しい。あちらも同じぐらい疲労しているのだろう。

死ぬまでやるっ！！　みたいな奴じゃなくて良かった。

「いくぞ八夜威！！」

「全力で迎え撃つ！！」

「炎魔天翔」！！

「雷神剛拳」！！

初めての戦闘（後書き）

実は八夜威はいい奴です。殺し合いにならないようにしたしね。

次回は、主人公の名前が・・・・・・・・・・・・・・・・

！？

お楽しみに

決着（前書き）

原作キャラ登場はいつになるのか
.....

決着

凄まじい一撃だった。

今は立てているが、そろそろ倒れそうだ。

向こうの方で倒れている金髪の二本角の鬼は、八夜威だな。

勝った………のか。

おお!!

体の傷も大分治ってきた。さっきまで倒れそうだったのに。魔力も回復してきたから、とりあえず八夜威を家まで運ぼう。すぐに目を覚ますだろう。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

「気が付いたか？」

「……………ここはどこだ？」

「俺の家だ。」

「そうか。私はあんたに負けたのか。」

「ギリギリだったけどな。」

「何を言っておる。私に勝った妖怪なんてあんたが初めてだ。勿論、鬼も含めてだ。誇っていいよ。」

「そうかい。」

「そつだそつだ、誇るがいい。それに、私はあんたが気に入った。名前が無いんだろう？私が考えた名前を使うといい。」

「で、その名前は？」

「髪が白い。それから、瞳は紅だ。炎を使う。吸血鬼。悪魔。」

うむ……………
炎魔^{えんま} 白^{はく}というのはどうだ？」

「炎魔 白、ねえ。なかなかいいな。使わせてもらおうよ。」

俺は今から、炎魔 白だ。白と呼んでくれ。」

「言われなくても、そう呼ぶさ。」

ちなみに、髪と瞳の色は初めて知った。確かに自分じゃ分からん。

ん．．．．．あれ？髪は普通に自分で見えるのに気付かなか
ったのか！？

「白、さっき私はあんたが気に入ったと言っただろう？」

「ん、ああ。っておい！！」

その後、俺は美味しく頂かれた。八夜威に。性的な意味で。

決着（後書き）

炎魔 白です。どうでしょうか？

まだ4話目なのに、次の展開が思いつかない
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

..... or z

人里？（前書き）

遅くなりました。多分これからは週に1度位の投稿になると思います。

あと、白と八夜威の設定画的な物を描くかもしれません。

人里？

危なかった。

何が危なかったかって？

.....自分で考えろや。

今、俺は霧化している。
いやー便利だなこの能力。こうなればもう物理的な攻撃は効かない。
さっきのは攻撃では無いが。

「白よ、何故逃げる？」

「自分で考える。」

「はあ、そうか。わかったよ。」

もうやらないから姿を戻したらどうだい？ 疲れるだろ？」

「うんにゃ、全然疲れない。」

「反則的だねえ、その能力。」

吸血鬼ってのは強いな。鬼と互角に戦える位。」

「俺以外の吸血鬼なんて知らないがな。」

一応レミリアとフランドールは知っているが、
多分逢うのは遠い未来だろう。

それに、ゲームでしか知らないのに「知っている」とは言えない。

「それより、そろそろ日が昇るけど？」

「え？マジで？」

ああああ忘れてた！！

今までは木で光が遮られてたから、昼でも太陽光なんて気にしなかった。

でもさっきの戦いで木なんて全部吹っ飛んだ。
主に最後の一撃で。

光が射してきた。

いま、どうやって太陽光を克服したかというところ、
「炎を操る程度の能力」で、自分に当たる光のみを「燃やした」。
つまり、太陽光は全て身体に届く前に無効化される。
しかも燃費がいいので、自分の身体を守る程度、疲れもしない。
我ながら完璧だと思う。いやほんとうに。

「さて、太陽光は克服したし、取り敢えず適当に歩き回るか。」

「賛成だ。ずっとここにいても何も変わらないしね。」

ただ、飛んだ方が楽だと思うけど。」

「どっちでもいいだろ。」

「巫山戯て言ったただだよ。」

まあ、取り敢えず人里でも行くかい？」

あつたのか人里……………

「そうだな。でも俺達が行ったら騒ぎになるんじゃないか？」

「私は角を消せば大丈夫だ。」

おお……………

角が消えた。消せるのか。

「肝心の消し方は？」

「ん？勘だよ、勘。」

「わかんねえよ。んつと、こつか？」

「おお、消えてるよ翼は。」

「翼以外は消す意味無いだろ。」

「それと、髪の色は大丈夫なのか？」

「髪が黒くない人間なんて沢山いるよ。染めてるだけだがね。」

「さて、行くか人里！！」

髪を染めている時点で里ではない気もするが。

「……………ん？待てよ。」

髪が黒くない人間がいるのが、「里」とは限らない。

今までにみた動物は、かなり昔のものだった。

少なくとも一万年以上昔の。

そんな時代の里に、髪を染めている人間がいるだろうか？

居ないだろう。絶対に。

もし、この時代の一般的な人里と、

八夜威の言う人里が別のものだとしたら……………

……………

ていうか、一万年以上昔の世界に人里なんて無くな？

「おいまで！！」

「何だい？」

「それは、『人里』って言うより『都市』じゃないのか？」

「ああ、まあ、そうだね。前からずっと人里って呼んでたから、今でもこう呼んでるだけだよ。」

「……………月人だ。間違いなく。東方だし。」

永琳に逢えるかもしれない。

本物に逢える……………逢えるよお！！

「八夜威、行こう。」

「ああ、ここにいても意味無いしね。」

俺と八夜威は、月人都市へ歩き始めた。

人里？（後書き）

長めに書いてみました。どうでしょうか？
次話は、二人の細かいキャラ設定でも書くつもりです。

×人里 未来都市（前書き）

月人です。はい。

ただ、それだけ。

投稿する間隔は、気分次第。

一話の長さも、気分次第。

でも、上手く書けなかったら、その日は諦めるといっ
．．．．．

白はこれからもっと強くなります。

×人里 未来都市

「うわああ!!」

「取り敢えず、到着だね。」

未来都市。

一言で表すなら、この言葉が一番合っている。

超高層ビル群、巨大モニター（3D）、謎の乗り物、

奇抜な服装で歩く人々、人型ロボット等々……

「すげえな。」

「そうかい？普通だと思うんだが。」

「そうか、そうなのか。これが普通なのか。」

「さて、ここには人間が沢山いるんだ。」

「ああ。つてえ?」

八夜威が人を捕まえた。見た目は十歳位の、銀髪の女の子。

そして、そのよう・・・少女を抱え、走り出した!?

「ちよっ・・・おい待てコラア!!」

「白!街の外に逃げるぞ!!」

「はあ!?!」

取り敢えず、ついて行った。

森のような場所で八夜威は止まり、少女を下ろした。
そして、此方に向き直って言った。

「さあ、喰おうじゃないか。」

「ざけんな阿呆」

少女は恐怖の余り、硬直してしまっている。
生憎、俺にこういう趣味は無いんだが。

「鬼が人を喰らうのは当然だろう?何を言ってるんだ?」

そうでした。

言動が余りにも人間臭いので忘れてましたよ。
だが、こっちは元人間だ。少女が喰われる所など見たくない。

俺吸血鬼なんですけど？

「どうか、礼をさせて欲しい。私の娘にとって君は
命の恩人のようなものだからな。」

そうだ！まだ翼は消したままだ！！

だから人間に見えたのか……………
ってゆーか、この人永琳の父さん！？

「とにかく、街へ戻ろうか。」

「い、いや……………お礼なんて俺には……………」

「はっはっは。遠慮しないでいいから、行こう。」

……………強制連行中……………
……………
……………
……………

……………八夜威はどうなったのだろうか？

ていつかあいつが逃げる位、強い兵器があるのか。

まあ、流石に殺されはしないだろう。

さて、俺が今いるこの場所は、八意家である。
家と言うより邸って感じの広さだ。

そういえば名家だったな。

そしてその名家に産まれた天才少女が、八意永琳。
だが、さっき見た永琳はゲームで見た時よりかなり幼かったので、
天才を発揮するのはこれからかと思う。

「……………まず最初に、君の名前は？」

「炎魔 白だ。」

「ええ、では白君、改めて礼を言わせて貰う。
娘を、永琳を助けて頂き、有難う。」

「あ、ああ……………」

もう流れに身を任せよう。疲れた。

「それと、これはお願いになってしまうのだが……………」

「何だ？」

「永琳を、貰って欲しい。」

「何故そうなるっ!？」

「鬼を追い掛ける勇気と正義感の本物だ。」

それに、君はなかなか良い顔をしているからね。」

駄目だこの人本気で言ってる。

ていうか、二つ目の理由の訳が分からん。

「まあ取り敢えず、永琳に会ってやってくれ。

あの子も君に会いたがっている。」

.....

永琳とこんな形で逢うことになるとはな!!

そして八夜威は.....死んで無いといいなあ。

兎に角、永琳に会いに行こう。

×人里 未来都市（後書き）

次回、遂に原作キャラ初登場！！

まあ子供ver.なので最初は余り永琳らしく無いと思われます。

そして白は永琳と結婚するのでしょうか？

八夜威は生きているのか？

天才はどうして天才なんだろうか（前書き）

永琳です。えーりんえーりん。

天才はどうして天才なんだろうか

俺は今、永琳の部屋へ案内されている。
えーりんパパに。

「なあ」

「何だね？」

「さっきの、冗談だよな？」

「さっきの、とは？」

「永琳って子を貰ってくれとかいう話。」

一応、永琳とは呼ばないでおく。いきなり永琳が
とか言い出したら不自然だろう。

「本気だ。」

「本気で？」

「うむ。」

駄目だこいつ早く何とかしないと……
まず、初対面のよく分からん見た目15歳位の（この世界に来てから能力などの事を10年は考察していたから、人間の頃も含めて約30歳。

ていうか吸血鬼になって少し外見が幼くなったが何故だろう。
ちなみに人間だった時は18歳の高3だった。受験生。
少年にいきなり娘を貰ってくれとか可笑しいだろうが。
こいつ本当に永琳の父さんなのか？

「ついで、永琳の部屋だ。」

普通の部屋である。予想外だ。

「永琳、開けるぞ。」

「どござ。」

ウィーン

……自動ドア!?

「今回、お前を助けてくれた炎魔 白さんだ。」

二人で話すといい。」

えーりんパパは帰っていった。

そして、永琳が話し掛けてきた。

「単刀直入に聞いわね。あなたは人間じゃ無いわね？」

流石は月の頭脳（になる予定）、見破るか。

「ああ。確かに俺は人間じゃ無い。
かといって、只の妖怪でも無い。」

「ええ。あなたから妖力は感じない。
ただ、妖力に似た力を感じる。」

「魔力の事か？」

「ふうん。それは魔力って言うのね。面白いわ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・しかし、何だこの余裕は？」

俺の存在を見抜いても、恐れない。

八夜威に攫われたのは態とか？

十中八九、態とだろう。

ならば何故、態と攫われるような事をしたのだろう？

「・・・・・・・・・・私が何故、態と攫われたのか分からないって顔
ね。」

「ああ。」

「頼まれたの、軍に。」

「は？」

「軍は、いや人々は、妖怪を全て駆逐するつもりよ。」

確かに、人間が妖怪を退治するのは世の常だ。

それは、妖怪が人間を襲うからである。
だがしかし、困まで使うとは……………

「やりすぎ、だな。」

「そうね。私は正直、軽く退治する程度でいいと思うわ。
あなたみたいなの、人を襲う気がない物もいるみたいだしね。
それと、さつきから話が逸れたけど、あなたは何者？」

「俺は吸血鬼だ。」

「吸血鬼？初めて聞くわ。」

「そうなのか？」

「ええ。それに、魔力なんていう力も初めて知った。
まあ、妖怪が現れてからまだ8年しか経って無いし、当然かしら
ね。」

……………

8年……………だと……………!!?

俺は10年は生きてるぞ。勿論、吸血鬼としての10年だ。
って事は、俺は最初か、最初から何番目かに生まれた妖怪って事？
俺、まさか始祖か！？ その可能性は限り無く高いしな。
じゃあ、弱点も無い……………事は無いか。蒸発し掛けたし。
まあでも、日光以外は大丈夫なのかも知れない。

ていうか本能が大丈夫だと言ってる（気がする）。

「じゃあ、俺はそろそろ帰るよ。」

「帰る場所も無いのに？」

「……………全てお見通しか。」

「まあ、暫くは泊まっても良いんじゃない？」

「父上も許可するでしょう。それに、ある程度の実力がある人間に見つかれば、

たとえ貴方程の力があろうと苦戦は必須だし、何より犠牲者が出る。

そして、『穢れ』が発生する。私は別にかまわないのだけどね。」

「つまり、無駄な戦いは極力避けたい、と言う事か。

わかった。泊まらせて貰う。」

「ええ。でも、正体は隠してね。」

「……………今更だが、永琳は俺が怖くないのか？」

「自分に敵意を向けていない者に対して、恐怖を抱く意味は無いわ。」

「そうかい。」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

もう夜になってしまったので寝る。吸血鬼なのに。
ちなみに場所は、永琳の隣のベッド。
隣で良いのかと聞いたが、なんだか安心して言うからって言われた。
一応は悪魔なんだけどなあ。

そしてその頃、八夜威は独りで退屈していた。
人間は片付けたらしい。

「永琳……………」

「何？」

「お休み。」

白は、眠りに付いたらしい。

「ええ……お休みなさい、白。」

注) 永琳はまだ10歳です。

天才はどうして天才なんだろうか（後書き）

永琳の口調をもう少し幼くしたかった。

約束（前書き）

永琳が可愛い。

約束

何故か永琳の家に住み着いてしまった。

そして、もう5年が過ぎた。

やはり、永琳の話によると、もうすぐで月に移住するらしい。

ただ、今の人間は穢れを持つ者と持たない者がいて、移住が認められるのは前者のみだという。

勿論、永琳は前者である。ちなみに俺も、移住する気は無いが。

案の定、永琳はその計画の一端を担っているのだが、本人は余り、乗り気では無い様子。

何故かと聞いてみたら、

「だって白は地上に残るんでしょっ？」

だってさ。

いや、嬉しいよ？それもかなり。

でも、やっぱり原作の歴史は曲げない方がいいと思う。

ていつか曲げたく無い。

だから、

「死ぬ訳じゃ無いし、いつかは会えるだろ。」

って言っといた。

嘘は言ってない。

そしたら、

「たしかに、私やあなたにとって、寿命なんて無いようなもの。それでも、会えないのは、辛いのよ？」

だって。

惚れてまっやるー！ー！ー！

「でも、何を言っても私は月に移住しなければならないのよ。

そしてあなたは地上に残る。

だから、私が月に行っても、私の事を忘れないでね？

そうなくても、いつかは会えるって、信じ続けるから。」

「ほふえふえまふやるおー！ー！ー！ー！」

「え？」

「すまん、何か急に叫びたくなって……………」

「……………やっぱり、白は面白いわね。」

なんか元気が出たわ。暫く会えないけど、また会える迄は頑張らないとね。」

「そうだな。俺も死なない様に頑張るか。
滅多なことじゃ死なないけど。」

実際、この5年間で多少は強くなった。

まず、能力が更に強くなった。

具体的には、元々優秀だった燃費が二倍位良くなったのと、
物体などの温度を上げられる様になった。後者は鉄を溶かす位がま
だ限界だが。

日光以外の弱点も克服した。主に気合いで。

流水は、川を何度も往復した。永琳に押されたらできた。

大蒜は、食事に混ぜられた。勿論、永琳に

まあ、おかげで克服できた。結果オーライ。

しかし、銀の武器や鱒の頭、炒った豆、十字架なども弱点の筈なん
だが、

これらは何故か大丈夫だった。始祖だから？

だが、未だに日光は能力で防ぐしか無い。

能力を解いた瞬間から蒸発し始める。が、俺の能力は非常に燃費が
良いので

魔力の枯渇で能力が発動出来なくなる可能性は限り無く0%に近い。

「確かに、白が死ぬなんて想像出来ないわ。

だから、私が月に移住して、それからもう一度会うときは必ず笑
顔で、ね。」

「ああ、約束するよ。」

月移住計画実施迄、残り1年と10ヶ月

約束（後書き）

八夜威はそのうち再登場させます。

そして前書きでも書きましたが、永琳が可愛いです。

ちなみに今の永琳は見た目が14、15歳位のイメージです。
白と同じ位ですね。それか少し下。

危機と和解、友人の死（前書き）

なんか調子が良いので4日連続で投稿出来ました。

危機と和解、友人の死

今日も良い天気だ。少し嫌だけど。

そして、月に移住する迄の期間が、残り丁度一年になった。

俺と永琳は、更に仲良くなった。

ずっと一緒に居たから、仲良くなるのは当然かも知れない。

でも、これから永琳は更に忙しくなり、段々と会えなくなっていくだろう。

だからこそ、今は永琳と一緒に居たい。

しかし、月移住計画実施迄残り十ヶ月になった丁度その日、俺は永琳から嫌な話を聞く。

「実は、異常なほどに増長した妖怪達が攻めて来ているらしいの。

数は少なくとも二万、多くて五万で、あなた程では無いけど大妖怪も沢山いるらしいわ。」

これは流石に今の軍でも勝てない。」

「何故だ？ 人間が絶滅すれば妖怪もいずれ滅びる。

それは妖怪達も分かっている筈。」

「嫌気が差したみたいよ。人間に支配され尽くしたこの街に。」

「それを壊せるなら自分達が滅びても良い、と言う事が。」

「人間全員を月迄運ぶシャトルはまだ出来ていないし、勝てる訳でも無い。つまり、もう終わりよ。」

「確かに全員では逃げられない。月迄は、な。」

「うん。つまり、月迄逃げられるのは私や月夜見などの高位の者のみね。」

他の人達は？」

「俺が戦って、被害を抑える。」

「無謀ね。」

「確かに無謀だな。でも、それ以外に方法が思いつかないし、霧化や再生能力が有るから善戦は出来るだろうし。」

「……………死なないって約束してくれる？」

「ああ。」

約束が二つも出来てしまった。でも、これのお陰で俺も頑張れる。だから、絶対に死ぬ訳にはいかないな。

「もう日付が変わるし、もう寝よう。」

「そうね。お休みなさい。」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

爆発音で目が覚めた。

地面が、空気が揺れている。

まさか ! ?

「永琳起きろ!!」

「え？」

「外で妖怪と人間が戦ってるんだ!!」

「嘘 でしょ! ?」

「全部本当だから早く逃げるぞ!!」

取り敢えず逃げないとヤバイ。今の永琳はまだ寿命が無いだけで致命傷を受けたら終わりだ。

安全な場所は 核シエルトー!!

確かこの家の地下にあった筈

見えた!! ここなら大丈夫だろう。

街の中心で、妖怪の軍団と人間の軍隊が睨み合っている。そしてやはり、妖怪軍団の先頭には八夜威がいた。

妖怪が痺れを切らし、妖力の光線のようなものを大量に放つ。それと同時に、人間もレーザーキャノンみたいなのを放つ。

しかし、どちらも目の前の敵に届く前に消滅
否、焼滅した。

まあ、俺がやったんだけど。

俺は、人間と妖怪の間に姿を現した。
人間には隠していた翼を広げて。

「妖怪共おおお！！それと人間共おお！！
俺の話を聞けえええ！！」

妖怪も人間も、突然現れた俺に対して驚愕している。

「お前、白・・・・・・・・・・だよな？」

人間が聞いてきた。永琳と一緒にいたら有名になってしまった。

「そうだ。」

「妖怪だったのかよ、お前・・・・・・・・・・」

「ただの妖怪では無い。俺は吸血鬼だ。」

それから、俺は戦いを望んでいないし、どちらの味方と言っ訳でも無い。

強いて言うなら、戦わないと言う方の味方だ。
今回のこの戦いを起こしたのは妖怪側だが、
人間も妖怪を無差別に殺し過ぎた。悪いのは両方。
つまり、どっちを責める訳でも無い。
だから、この戦いを止めてくれ!!」

「そう言う訳にはいかないねえ。」

やっぱり出て来たか、八夜威。

「ならば、どうすればこの戦いを止める？」

「そうだねえ、白が私に勝ったらいいだろう。」

瞬間、八夜威から巫山戯た大きさの妖力が湧き出た。
あいつ………前よりも更に強くなって
いる。

殴り合えば負ける。確実に。

「いいだろう。ただ、八夜威が負けたら大人しく引き下がれ。」

「いいよ。負けないから、ね。」

大した自信だ。妖力を見る限り満更でも無いようだが。

「じゃあ、そこのあんた!!」

「は、はいっ!!」

「初めの合図、やって。」

あと、全員離れてて。少なくとも1km以上は。」

「でも……………」

「大丈夫だ。必ず勝って、妖怪達には帰って貰うから。」

「わ、わかりました。」

人間達と妖怪達が離れた。

そして、さっきの人がピストルを天に向け、撃った。

その音と同時に俺は八夜威に接近し、殴り飛ば……………ない!?

「確かに、速過ぎて見えないよ。」

でもその程度のパンチでは私は倒せない。」

「っ!! マジかよ……………」

左腕が消し飛んだ。ただの横薙ぎで。

だが、痛みはほぼ無いし、もう再生した。

……………あれを試すしか無いな。

「はああっ!!」

「へえ……………面白いじゃ無いか。」

魔力を注ぎ込み、爪を約50cmまで伸ばした。強度も申し分ない。

そして、翼も巨大化し、全身には最高の熱量を持った炎を纏う。

普通なら触れた瞬間に絶命してしまう程強い炎だが、

相手が相手なので全力で掛かる。

「驚いたよ。まさか此処まで白が強かったなんて。」

「降参するなら今の内だ。」

「降参？ そんな事をする理由が無いよ。」

八夜威の目が変わった。本気を出すのだろう。

やはり、雷を纏った。

立っているだけで八夜威の周りの地面が陥没し、クレーターが出来ている

俺？ 地面が溶けてるけど何か？

「いくよ、白！！」

八夜威に、懐に潜り込まれた。俺より速いな。いつもの俺よりは。

「はっつ！！」

「そんな遅い攻撃、俺には当たらない。」

「だろうね。だから次は本気で行くよ。」

言い終わると同時に、全開のスピードで八夜威に接近する。

あちらも、全力全開で走って来る。だが、やはり速さでは俺の方が断然速い為、

炎を纏った爪が八夜威の肉を裂いた。

しかし、その腕を掴まれた。

「まずっ！」

「貰ったあああ！！！」

そのまま、殴られ続ける。全身に雷が走り、霧化も出来ない。骨が砕ける感覚と痛みが脳を支配し、まともに思考が働かない。体に纏った炎は八夜威の雷で相殺……。迄はいかないが、八夜威へのダメージを軽減している。このままでは、殺される。

「どうした、お前はこんなもんじゃ無いだろ！！！」

「ツク……………ガハアツ……………」

「……………何だい、もう終わりか？」

「……………」

攻撃が緩んだ。今しか無い。

「お前の負けだ、八夜威っ！！！」

俺は、腕を掴まれた時から溜めていた炎を八夜威に放った。

……………

.....

ここは ?

ああ、永琳の部屋だ。

「馬鹿、馬鹿よ、あなたは

もし、死んじゃったら、どうするのよ

「.」

「永琳」

視線を横に向けると、永琳が泣いていた。

そつか 永琳が看病してくれたのか

.
本当に、俺は馬鹿だ。

永琳を泣かせてしまうなんて。

「私が核シエルターから出て、助けに行かなかったら、
死んじゃってたかも知れないのよ」

「そつか、ごめん。ありがとう。」

俺はそのまま、疲労のせいもあって寝てしまった。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

次に目が覚めると、永琳の寝顔が目の前にあった。
膝枕である。超ドキドキしたよ。

俺は起きて、膝に永琳の頭を置いた。寝苦しくないように。

やっぱり、綺麗な顔だよなあ。

みたいな事を考えながら微睡んでいたら、永琳が起きた。

「おはよう、永琳。」

「お、おはよう、白.....」

おや？ 永琳の顔が赤くなってる。

ちなみに今は八夜威と戦った次の日の朝。

「顔が赤いけどどうしたの、熱でもあるのかな？」

「あっ.....」

態とらしく言っつて、額を合わせる。目を逸らさずに。

「熱は無いみたいだね。」

「分かつてる癖に……………」

とかやってイチャイチャしてたら、永琳パパから呼ばれた。

何かと思っ行ってみると、外に行けば分かるとの事。

取り敢えず永琳と外に出ると、軍の隊長とかこの街のお偉いさんとかが沢山いた。

「まず、再確認させてくれ。君は本当に吸血鬼という妖怪なのか？」

「ええ、まあ。」

翼を広げると、何か神々しいとかなんだと言われた。

悪魔なのにねえ……………」

「白君、君には感謝してもしきれないよ。君がいなければ、

この文明は滅びていただろう。」

「俺は、勝ったんですか？」

「ああ。君と戦った鬼は、死んだ。

君の最後の一撃は、途轍もない威力だった。

鬼は体の一部も残らなかったそうだ。」

「そう……………ですか。」

「これからは、その翼は隠さなくて良い。

私達は君に助けられたんだ。騒ぎになったりはしない。」

特徴は、魔力より（俺は2つしか持って無いから分らんが）、力強い事と、使いやすい事。
消耗した場合、信仰があれば回復する。
つまり、信仰が無ければ回復しない。

ちなみに、なるうと思えば神になれる。悪魔なのに。

月移住計画実施迄、残り9ヶ月

危機と和解、友人の死（後書き）

八夜威が死んでしまいました。

誰がこうなると想像しただろう？

それと、白と永琳の仲が更に親密になりました。

あと1年も一緒にいられないなんて、可哀想すぎますよね。

まあ、筆者のせいですね。はい。

別れと旅立ち

八夜威との戦いから、丁度10ヶ月が経った。

つまり、月移住計画が実施される。

永琳とも別れてしまいが、また会えるだろう。
ていうか会う。輝夜を迎えに来る時に。

「永琳……………」

「ええ。」

シャトルが発射される迄、残り5分だ。

「白、これを。」

「え？何故に？」

永琳が俺に渡してきたのは、日本刀だった。

全長約100cm、反りは約4cmで、白い柄に黒の鞘と鐔。
鞘を抜くと、美しい銀色の刀身が煌めいた。

確かに綺麗だし切れ味も良さそうだが、俺はこれ以上強くならなくていい。

それは永琳も理解している。なのに何故だ？

「その刀には白の炎を弱める力と、『ありとあらゆる物を切断する

程度の能力』

があるわ。あなたの血も使って造られたから、折れたり刃こぼれがあっても

自動的に再生する。強度もかなりの物だから、折れないと思うけどね。」

「つまり、俺の炎が強すぎるから制限を掛けるって事？」

「それもあるけど、一番の理由は私を忘れないでって事よ。」

「ありがとう。大事に使わせて貰うよ。」

別に忘れるつもりなんて無かったが、貰っておこう。格好いいし。

「もう時間ね……………」

「今までありがとう。またいつか、会いましょう。」

「ああ、『またな』。」

永琳がシャトルに乗り込んだ。そして間もなく、飛び立った。

俺はそれを、見えなくなるまでずっと見ていた。

……………

別れと旅立ち（後書き）

月人編、完

言ってみたかったですよコレ。いやほんとうに。

あの日本刀はチートですが、その分あのチートな能力が弱まります。太陽光を防ぐぐらいは平気ですが、かなり弱くなりますよ。つまり、白の強さはそこまで上がりません。

旅の始まり（前書き）

今は紀元前一万年ぐらいです。
そして予想外の展開になると思いますよ。

旅の始まり

丘のような場所に着地した。

飛び続けるのもなんなので、少し歩く事にする。
ちなみに翼はしまえるようだ。消す意味無かったな。

翼をしまうと、魔力と神力が自分の中から感じなくなつた。
やはり使えなくなっているが、抑え込まれた感覚に近い。

そして、代わりにとも言うように違う力が出てきた。霊力である。
元は人間だったし、あってもおかしくない気がしないでも無い。

絶対値は一般人（月人）が1だとすると5ぐらいある。

霊力5か、ゴミだな……………

ちなみに霊力の少なさ（本来は修行をしないと増えないので普通に
考えると多い）

と刀の能力の問題で、炎が余り出ない。

一応、この刀の能力は全てオン・オフとハイ・ロウが出来るようだ。
普段から何でも切れたら鞘が切れるし、出来て当たり前かもしれない。
い。

それで、人間状態（これからこう呼ぶ）のまま、

刀の「〳〵程度の能力」を抑える力をオフにして、能力を発動。

おお……………さっきの10倍は出てる。そんなに抑えられ
てたのか。

流石、永琳の作った刀だ。

「ありとあらゆる物を切断する程度の能力」はどこまで切れるんだ

ろう？

立ち止まり、考える。

ていうか刀はどこに差しておこう・・・・・・・・・・・・・・・・

やっぱ腰かな、抜刀する時に便利だし。

刀に付いていた白の紐を、上着ごと腰に巻く。

右脇で紐を結び、左側に刀を差す。

よし、いい感じになった。鏡が無いから確認は出来ないがね。

そして、柄に右手を添える。今から実験をする。

方法は簡単。目の前の空間を切るだけ。

俺の予想通りなら、素敵なスキマが開く筈。

「開け・・・・・・・・・・スキマッ!!」

「それを言うならゴマでしょう。」

スキマが開いたと思ったら、ゆかりんに突っ込まれた。

「あ・・・・・・・・・・あががが・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・!!」

「あら、人のスキマに入って来ておいて挨拶も無し？」

紫さん登場早くないすか？

まだ月人が月に行っただばかりですよ？

「まさかスキマの中に人がいたとは・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「妖怪よ、人間さん？」

「いや分かってるけども。」

「……………まあいいわ。それより、何故あなたがこんな刀を持っているのかしら？」

「見るか？」

「ええ、是非とも。」

刀を鞘に入れたまま腰から抜いて、紫に渡した。

紫はそのまま刀を眺めていたが、20秒程経つと鞘から刀を抜いた。美しい銀色の刀身を、舐め回すように観察している。

そしてそれが終わると、俺に質問をしてきた。

「もう一度聞くけど、何故あなたのような人間風情がこんな刀をもっているの？」

確かに、霊力は一般人の10倍ぐらいはある様だけど……………
……………不釣り合い過ぎるわ。」

「ああ、翼しまったままだったな。」

今までしまっていた翼を広げる。

同時に、魔力と神力が溢れ出し、霊力が抑え込まれる。

「妖怪だったのね。妖力は感じないけど私と同レベルの大きさの魔力、

それからその半分ぐらいの神力……………」

何でレベルなんて言葉を知っているのか知らないが、気にしたら負けだ。

それが幻想という事だと俺は考えているので、追及はしない。それと、驚いていないのは予想していたからだろう。

「何か分かったのか？」

「あなたは、吸血鬼ね。それも始祖。違うかしら？」

「違うない。」

「そして、月人達を救った変わり者の妖怪ね？」

「……………その通りだ」

ここまで見破るとは、流石に驚いた。

「弱点を克服した吸血鬼なんて、それしか思い浮かばないもの。」

「成る程、しかも神力を持っていたから予想出来た、と。」

「そついつ事よ。」

頭良いな。いや分かってたけども。

「ふうん……………」

紫が何か考え込んでいる。

何故か、嫌な予感がしない。

「そついえばあなた、名前は？それと能力も」

「炎魔 白。『炎を操る程度の能力』を持っている。お前は？」

知っているが聞いておこう。聞かないと不自然だろう。

「八雲 紫。能力は、『境界を操る程度の能力』よ。」

知ってる。口には出さない。出したら………どうなるんだろ？

「あなたには、私の友人になって貰うわ。」

胡散臭さが無い。これは本心から言っているようだ。それが分かれば、断る理由は無い。

「ああ。よろしくな、紫。」

「うふふ、ありがとう。」

ゆかりんが仲間に加わった。

「さて、これから旅を始めようと思うんだが、一緒に行くか？」

「勿論よ。特に予定も無いしね。」

旅は道連れ。

これは妖怪でも悪魔でも変わらない。

旅の始まり（後書き）

ゆかりんが登場しました。早いです。

でも原作設定では「少なくとも千年以上は生きている」としかないので、

別にいいですよ。ね？

まあ、実際は白の話し相手が欲しかっただけです。

因みに、人間状態時の身体能力は通常時の1/4ぐらいです。それでもかなりの物ですけどね。

遺物処理 - 前編 - (前書き)

PV数三万、ユニーク五千を超えました。

まだ初めてから1ヶ月も経って無いのに、こんなに読んで貰えて嬉しいです。

これからも頑張りますので、よろしくお願いします。

それと、感想など書いて頂けると作者のテンションが上がります。

「そういえば、残った月人の事だけど……………」

紫が話し掛けて来た。

残った月人がどうしたのだろうか？

「滅びたらしいわ。」

「まじか」

「まあ、やったのは私なんだけれどね。」

「まじか」

あの兵器を持った人間、もとい月人を滅ぼすとは……………

紫の能力ってやっぱチートなんだな。

「あなたはやるうとしないだけじゃない？」

「心を読まれた!？」

「予想して答えただけよ。もっとも、能力を使えば読めるけど、それと、あなたの能力もかなりの代物よ?」

「そーなのかー」

「.....まあいいわ。」

「瞬殺気を感じたが、気のせいだろう。」

「兎に角、月人の街をどうにかしなくちゃ.....」

「そうだな、月に送り返す.....とか？」

「名案ね。じゃあ手伝ってくれる？」

「いいけど、何をすればいい？」

「あの街を丸ごと飲み込めるスキマなんて、私一人では開けないわ。だから、私の開いたスキマの横にもう一つ、大きなスキマを開いて貰うわ。」

「そしてその二つのスキマを紫が繋げ、巨大な一つのスキマにする、と？」

「その通りよ。」

.....
あの街を飲み込むサイズのスキマか.....

この刀でどれだけ大きなスキマが開けるだろうか？

因みに「ありとあらゆる物を切断する程度の能力」は、離れた物を切る事も可能だ。

つまり遠くの岩に刀を振ったら切れる、みたいな事である。

しかも切れる範囲は刀を振った軌道上から刀身と平行に、放射状に広がるので、

巨大なスキマを開く事が出来る。

しかし、力の消費が激しすぎるので多用は出来ない。

特に人間時は一日二発程度が限界なので、控えたい。

勿論、射程の長さにもよるが。

「取り敢えず、行きましようか。」

「ああ。」

俺達は、紫の開いたスキマに入って行った。

遺物処理 - 前編 - (後書き)

永琳の作った刀

やり過ぎたとは思うが反省はしておりません。

今更ですが刀に使われた血は、白が寝ている時に永琳が採血した物
です。

それと紫が紫らしく書けているかが不安。

「うん、成る程これはひどい……………」

月人の街（だった場所）に到着した。
なんとまあ綺麗に人間だけ消えていて、
建物の状態は変わっていない。

「さて、やるわよ。」

「行動が早い!!」

よし……………準備完了だ。」

翼を広げ、鞆に手を掛ける。

刀には有りつたけの魔力と神力を込めて、紫の合図を待つ。

俺は迷ったあげく、居合切りで行く事にした。

そういえばスキマの中で説明を受けたんだが、一回だけでは月まで
は送れないらしい。

街を一旦スキマの中に移した後、月に行ってからもう一度スキマを
開くんだとか。

面倒くさい上に、出来るかも怪しいが、紫を信じよう。

「いくわよ!!」

街の半分位の大きさのスキマを、紫が開いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ！！！」

そのすぐ横に、出来るだけ大きいスキマが出来るように剣を振った。魔力と神力がガツツリ持つて行かれる。

それと同時に、街の三分の二程度の大きさのスキマが開いた。あとは、紫が二つのスキマを繋げ、街を飲み込むだけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・思ったより難しいわね。」

「俺の魔力も使え、紫。」

スキマを操作している紫の手に俺の手を重ねる。俺の魔力を紫に流し込み、使える様にする。

「ありがとう。これなら・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おお・・・・・・・・」

二つのスキマが繋がり、巨大な一つのものになった。そして、間髪入れずにすぐ街を飲み込んだ。

「ここ迄は成功か。」

「ええ、白のお陰ね。」

あとは夜を待って、湖に映る満月の『偽物と本物の境界』を弄って月に行くわ。

まだ月人は着いて無い筈だから、着いた時は驚くでしょうね。」

紫が、まるで子供のような笑みを浮かべる。ババアのかけらも無い。逆に今まで（吸血鬼になる前）ババアとか言ってた俺は馬鹿かと。

ていつか今日は満月だったな。忘れてた。

そういえばレミリアも言ってたが、満月の夜は力がいつもより大きくなる。

「満月の夜は最強」ってのは、満更でも無いようだ。

「さて、夜になる迄どうする？」

「白は魔力が回復するまで休んで。

私は、あなたのお陰で疲労は無いから……………

……………」

「無いから……………?」

「あなたの看病をするわ。」

「……………変なことするなよ?」

変なこと 記憶を覗くとか

「分かってるわよ……………」

じゃあ、私が一瞬であなたの魔力を回復させてあげるわ。」

「まじで?」

瞬間、口元に柔らかな感触が……………ってえ?

「んっ……はぁ……
どう？回復したでしょう？」

「//////////」

……魔力が回復が全快している。能力だりようか？

……(; ;)

「『多と少の境界』を弄ったわ。」

紫が何か、潤ってる。とぅるーん、つてな感じに。

こ……こ……こいつ……
俺の……ふぁ……ふぁーすと……
……キスを……
……

永琳ともしなかったのに！！
そついう感情は無かったがな！！！！

「あら、意外と初つひなのね？」

「D A M A R E」

「嫌だつたの……？」

止めるそんな潤んだ目で俺を見るな上目遣いをやめろ！！

許してしまうだろうがー!!

「……………紫は、嫌じゃ無かったのか？」

「ええ。嫌だったらやらないわよ。」

ずっと思考停止しててもしよーが無いので、思考を取り戻した。今回の事は……………いいか。実際、嬉しくないと言えは嘘になるし、紫も後悔してないみたいだしな。反省はしている様だ。

「……………で、夜までどうする？」

「そうね、もう夜にするわ。」

「え？」

瞬間、夜になった。

な、何を言っているか分から（ry

兎に角、夜だ。

「『昼と夜の境界』を弄ったわ。」

「もう驚かん……………」

遺物処理 - 中編 - (後書き)

ゆかりん超絶チートです。

多分、白と戦えば負けると思いますが、基本的には白よりもチート。
紫の見た目は15歳位。異論は認めない。

遺物処理 - 後編 - (前書き)

二重黒死蝶って難しいですよね。
まあ、取得済みなんですけど。

少年・少女移動中・・・・・・・・・・・・・・・・

到着。湖だ。水面には満月が映っている。

最初は、こんな方法で本当に月まで行けるか不安だったが、紫の能力が予想以上にチートだったから行けるのだろう。

ちなみに、ここに来る最中に雑魚妖怪共が襲ってきたが、俺がそいつらの体の温度を上げたら蒸発した。弱すぎだろう。

言い忘れていたが、ある程度の妖力がある妖怪（俺の10分の1ぐらい）

なら、直接温度を上げて蒸発させる事はできない。

俺は、魔力の量自体はそれほど多くないので、この能力は戦闘に向いていない。

ていうかさっきの雑魚妖怪は、これを説明する機会を作りに来たのだろうか？

そうとしか思えない。

「さて、行くわよ。」

「おっ。」

湖に映る月が真っ二つに切れて、スキマの様に開いた。ていつか俺でも出来そうな気がする。

「白でも出来るんじゃない？」

「まじで？今度やってみるか……………」

驚かないぞ、読まれても。

「後に続いて。」

「了解。」

紫は湖に映る月の、裂け目の中に飛び込んだ。

俺も紫と同じ様に飛び込む。

するとあらびつくり、月に出た。

呼吸が出来るので空気はある様だ。

「ここは『裏の月』。空気があるのはその為よ。」

「原理は教えてくれなくて結構だ。」

頭が痛くなりそうだからな。

「分かりやすく説明してあげようと思ったのに……………」
「まあいいわ。それより、始めましょうか？」

「そうだな。スキマは俺一人で大丈夫だ。」

「じゃあ、私はスキマを地上に繋げて街をもってくるわ。」

「それじゃ、あと10秒で始めるぞ？」

「大丈夫よ。」

地上でやった時と同じ様に翼を広げ、刀に魔力・神力を込める。
そういえば神力は歩いてたら回復した。

そして、精神を集中する。

抜刀まで、残り4秒

3

2

1

.
.
0

瞬間、あの街の1.5倍は有る巨大なスキマが開いた。

そして、スキマから旧月人の街が出て来て、月面に街が出来た。

「ふう、無事に成功したわね。」

「ああ。だが疲れた。」

「一人であんな馬鹿みたいな大きさのスキマ開いて、疲れない訳が無いわよ。」

「そう……だな……」

「ちよつ……白……?」

紫に向かって倒れてしまった。流石にもう立てない。

「紫……」

「なに……?」

「ナイスキャッチ。」

「……落とすわよ?」

「冗談だよ。ありがとう、ゆか……り……」

「え?ちよつと白!?!?」

俺は、そのまま寝てしまった。

遺物処理 - 後編 - (後書き)

某月抄では、紫が湖に映っている裂けた月に傘を刺していましたが、今回は二人だけだったのでやりませんでした。

ご意見・ご感想など御座いましたら気軽にどうぞ。

恋と愛の境界（前書き）

今更ですが、このハンドルネームの由来について説明を少々。

この小説を書こうと思い付いたとき、作者は永夜抄EXをやっていた。
ました。

まあつまり、不死「火の鳥」 - 鳳翼天翔」の丁度その時に思い付いたんです。

それで、鳳翼天翔を崩してほーよくてんしょーになりました。

ちなみに、タイトルに意味は無いです（オイ

恋と愛の境界

s i d e - 紫

白は私に倒れ掛かったまま寝てしまった。本当に変な奴。

私しか開けないスキマを開いて、其処にいた私を見ても驚いていなかった。

しかも、巫山戯て驚いたふりをしたりした。

スキマは刀で開いた様だったから、刀が強いただけだと思ったのに、私に「見るか？」などと言ってきた。刀の力は異常な物で、

何故、人間がこんな物を持っているかと聞くと、
巨大な翼と魔力・神力を出した。吸血鬼だった。

その時、私は疑問しか無かった。

何故、私を警戒しないのか気になっていた。

普通、目の前に妖怪がいれば警戒する。鬼などならすぐに戦いになる場面だ。

でも彼は警戒などしていないし、力が拮抗している事も理解している。

（ちなみに、彼が吸血鬼の始祖で街の救世主の妖怪である事は

この時には理解していた。聞いたらやはりそうだった。）

名前を聞いたら、普通に教えてくれた。

しかも、私の名前も聞いて来た。

やはり、警戒心は無い。

私はその時、彼の心を覗いてやっと分かった。

私を、昔からの友人のように思ってくれている、と。

凄く嬉しかった。彼がそう思っている理由なんてどうでも良かった。

そして私は彼を、何故か懐かしく感じたのだ。

だから、友人になろうと決めた。

変な奴ではあるけれど、私は彼を好きになってしまった。

恋愛的な感情では無いけれど、いずれはそうなるに分かっていた。

彼は、私が友人になってと頼むと、よろしくと言ってくれた。

私はそれから、彼と行動を共にする様になったのだ。

私は眠ったままの白を連れて、月から地球に戻った。

私は自分の家の部屋で、白を膝枕した。
暫くは、こうしていたいと思っている。

.....
.....
.....

side . 白

目が覚めると、紫に膝枕されていた。

「あら、目が覚めたの？」

「うん。」

取り敢えず起きようとすると止められた。なんぞ？

「もう少し、このままで居させて？」

「あ、ああ。」

紫が本気で言ってきたので、このままでいる。
紫の膝枕上手いし。永琳と競える位。
あと、男としては嬉しい状況だしね。

それに、紫の肌の体温に触れていたいと思った。
何故か、懐かしい様な、落ち着くような気がしたからだ。

俺は、紫と友人になれて本当に良かったと思う。
キスの件は.....どうしようか？

「ねえ、白？」

「ん？」

「その、ね？ もう一度だけ、キスしても、いい？」

おいそんな簡単にしちや駄目だろ。好きな人とだけしろよ。
.....したくないと言えば嘘になるがな!!

「そういうのは好きな人としろ。」

「好きな人にしようとしてるわよ.....
.....」

「え!?!？」

つまり、俺が好きって事が.....

「ごめん、俺、気付けずに.....
.....」

「馬鹿あ……………」

「キスするから、泣くな。」

「え……………ほんと……………に?」

「ああ。」

以下省りゃあああつつく!!

キスは朝まで続きました。ヨクアキナイナ―

恋と愛の境界（後書き）

えっと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ラブラブです!!

今日の後書きおしまい!!

世斬（前書き）

全国の皆さん、すいませんでした。
今すぐ避難して下さい。

世斬

刀の名前はとうしようか……………

「なあ、紫？」

「なに？」

「俺の刀の名前、分かるか？」

「無いんですよ。前、観察した時に分かったわ。」

紫マジチート。

「無いのか。じゃあ与えてやらないとな。」

「そうね。名を与え、その名を理解して使わないと本来の力は発揮されないわ。」

「そうなのか。初めて知ったよ。」

「で、私がずっと考えてた名があるのだけど……………
……………」

「俺が気に入ったら使うよ。」

「世斬よきざ、よ。」

「痛し」

痛いぜゆかりん。あんた中二病なのか？

「まあいいわ。痛いのは分かってたしね。」

「……………じゃあ、その名の意味は？」

「『この世界をも、一太刀で斬り伏せる』、という意味よ。」

「大袈裟だろ。まあ、出来なくも無いだろうけど。」

「気に入ったかしら……………?」

「ああ。語呂もいいし、完璧だ。」

「あら、ありがとう。」

「どづいたしまして。」

おお!? 刀から力が湧き出て来る。なんぞこれ？

「名前を与えられて、本来の力が解放されたようね。」

「体の一部になったみたいな感覚だ……………」

おお！ 霧化出来た。」

「あら、予想以上ね。」

「でも刀は常に腰に差しておくよ。」

「ええ、その方が似合ってるわ。」

刀の霧化を解き、腰に差し直す。

「月に街送ったり刀の名前が世斬になったり、色々あったけど、そろそろ旅を再開しよう。」

「ええ、行きましょう。目指すは……………」

「東の方だ。」

俺達は、長く続くであろう旅を再開した。
東へ向かって、歩いていく。

「白っ」

「ん？つむ……………ん……………」

紫が何かある度にキスをして来るんだが、
ん？ そう言えば無くてもして来るな。

まあ、いいや

この時、俺は世斬の本当の能力を知ってしまった。俺の一部になった事で、伝わってきたのだ。

だがこの能力を紫に教える気はないし、使う事も無いだろう。

この世界の概念的なものをねじ曲げる程、強大な能力なのだから . . .

.

世斬（後書き）

言うことはありません．．．．．
ただ、うちの主人公を呪い殺さないでください。

刀の名前が痛くてごめんなさい。
でも、刀の名前は痛い相場は決まっていますのですよ。

旅を始めて二千年（前書き）

一回データがとびました。

発狂して何故か紅魔郷 Lunatic ちゃったらクリアしました。

残機3つ、ボム2つ残しで。

いつでもあれぐらい出来ればいいのにな。

旅を始めて二千年

紫と旅を初めてから、約二千年が経った。

最近は人口が急激に増加した。

勿論、妖怪も大量に生まれた。

妖怪は、人間を襲い始めた。

そして人間も、妖怪を退治するようになった。

つまり今、人間と妖怪の永い戦いの歴史が始まったのだ。

．．．．．いや、月人の時代が終わると同時に止まった歴史が、

再び動き始めたと言った方が正しいかも知れない。

紫は妖怪の例に漏れず、人間を襲い、喰らう。

俺は人間を襲わないし、喰わない。

紫には変だと言われたが、俺は襲うつもりは無い。

喰らうなんてもってのほかだ。元人間なのに人間を喰う気になんてなれん。

それと、紫以外の妖怪に襲われている人は助ける。

紫に襲われた人は．．．．．冥福を祈る。

ちなみに、俺は食事はあまり採っていない。採らなくても死なないし。

獣の肉を能力で焼いて食ったり、木の実を焼いて食ったりは偶にす

る。

紫によると、妖怪は人を襲わないと生きていられないらしいが、俺は生きているので関係ない。元人間だからか？

戦いも巧くなったと思う。

霊力は二千年前よりかなり増えた。

それはこれまでの戦い方に理由がある。

俺は、殆どの妖怪を人間状態のまま倒してきた。

世斬の扱いにも慣れた。剣術はかなりのものになったと自負している。

右手で世斬を構え、左手で炎を操るのが主な戦闘スタイルだ。人間状態ですつと戦って来たからこそ、霊力が増えた。

具体的には、『断空』を一日百発は使えるぐらいだ。

言い忘れていたが、『断空』は遠くの物まで斬る技の事だ。よく使うので、技名を付けた。

ちなみに、魔力は二千年間で倍近くまで増えた。

神力は不動だ。だが、質がいい上すぐ回復するので私生活や傷の治癒等で重宝する。

紫もやはり俺と同じぐらいに妖力が増えている。

操れる境界も増えたんだとか。

あれ以上何を操る必要があるのか分からんが。

それから、俺と紫は更にラブラブになった。

恋から愛に変わるの早かった。それもかなり。

既に、紫は俺にとって大事な存在だ。

何時までも、いつまでも、共に居られる事を願っている。

だから・・・・・・・・死ぬ訳には行かないん
だよ

「白・・・・・・・・」

「ああ・・・・・・・・」

俺達は、少し前からずっと狙われている。

「でも何よ、これ・・・・・・・・？」

「本当に、何だよ・・・・・・・・」

「禍々し過ぎるわよ・・・・・・・・！？」

そう、禍々しいのだ。

今まで聞いたことも無い程に

「紫、どうする？」

「こんなただでさえ巫山戯た大きさの妖力があるのに、
ここまで禍々しい妖力なんて、絶対逃げるべきよ。」

「だよな。紫、スキマを！！」

「.」
「.」

「どうした？ 早くしないと殺されるぞ。」

「.開かない」
「.」

.
.!!!!!!

「くそっ、戦うしか無いのかよ!?!」

「そうみたいね来るわ!?!」

俺達の前に、異形の化け物が姿を見せた。

音も立てずに、十は有る目で俺と紫を舐めるように眺めてくる。

『絶望』を体現した様な、禍々しい妖力。

そして黒く、くろく、全てを闇へ墮とすように暗い身体。

それは最早生物かと疑う程に、全てが禍々しく忌々しい。

そんなものが、二人の運命を断つ為に、現れた。

旅を始めて二千年（後書き）

多分、次回は痛くなります。

絶望の世界（前書き）

いまは昼です。

そういつ設定で書いてます。

そういえば、PVが一万を超えたようです。めでたしめでたし。

絶望の世界

目の前にいるのは、規格外の化け物だ。

俺は、下手な手加減は自殺行為と見た。

翼を広げ、右手に世斬を構え、左手の爪を伸ばし強化する。

『ありとあらゆる物を切断する程度の能力』を常にオンにし、炎に掛かっている制限を解き、世斬の中の魔力と神力を引き出す。翼を五メートル近くまで巨大化し、神力で全身を強化。

そして最後に、最高温度の焰を爪と翼に纏わせた。

今の俺の全力だ。

紫は、身の回りに大量の魔法陣を展開している。

一つひとつが非常に強力なものだと分かる。

そして、更に大量のスキマが開いている。

あれは確か、ラプラスの魔か。

俺も紫も全力だ。軽く時空が歪んでいる。

だが目の前の化け物は、それをただ観ているだけ。

俺は、先制を掛けた。

「断空、焰斬、断空…………マスターブレイズ！」

焰斬は、焰の爪の一撃。

マスターブレイズは、超強力の火焰砲。

これはマスタースパークを自分に合うようにした技だ。

威力、範囲共に異常な攻撃だ。

……………少しは効いたか？

「白、避けて！！」

「な……………」

脇腹が、化け物の爪の一撃で抉り取られる。

内臓が飛び散り、骨が飛ぶ。

しかし、痛みはそこまでは無い。

距離を取って、様子を見る。

傷は既に再生し始めている。

「四重結界！！」

紫の結界が化け物を引き裂く。

しかし、すぐにその傷は消える。

いや、「傷が消えた」のでは無く「傷がついていない」のだ。

「くそ、攻撃が効かないのかよ……………」

「

「境界を弄つても影響を与えられないわ……………」

脇腹はもう再生した。

霧化し、化け物を包む。

そして全方向からのマスターブレイズ……………いや

「ファイナルマスターブレイズ!!!!!!」

「永夜四重結界!!!」

紫と同時に、全力攻撃を仕掛ける。魔力が尽き掛けてきた。

何せ、全力攻撃を複数同時に使い続けているのだ。

紫の妖力はそこまで減っていない。能力で回復出来るし。

ちなみに、神力で魔力を回復させられるようだ。

しかも神力の回復は異常に早い。

つまり、俺と紫はガス欠とは無縁だ。

だからこそ、全力攻撃を続けられる。

今度は手応えがあった。

化け物は、焼け爛れ切り刻まれていた。

あと一押しで、勝てる。

そう確信した瞬間だった。

「くっ……………何だ……………」

「……………!?!」

霧化していた体が吸い寄せられる。

化け物の目の前へ……………

「あ……………ぐう……………」

化け物の腕に、禍々しい妖力が集まってゆく。
このままでは殺される……………

「白!!」

紫の能力のお陰で、吸い寄せが弱まる。
だがしかし、あくまで「弱まる」だけ。

「殺されて……………たまるか……………
……………よ……………!!」

「白は殺させ無いわ!!」

化け物に集まっていた妖力が、少し弱まる。
だが……………
……………

「クソッ!!」

そいつの前で、霧化が完全に解かれた。

ここまで……………か。

「. . .」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「 ゆか
 「?」 り

「 だい じょ づぶ
 「?」

左半身と下半身を失った紫が、そこには居た。
俺を庇って、あの一撃を受けたのだ

「紫……………!?!?」

「どう……………してって……………愛し
て……………いる人……………を……………
……………
守った……………だけじゃない……………
……………?」

紫が、目を閉じた。

死んで無い、気を失っただけだ。

俺は神力を使い、紫の身体を再生させた。

そして、安全なスキマの中に移した。

「お前だけは、この手で殺す……………」

化け物は、無表情で此方を見ている。

『絶望』の具現、それが奴。

ならば、更なる力で打ちのめすのみだ……………
……………

「神の刃よ、今こそ真の恐怖である夜を映し出し、
全ての者に死と絶望を与える!!!『夜斬』!!!!!!」

瞬間、夜の世界が地を覆った。満月のみが地上を照らす真の夜。
この世界は、夜の王である吸血鬼の為だけの世界だ。

この時、その化け物は初めて『絶望』を味わう事になった。

絶望の世界（後書き）

真の力が覚醒しました。
後悔はしていません。あと反省も。

永夜の世界（前書き）

やっちまいました。

なんか、もう、すいませんね。いやほんとに。

でも次話からはこういっ話では無くなるので、ご安心を。

永夜の世界

夜斬やぎり

世斬のもう一つの名。
能力は「夜を司る程度の能力」。
それと同時に、奥義でもある。

刀身が夜の色に染まり、世界は夜を迎える。
ただ、二つだけ、普通の夜とは違う箇所がある。
まず月が紅く、空を覆うほどに巨大な姿であること。
そしてもう一つが、支配する者が違うこと。

その支配者が、俺だ。
つまり、この世界での俺は最高神と同等、
もしくはそれ以上の存在であり権限を持つ。
この世界で俺に勝てる、いや、傷を付けられるものは居ない。
そして、俺に消せないものは無い。

- - - - -

.....

化け物が、俺に飛びかかって来る。
だが、『夜』がそれを拒む。

『夜』が化け物の動きを封じ、締め付ける。
そいつの腕が落ち消滅するが、再生する。

「往生際が悪い……………」

「……………!!!」

更に締め付けると、初めてその化け物は声をあげた。
それは既に声になっておらず、『絶望』に染まっている。

「紫の事を攻撃したんだ……………死ね

……………!!!」

「……………!!!」

「……………断空

……………」

「……………」

「断空、断空、断空断空断空断空断空断空断空断空断空断空……！」

「……！」

「焰斬焰斬焰斬断空焰斬断空焰斬断空焰斬焰斬……」
「……」
「ファイナルマスターブレイズ……！」

「……………」

「マスターブレイズマスターブレイズマスターブレイズ……！」

「……………」

もう、化け物に意識は無い。ただの肉と骨の塊だ。
これで、最後にしよう……………」

「炎魔天翔 - 永夜幻葬 - ……！」

「……………」

「ああ、紫。終わったぞ。」

「あなた、あんなに強かったのね……………」

「俺より世斬だな。」

「それは違うわよ。世斬は、白の力を引き出したただけだわ。」

「まじか!?!」

「ええ、大まじよ。それより……………」

「?」

「いや、何でも無いわ。」

「何だよ、教えてくれてもいいだろ?」

「駄目よ。これで許して……………」

「んっ……………ん……………」

「はぁ……………」

キスで誤魔化しやがった!!
でも許す。

「じゃあ、旅を再開しましょ。」

「ああ。でもそれより……………」

「？」

「疲れたから寝たい。」

「私の家に行きましょう。」

「家持ってたのか……………」

「ええ。」

紫の事だから、2010年スペックの家が出てきそうだ。

「そこまで新しい家じゃ無いわよ？」

「さいですか。」

「あと、お布団は一つしか無いのよ……………」

……………

「分かったよ。一緒に寝ればいいんだろ一緒に寝れば……！」

「決まりね……！」

紫がガッツポーズをした。それも凄い勢いで。

……………今晚は疲れそうだ。夜は今日で二回目だけど。

俺は、紫の作ったスキマに入って行った。

永夜の世界（後書き）

ここでサブタイトルの「永夜」についての説明を少々。

あの夜は白の世界であり、すべて白の意のままです。

つまり、「夜は終わらせない」と白が考えているうちは、夜は絶対に終わる事はありません。

そうなれば、本当に「永夜」となる事が由来です。

夜斬（前書き）

番外編でも書こうかなあとか思う今日この頃

夜斬

スキマを抜けると、和式の家があった。
紫の家である。

「さあ、ここが私の家よ。」

「普通だけど普通じゃ無いな。」

主に時代的な意味でな。まだ村しか無いんだぜ？

「細かいことは気にしないの！」

「へいへい。」

「返事は一回！」

「へいへい。」

「伸ばさなさいで！」

「へい。」

「へいじゃ無くてはよ！」

「はい。」

「元気よく!」

「はいつ!」

「よろしい。」

こんなやり取りは日常茶飯事だ。

「で、夜までどうする?」

「そうねえ、『夜斬』についての考察とか?」

「決定」。今日のテーマは『夜斬』です!」

「わ〜い! やったわね!」

.....で、あなたはアレについてどの位分かっているの?」

「刀身が夜の色に染まる。」

『夜を司る程度の能力』が使えるようになる。
「紅い巨大な満月が照らす夜を創り出す。」

「そして白かった髪が紅黒く染まる。これぐらいかしら?」

髪の色なんて変わったのか。気付かなかった。

あれ? これ何でデジャヴ!?

「気付かなかったの?」

「ああ。どつやら俺は自分の髪色の変化に目敏くは無いらしいな。」

「.....」

「ん？どつした？」

「.....ああ、何でも無いわ。」

？

「兎に角、その『夜』では白が無敵という事ね。」

「多分な。この世界の創造神とかには効かないかも知らん。」

「そんな事は無い!!」

「「だれ(だ)!!」」

「私だ。」

「お前だったのか.....ってちげえよ!!」

「.....最高位神？」

「うむ、いかにも。」

最高位神が現れた。どつする？

1・戦う

2・逃げる

3・帰ってもらおう

4・お話をする

5・このまま普通に話を続ける

俺はこの中から、無難に4を選択する！！

1と2は無い。ここ紫の家だし。

3は、別に害が無ければいいので却下。

流石に最高位神を空気扱いは酷いので5も却下。

やはり、4だ。

「で、最高位神様が何の用で此処へ？」

「確かに。私達に何か言うことがあるのですか？」

「そう堅くならなくて良い、吸血鬼の始祖とスキマ妖怪よ。」

「「はい。」」

「そして、今日此処へ来た理由だが……………」

炎魔 白、主に注意をしに来た。」

「俺！？」

「世斬の事ですか？」

「そうだ。」

「ああ、やっぱりそうですね。」

「それ以外に無いわ。」

「兎に角、主の世斬・・・・・・・・・・いや夜斬の能力は強大過ぎる。」

「自覚はしてましたよ。」

「それで夜斬は使うな、と？」

「いや、其処まででは無い。」

ただ使い過ぎると世界のバランスが崩れるから、多用は控えて欲しい。」

「そこまで使う気は無いですよ。」

「私も、白が夜斬を多用するとは思えませんし。」

「そうか。なら大丈夫だな。それともう一つ・・・・・・・・・・」

「「？」」

「死者を裁く者の名なんだが、君の名字から取って『閻魔』にした
い。」

「いいか？」

「ええ、勿論。」

「私も賛成ですわ。」

「ふむ、有難う。それと八雲の。」

「私ですか？」

「紫しか居ないだろ。」

「その炎魔のを、頼むぞ。」

「ええ、言われなくとも。」

「俺!？」

「ああ。お前だ。」

「……………そろそろ時間だ。さらばだ、
炎魔に八雲。」

「「さよーならー」」

最高位神は帰っていった。
ていうか何故に俺を頼まれたし？

「……………もう夜ね。」

「本当だ……………」

「疲れたわ。寝ましょう。」

「そうだな。最高位神とかまじ予想外だし。」

妖怪は寝る必要など無い。だが、疲れれば眠りたくなる。

「うふふふふ

.....」

「布団一つしか無いの忘れてた!!」

和室に一つの布団。それしか無い。

「.....寝よう」

「白の隣」

その後、白が紫に食われたのは言うまでも無い

夜斬（後書き）

作者「お前調子乗り過ぎだろマジで」

白 「黙れ、焰符「マスターブレイズ」！！」

作者「効かんわ！！」

白 「断空！！」

作者「しつこい！！」

白 「焰砲「ファイナルマスターブレイズ」！！！！」

作者「あつたけえなあ……………」

白 「チツ……………」
「夜斬」！！」

作者「くっ……………」
「だが俺を殺したと

ころで第二第三の俺が（ry」

白 「お騒がせしました。ではまた。」

作者「俺はまだ死んじゃあいん「炎魔天翔 - 永夜幻葬 -」ぐああ
あああ！！！！」

始まりの鐘（前書き）

紫視点で書かれています。それが分かっているかないと滅茶苦茶です。超特大才リ設定が入りますので、不愉快な方は避難して下さい。

始まりの鐘

炎魔 白

一回死にかけて、思い出した。
彼と逢った時に懐かしいと思った理由を。

私は、彼を知っていたのだ。
遠く先の未来で……………
……………

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

私が白に初めて逢ったのは、彼が高校に入学した時だった。
私は彼と同じ高校に入学していた。

そう・・・・・・・・・・私は人間だったのだ。

クラスは同じだった。

最初の席が隣だったから、彼とはとても仲良くなった。

彼はクラスの中で目立つ方では無かったが、

行事などがあれば積極的に参加し、クラスを陰から支えていた。

そして、私はそんな彼に惹かれていった。

入学して一年が経ち、二年生になっても、同じクラスで席も隣だった。

私と彼は最早、親友と呼べる程に仲が良かった。

悩みがあれば相談し合い、一緒に泣いたり笑ったりした。

その中で、私の彼に対する好意は更に大きくなっていった。

だが、私はそれから徐々に理解していく。

自分自身の能力を・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

三年生になった時には、私は理解していた。

妖怪が存在する事も、「境界を操る程度の能力」の事も、

彼の中に僅かにある「魔」の事も。

クラスは違かった。話す回数も次第に減っていった。

私は怖かった。彼が手の届かない程、遠くへいってしまっ気がしたのだ。

私は、白を巻き込んで妖怪になろうと決意した。

その夜には彼の寝室に忍び込んだ。彼の家は知っていた。

ベッドで寝ている彼の横に立った。

そして、十二時の鐘が鳴るのと同時に、弄った。

「人間と妖怪の境界」を……………

この時私は異変に気付いた。
しかし、気を失って倒れてしまった。

目が覚めると身体が妖怪になっていたが、
残った記憶は、自分が人間だったという事実のみだった。
そして、過去の世界に来ていた。

だが、私はもう一度彼に、白に逢うことが出来た。
記憶は無かったが、その時私は心の底から安心していた。

偶には、こんな夜も良いだろう。

そして、こんな日々が続く事を祈っている。

永遠、に.....

始まりの鐘（後書き）

以上、主人公が吸血鬼になって過去にとばされた経緯でした。
え？それだけじゃ無い？

神々の時代へ（前書き）

神々の時代へ突入します。どのぐらいの時代かはてきとーです。

神々の時代へ

最近、よく「ミシャグジ」という言葉を聴く。

誰からかって？人間と妖怪からだよ。

べつに、妖怪は無差別に殺す訳では無い。

あちらからコミュニケーションを取ってきたら、

普通に応じて情報交換をしたりしている。

ちなみに、妖怪の前では翼は出している。

こうしていないと問答無用で捕食しに来るからな。

その時は勿論マスブレ（マスターブレイズ）ぶっ放すが。

人と接する時には翼をしまっている。

紫は「認識と本質の境界」を弄って妖力を誤魔化しているらしい。

そして情報交換をする。紫は攫ってきて食べる。

紫のせいでグロテスク映像耐性が急上昇したのは言うまでも無い。

それで、冒頭に戻る。

ミシャグジ信仰が増大しているらしい。それもかなり。

そしてそれを束ねているのが洩矢神だとか。

諏訪子の登場か・・・・・・・・・・・・・・・・・・原作キャラ
三人目だな。

そつだ、洩矢神社に行こう。
紫も賛成らしいし。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

やって来ました洩矢神社。大きいです。

「ついたな。」

「大きいわねえ。」

「取り敢えず、お願いを………」

「そうね。私は………」
「………」

「うまいものが食べますよつにうまいものがくえ………」

「白と一緒に寝れますように白と一緒に寝れますよう
」
「.....」

ブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
.....

「何者!?!」

お願い事をしていたら、諏訪子が飛び出てきた。ちっこい。

「そこの白黒!今失礼な事考えたでしょう?」

「俺は白黒じゃ無いし考えても.....いた。」

「考えてたのね.....」
「.....」

思考を読んで来た。酷い。

「いい? 私はこの地の神々を束ねている、洩矢 諏訪子。
妖怪と悪魔がお願いなんかして、何のつもり?」

「ばれてたのか.....」

「お願いなんてすればされるでしょう。」

「それに、悪魔なのに神力も持つって何よ？」

「人間を妖怪から救ったらこうなった。」

「それ以外に理由は無いわ。」

「え？人間を救った吸血鬼！？　　．．．．．

．．．まさかあなた？」

「白は吸血鬼の始祖よ。」

「紫はスキマ妖怪だな。」

「．．．．．やっぱりね。私より年上だったのか。」

諏訪子は考え込んでいたが、三十秒程で次の言葉を発した。

「二人からは、私と人間に対する敵意が感じられない。

しかも、伝説の吸血鬼とスキマ妖怪．．．．．

．．．．．

よし、決めたわ！！」

伝説になった覚えが無いんだが。

「何を？」

「友人になつて下さい!!」

予想外過ぎて五秒はフリーズしてしまった。

断る理由が特に無いので、ここはOKすると決めた。
紫は例の胡散臭い笑みを浮かべ、諏訪子を見つめる。

「俺は良いが、紫は……………?」

「勿論、良いわよ。ただし……………」

「?」

「白に手を出したら、その時はあなたへの信仰が
あなたに伝わらない事になるわ。」

「ゆ、紫……………!」

「大丈夫よ。あくまで友人だから。」

「……………」
「う。」

「ふふ、ありがとう。」

私の名は、洩矢 諏訪子。土着神の頂点に立つ者。」

「わたしは、八雲 紫。境界を操るスキマ妖怪よ。」

「俺は、炎魔 白。炎を操る吸血鬼だ。」

こうして、悪魔と妖怪と神の、異色のトリオが誕生した。

俺と紫は、諏訪子に連れられて本殿へ入っていった。

神々の時代へ（後書き）

諏訪子の口調がいまいち分からない……………OR

諏訪子の神社で くそのー(前書き)

短いです。いやほんとうに。

諏訪子の神社で くその一

「ここが本殿よ。」

「はあ……………」

「凄いわね。」

本殿に入ると、畳が敷き詰められた和室だった。
大きさは……………十五畳。でかい。
そして箆笥たんすの様な物……………もとい箆笥と、
机がある。超綺麗。神様パワー恐るべし!!

「まあ、寛ひらくいでよ。」

「ああ。」

「そうね。」

座布団が置いてあったので、そこに座る。
紫も同じように座った。

何故こんな時代に座布団やら箆笥やらがあるのかは知らん。

「で、あなた達は何年前から生きているの?」

「俺は・・・・・・・・・・・・・・・・二千年位だな。」

ていうかこの質問ヤバイよな・・・・・・・・・・・・・・・・
紫がマジギレしないか？

「私も白と同じ位よ。白といたら、二千年なんて瞬く間に過ぎたわね。」

「へえ、二千年も一緒にいるんだ。」

紫が怒っていない・・・・・・・・だと・・・!!?
そうか！紫はあの（東方の）紫と少し違うのか！！
見た目も若いし。俺と同じ位に。

「それで、白は月人を救ったんでしょ？」

「ああ。」

「あの時の白は格好良かったわ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「観てたのかよ!？」

「ええ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・その時はどうやって助けたの？
噂では、妖怪の大将を一对一で倒したって聞くけど。」

「その通りだ。殺されかけたけどな。」

「あの戦いは凄かったわね。」

肉弾戦だけで半径約五百メートルは消えてたわ。」

「本当に凄かったのねえ。」

「全身複雑骨折どころじゃ無かったな。」

まあ、すぐに治るけど。」

「……………吸血鬼ってそんなに凄いのね。」

「白はその時より遥かに強くなってるわよ。」

「そりゃあ二千年も経てばなあ。」

「本格的に勝てる気がしないわ……………」

「戦う気は無いぞ?」

「私も無いわよ。」

「分かってるわ。私も無いもん。」

それから俺達は、夜まで話し続けた。

諏訪子の神社で くそのー(後書き)

新しいPCが欲しい今日この頃

諏訪子の神社で くその二(前書き)

またまた短いです。でも次話で短いのは終わる筈です。

諏訪子の神社で くその二

話し込んでいたら夜になっていた。
そして、問題が発生した。

「どうやって寝る?」

「あなたと白は隣になっちゃ駄目よ。」

「何故にそこまでするんだ……………」

そう、寝る時の並び方だ。

ていうか俺は寝る必要は……………」

「「あるわ。」」

「同時に心を読むな!!」

心を読まれた。酷いもんだ。

「兎に角、白は寝ないと駄目よ。」

「そうだよ。吸血鬼だろうと睡眠はとらないと。」

「分かったよ……………にしてもどうすんだ?」

「こんな並びはどうかしら？」

「へえ、どれどれ……………」

紫がスキマから紙と筆を取り出し、図を描いた。
こんな感じの。

諏訪子

俺紫

矢印が頭の向きである。

まあ、無難な形になったと言えるな。

ただ……………」

「俺と紫が近過ぎないか？」

「あー、流石にこれは無いわー。」

「……………」
諏訪子

「ん、何？」

「『四重結解』！！」

「ちょ、紫お前やり過ぎ！！」

「……………ふう、危ないあぶない」

「!?!」

避けたのか？あの四重結解を!?

……………諷訪子、恐るべし。

「やっぱり、あの程度はかわせるのね。」

「まあ、土着神の頂点だからね。」

「……………あの並びでいいのか？」

「「いいわ(よ)」」

取り敢えず並びは決まった。

ちなみに今は十一時だそうだ。

なんでこの時代でそんなのが分かるのかは知らん。

俺は十二時までには寝る。人間だった頃からの癖だ。

「それじゃ、お休み〜」

諷訪子はいつの間にか並んでいた布団に入った。

俺と紫も布団に入る。

「じゃ、俺も寝るわ。」

「お休みなさい。」

やっぱり布団はいいなーとか考えながら、目を閉じる。

うん、普通だな。紫に抱き付かれてると、

諏訪子がこっちを見てニヤけてる以外は。

そのまま、俺は眠りに落ちた

諏訪子の神社で くその二(後書き)

諏訪子の口調がああああ
分からないiiiiiiii!!

二千年の時を越え、蘇る記憶（前書き）

サブタイトルのまんまです。

それと予定していたより長文です。

二千年の時を越え、蘇る記憶

ん……………？

ああ、朝か。

紫と諏訪子の存在を確認する。

居て当然なのだが、俺はこうして確認しないと不安なのだ。

この世界に来てすぐの時は、

無理にでも元の世界に帰りたかと思っていた。

でも、八夜威や永琳と出会い、

紫と諏訪子と一緒にいるこの時間が、

今は幸せで、楽しくて、安心出来て、何より大切だ。

だから、失いたくない。

失うのが怖い。

この世界は、紛れもなく現^まの世界だ。

消え失せてしまう事はない、絶対に……………

「どうしたの、涙なんか流して？」

諏訪子が、視界の上から俺の顔を覗き込んできた。

どうやら俺は泣いていたようだ。
まったく、情けない話だな……………
取り敢えず、起き上がって座る。

「いや、何でもないよ。」

「そう。」

でも、紫は分かっているみたいだよ？」

「白……………」

「紫？」

紫が話しかけてきた。

その声は綺麗であると同時に、悲しみや切なさを感じさせた。

諏訪子は、もうこの部屋には居ない。

空気を読んだのだろう。

「ごめんなさい……………」

「……………え？ どういう事？」

「今はこれしか言えない。」

いや、言いたく無いの……………」

紫が申し訳無さそうな、悲しそうな表情を浮かべる。

二千年も一緒に居たが初めて見る表情だ……………」

.....
.....
.....!

「そうか、分かったよ。」

「え？ いいの.....?」

「さっきの俺は、少し考え過ぎていただけだ。
それと、紫が謝る必要は無い。」

「有るわ。だって.....」

「ああもう、俺がさっきので気付かないと思ったのか？
思い出したよ。人間だった頃の事も、紫の事も.....
.....」

「ならどうして!？」

「俺はこの世界が好きに、大切になった。
こんな素晴らしい世界に連れて来てくれた紫を怒る必要は無い。
俺はむしろ感謝しているし、お前や諏訪子の事も大好きだ。」

「白.....」

「だから、そんな顔はするな。」

「.....ええ、そう
ね。」

紫が笑顔を取り戻した。

そして俺は、記憶を取り戻した。
ただ……………

「ところで、自分と私の元の名前、分かる？」

「……………いや、分からない。」

そう、名前だけは思い出せない。

ここだけ記憶から切り取られたかの様に。

「やっぱり白も分からないのね。」

「紫も分からないのか。」

「ええ。」

……………ずつと考えていても無意味だな。

「考えても仕方ないだろ。」

「そうね、でも気になるわ。」

「……………紫、これからは未来に生きていくつ。

過去の自分には囚われずに。」

「……………そうよね。未来を見ないとね。」

「ああ。それより……………」

「？」

「諏訪子が外で待つてるから、呼びに行こう。」

「ああ！ 忘れてたわ!!！」

(. . .)

取り敢えず、諏訪子呼びに行った

.....

「「諏訪子」」

「あー、話は済んだの？」

「ああ。」

「ええ。」

「それじゃあ、朝食にしようか。」

もう出来てるから……………」

「「早い!」」

「二人の話が長いんだよー」

「「ごめんなさい。」」

「ふふっ、宜しい。」

俺達は神社の居間に向かった。

「二千年の時を越え、蘇る記憶（後書き）」

作者「君のイメージ画が完成しそうだ。」

白 「どうせ下手くそな中二丸出しの絵だろ？」

作者「ちつがああああう！！！！！」

白 「黙れ中二病！！！」

作者「（；；；；）」

白 「さて、次回の炎魔録は……………」

・白、驚き過ぎて冷静になる

・紫、発狂する

・諏訪子、弄られる

の三本でお送りします。

次回もまた見て下さいね

ジャン ケン マスターブレイズ！！！」

作者「ぐあああああああ！！！！！」

再会と宴会（前書き）

本日二話目です。

宴会というよりはプチ宴会です。

再会と宴会

居間に入り、卓袱台を囲んで座る。

そこには三人分の白米と焼き魚と味噌汁に、緑茶が置いてあった。何れも美味しそうな香りを漂わせている。

「朝ご飯だ……………」

「諏訪子って家庭的なのね。」

「いやあ、これぐらい普通だよ。」

実は、俺は吸血鬼になってから殆ど食事を採っていない。永琳と過ごしていた時は毎日食べていたのだが、別に死ぬ訳でも無いので食べなかったのだ。ただ、やはり食事は採るべきだと思う。口が寂しいからな。

「じゃあ、頂こう。」

諏訪子が言う。
俺と紫が頷く。

「頂きます。」

「「頂きます。」」

三人同時に食べ始めた。

うん……………うまい。

諏訪子は料理店を出せる。

それで信仰も増えるかも……………

「美味しいわ。」

「そう、ありがとう。」

「うまし。」

「白もありがとう。」

紫から「春日まだ産まれてもないのよ（怒）」
みたいな視線がとんできたが、気にせず食う。
うまい。

「そつえばさく・・・・・・・・・・」

諏訪子が話を切り出してきた。

何だろうか？

おっ！ 魚うまい！！

「最近、ここ等辺で鬼が出たんだよう。」

「・・・・・・・・・・鬼？」

「鬼、ねえ・・・・・・・・・・」

「そいつが強くてさ、困ってるんだ。」

二本の角に金髪で、槍を持つてるの。

退治したいんだけど、手伝ってくれないかな？」

俺と紫が顔を合わせる。

おそらく、紫も同じ奴を想像しているのだろう。

だが紫が首を横に振る。当たり前だ。

それに槍なんて持って無かったし。

「妖怪は、妖怪を退治はしないわ。でも・・・・・・・・・・」

「.

「友人の頼みなら、喜んで手を貸すよ。」

「白、紫、二人共ありがとう。
じゃあ、これを食べ終わったら出発しよ。」

「ああ。」

「ええ。」

今日は、鬼退治だ。

.....

横に置いておいた世斬の紐を腰に巻いて、右前で結う。
左脇に世斬を差し、準備完了だ。

「さて、白も準備出来たみたいだし、出発するわ。
私の後に付いてきて。」

「了解。」

「分かったわ。」

諏訪子が浮き、そのまま飛んでいく。

俺は翼を広げて、紫と一緒に諏訪子について行く。
ちなみに、別に翼は出さなくても飛べる。

「あそこらへんね……………」

「まさか……………あれか？」

「あれでしょうね。ていうよりあれは……………」

見覚えのある二本角が、そこには見えた。

……………
……………
……………

金髪、二本角、蒼の目、十三歳ぐらいの見た目、独特の服装 . . .
.
間違いない。こいつは

「八夜威」
「.」

「まさか」

「あーうー、状況が読めないよう」

地面に降りた。

目の前には、雷を纏った鬼 八夜威が
いる。

取り敢えずあいつがここにいる理由を考える。

「.」
「!?」
「.」

「八夜威」

「そうよ。あなたは死んだ筈。」

「紫もいるのか」

紫と八夜威が知り合いだったとは……………

にしてもあいつがここにいる理由なんて、
二つしか思い付かない。

・俺の一撃を食らっていなかった

・既に亡霊、もしくは幽霊になっている

この内のどちらかだろう。幽霊なら、物理的な害は無い。

「それがねえ、三途の川の先で裁けないとか言われたんだ。
そういえばそいつ、『閻魔』って名乗ってたな。
私が考えた名前で私を裁ける訳が無いよねえ。」

「それで、今のお前は何だ？」

「そうね。気になるわ。」

「退治は忘れられてるよ……………」

諏訪子ごめん。

「鬼おに霊だ。霊鬼おにじゃ無いよ。」

「なんだそりゃ？」

「初めて聴くわ……………鬼の霊なんて。」

「私も聴いたこと無いよ。」

「だろうねえ…………私しか居ないからね。」

一人一種族か…………紫と同じだな。

「さて白、今日は久々に、一緒に寝ないか？」

「……………八夜威イイ」

「「ゆ、紫？」」

「白と寝たければ、私を倒してからにしろ!!」

「お？ やる気かい？」

「いいよ、きな!!」

雷槍「グングニル」!!

境界「永夜四重結解」!!

互角だ……………ていうかグングニルだと？

……………それは置いといて、これは紫が圧してるな。

威力はグングニルが上だが、八夜威は相当、体力を消耗している。紫はまだまだ余裕がある。まあ、この二千年の差だろうな。八夜威は強くなっていない。俺と紫は二倍ぐらいに強くなっている。

「くそ……………」「雷神剛拳」！！」

「無駄よ、魍魎「二重黒死蝶」！！」

完全に紫が圧してるな。勝負はもう決まったか？

「白と寝るなんて永遠に叶わないわ。

「生と死の境界」！！！！」

「ちよつ…………… 焔符「マスターブレイズ」！！」

危ない所だったな……………俺が相殺しなければ八夜威が吹き飛んでいた。ていうか……………

「紫やり過ぎだー！！」

「八夜威が調子に乗るからよ。」

夜になった。何故か宴会が始まっている。

言い出したのは勿論八夜威だ。言う必要も無い。

俺は、普通に酒は呑めるし、好きだ。

そして、酔っ払うのは当たり前。

ただ、一人だけは酔っていない……………

「お前え……………諏訪子っていうんらよなあ……………」

……………」

「八夜威？　そうだけどどうして？」

「うまそおだにええ……………」

「あーうー、やめてよう……………」

「諏訪子お？」

「え、紫？」

「かわいいわあ、欲しくなっちゃおう……………」

「……………酔っ払いは嫌いだよー。白ー？」

「ん？　どうした？」

「二人がくっ付いて来て離れないよう……………」

「何い？俺も混ぜろおい!!」

「うわ……………!!」

暫くはこの状態が続いた。

再会と宴会（後書き）

八夜威の再登場です。デデーん！！

それと、八夜威は（見た目が）やや幼めの設定です。

強い鬼というと、ないすばでいな姉御系が多いのですが、ここでは少しギャップを付けたかったです。

決して、ロリコンな訳では無いです。いやほんとうに。

三日月と夜風と矛盾（前書き）

八夜威のイメージ画はどうしましょうか。

今のところ、服は左腕の方が短い着物的なものに、

下は長めのスカートにする予定ですが、変わるかもしれません。

ちなみにグングニル持つのは左手です。

髪はセミロングになるかと。

吸血鬼になってから、本当に色々な事があった。

八夜威と出会い、戦って、和解したと思っただけなのに離れ離れになった。

しかしそれと同時に永琳に出会い、一緒に暮らしながら弱点の克服をしたり、談笑したりする生活が約七年続いた。

その間には人妖大戦的な何かが起こり掛けたが、

俺が八夜威と一対一で戦い、勝利した事で防げた。

この戦いの九ヶ月後、この生活は終わりを告げ、旅を始めた。

世斬を永琳から貰ったのもこの時だった。

そしてその後すぐに、紫と出会う（正確には再会）。

紫が減ぼした月人の街を月に送ったのが、

ここまで仲良くなるキツカケだったのかも知れない。

そして二千年間は一緒に旅をした。

『絶望』との戦いは、忘れられる物では無い。

文字通り絶望的な力の差があったし、何より紫のあんな姿は

.

夜斬を初めて、唯一、使ったのはこの時だけだ。

怒りに任せ、あいつが肉と骨の塊になるまで攻撃し、

最後には塵も残さずに焼き、吹き飛ばした。

その後、最高位神に注意された。

それからしばらく経つと、諏訪子と出会う。

諏訪子のお願いで鬼を退治に行くと、鬼霊となった八夜威との再会。

紫と八夜威とのいざこざがあり、プチ宴会が行われ、酔いつぶれた。

そして現在に至る

「白、ここに居たのね。」

「ああ、紫」

起こしてしまったか？

「目が覚めたら、白が隣に居なかったから……………」
「。」

「そうか。ちょっと夜の風にあたりに来てたんだ。
それに綺麗な三日月だ。」

「ほんと、綺麗ね。…………隣、いいかしら？」

「勿論。」

紫が、俺の隣に腰掛ける。

この時に肌が密着してるのは最早デフォ。

「ねえ？」

「なに？」

「なんで、私とあなたが過去に来たのだと思う？」

「え？ 紫がやったんじゃないの？」

「違うわよ。えっと、ヒントは『あなたの存在』よ。」

「俺の存在？ うーんと、悪魔、吸血鬼、始祖……………」
「……………」

「そう、白は吸血鬼の『始祖』なの。つまり、矛盾が出来たのよ。」

始祖が他の吸血鬼より遅く生まれるのは有り得ないわ。
でも、あなたは『始祖』になった。つまりこの世界は、
矛盾を消すために、白と、この結果を生んだ私を過去に飛ばした。

「なんか壮大だな。 まあ、一番の謎が解けたよ。」

「それは良かったわ。さて、そろそろ部屋に戻りましょう?」

「そうだな。もう大分涼んだし。」

「それと、諏訪子には感謝しないとね。」

「ほんと、気が利くっていうか何ていうか……………」
「取り敢えず感謝だ。」

「ふふ、そうね。」

俺達は部屋に戻り、再び眠りに就いた。

三日月と夜風と矛盾（後書き）

サブタイに『矛盾』とありますが、既に白の矛盾は補正されています。語呂が良かったので使いました。

諏訪子の特訓 ⅴ VS 八夜威(前書き)

サブタイのまんまです。

諏訪子の特訓 〽 VS 八夜威

朝だ

俺は、ゆっくりと目を開く。

いきなり全開にすると目がやられるからだ。

隣には紫、その奥に八夜威が見える。

二人はまだ寝ている様子。人間にしか見えないのは普通な筈。

そして案の定、諏訪子は朝ご飯を作っている様だ。

白米と味噌汁、肉の匂いが漂ってくる。美味そうだ。

取り敢えず、二人を起こす事にする。

「紫ー、朝ですよー。」

すー

「 朝ですよー!!!」

すー

．．．．．返事が無い、只の屍
のようだ。

「失礼ね、今起きたわよ．．．．．」

紫が起きた。ていうか起きてたなコイツ．．．．．
俺に起こされる迄は起きなかったに違いない。
そして、ふわあゝ　と欠伸をすると紫は八夜威の方を向き．．．
．．．．．

「四重結解」

「きゃああああー!!」

相手が八夜威で、しかも鬼霊だから寝起きドッキリで済んだが、
もし普通の妖怪にやったら余裕で寝起きポツクリになるぞこれは。
嫌だな、寝起きポツクリ．．．．．

「朝から何するんだ!」

「あなたが早起きしないのが悪いのよ。」

「それでもやり過ぎだー!!」

「紫も八夜威も悪い。」

「「ぬう．．．．．」

「ご飯出来たよー！」

グッジョブ諏訪子！ 完璧なタイミングだ。

「もうご飯だから、何時までも睨み合ってるな。」

「分かったわよ……………」

「分かったよ……………」

……………

朝食を食べ終わり、今は諏訪子と八夜威が決闘をしている。

ルールは「膝を附いたら負け」というもの。

どうしてこうなったのかと言うと、

食事中に、諏訪子が八夜威をお願いしたのだ。

諏訪子曰く、

「あなた達について行けない様では、神として失格」
なんだとか。

諏訪子の弾幕が八夜威に殺到するが、雷で打ち消される。八夜威がマスパ的なのをぶっ放し、諏訪子に向かった。諏訪子は神力の壁でそれを受け止め、鉄の輪を構える。しかし八夜威が諏訪子の懐に踏み込み、一瞬で諏訪子は吹っ飛んだ。諏訪子は受け身をとったが、膝を附いた。ここ迄だな。

「八夜威の勝ちだ。」

「やっぱり勝てないかー。」

「諏訪子もなかなか良かったよ。」

「結構動けるのね……………」

紫の言うとおり、諏訪子はかなりの動きをしていた。八夜威相手にあそこまで戦えるとは……………

「さあ、次は白ね。」

「俺かよ。ていつか連戦できるのかよ?」

「平気だよ。」

「勝負の条件は?」

八夜威が聞いてきた。さてどうしよう。

「諏訪子が五分間の間に一度でも白に触れられれば勝ち、なんてど
うかしら？」

紫は結構きつい条件を出して来た。

「きつい。でも良いだろう。」

「じゃあ、一回でも白の体のどこかに触れればいいのね？」

「そうだ。」

「じゃ、私が雷音を鳴らしたら初めていいよ。」

八夜威の手に、少量の雷が集まっていく。

諏訪子の特訓その二、開幕か。

諏訪子の特訓 〽 VS 八夜威(後書き)

寝起きポツクリ

.

気に入りました。

諏訪子の特訓 Ⅰ vs 白（前書き）

白がどんどん白黒になって行く……………

諏訪子の特訓 Ⅴ vs 白

四つの翼を広げ、巨大化させた。

そう、四つだ。翼が二つ増えたのである。

みんな驚いているが、無理は無い。

おそらく、二千年以上生きて強くなったのが原因だろう。

巨大な翼の下の、少し内側から小さめの翼が生えて来たのだ。

小さいとは言っても、広げれば身の丈よりは大きい。

白いので「白翼^{はくよく}」と呼ぶ事にする。

前からあった方は「黒翼^{くくよく}」にしよう。

「俺は何も知らないし説明出来ないぞ。」

と、みんなに言ったら納得して貰えた。

ていうか諏訪子に言われた「白黒」の要素が増えてしまった。

これは、スピード・瞬発力を重視した大きさと形だ。

本来なら馬力も上げるためにもっと大きくするが、

今回は戦いと言うよりは鬼ごっここのLunaticみみたいだ。

俺は『エクストリーム鬼ごっこ』と命名する。

「白、追加ルールよ。範囲はこの結解の中のみで、

霧化と能力は使用禁止。弾幕も無しね。

それから、諏訪子は弾幕を白に当てても勝ちで良いわ。」

結構が俺と諏訪子を囲んだ。

大きさは約二十立方メートルか。狭いな……………

「つまり逃げると？」

「ええ。」

「白が不利過ぎじゃ無いか？」

「そつだよ、こつちも気が引けるよー。」

八夜威と諏訪子の言うとおりだ。

が、俺は逃げ切り、避け切る自信がある。

今の俺は、スピードについてはかなりの物だろう。

翼が四つになったお陰で軽く音速の五倍ぐらいは

出せるだろうが、余りやりたく無いのが本音だ。

ソニックブームで周りの物がズタズタになる。

俺の身体は大丈夫。吸血鬼ボディの恩恵。

「俺は負ける気がしないがね。」

「じゃあ、エクストリーム鬼ごっこを始めようか。八夜威？」

「あと十秒後に始める。」

「本気でいかせて貰うよ、白。」

「いいぜ、きな。お前の速度を否定してやる。」

「大した自信ね。いつまで持つかな……………？」

あれ、諏訪子が本気モードになってるぞ。
あ、やべ。もう始まる。

雷の音と共に、エクストリーム鬼ごっこの幕が開いた。

.....
.....
.....
.....
.....
.....

諏訪子の手が豪速で俺に近づくと、俺が大きめに避けると案の定、諏訪子が弾幕を放って来た。空に飛び弾幕全体を回避するが、間髪入れずに鉄の輪が殺到する。俺はそれを全て目視で回避したが、次は諏訪子が突っ込んで来た。諏訪子の体術も結構な速さと技術があつたが、俺にその手が届く事は無い。弾幕での牽制も加えて来たが、弾を一つひとつ回避しながら諏訪子のパンチキックチョップも避ける。避けて避けて避けて、諏訪子が連携を切った所で距離を取る。

「あー、何でも当たらないの？」

「俺が俺だからだ!!」

「答えになって無いわ……………よっ!!」

全方向から弾幕が殺到し、諏訪子も突っ込んで来る。

さっきより格段に速く、弾幕と拳が服にグレイズしまくる。

ちなみに服は掠っても良いらしい。

弾幕の密度が上がり、諏訪子のラッシュも速くなる。

弾幕の中に鉄の輪が加わり、諏訪子も鉄の輪を持って

俺の身体を中心に的確に狙って来るが、

俺はそれらを全て寸での所で避ける避ける避ける……………

……………

「時間よ。これは……………白の勝ちね。」

終わった……………超疲れたが、全て避け切ったのだ。

「白ー、速すぎるよー。」

「諏訪子の攻撃もかなりだったと思うぞ?」

いやほんとうに。当たるかと思った。

でかくて邪魔なので、翼をしまった。

白翼の効果は予想以上だったな。

「諏訪子は見込みがあるよねえ。」

今言ったのは八夜威だ。確かにそう思う。

「神だからね。さあ、次は紫だよ。」

休憩は必要無いのか……………

「そうね。じゃあ条件は白に決めて貰うわ。」

「俺？ えーと…………空中戦で、先に地面に落ちたら負け。」

「異論は無いわよ。諏訪子も良いわね？」

「うん、大丈夫。勝ちにいくわ。」

それは良いけど、紫は強いんだよなあ……………
機動力は高くないからこの条件にしたんだけどね。

「じゃ、俺が爆発音出すから、それが始めの合図だ。」

ていうか諏訪子マジ持久力ありすぎ。神か！？
あ、神だった。

諏訪子の特訓 Ⅴ vs 白（後書き）

翼、増やしました。

.....何か、すいません

諏訪子の特訓 Ⅰ VS 紫（前書き）

空中戦です。

諏訪子の特訓 ～ V S 紫

白翼は、神力を表していたようだ。

翼をしまう前に、神力で体力を回復させた時に

白翼が少しだけ濁った色になった。

そして、そこから感じる神力も少し弱まった。

黒翼は言うまでもなく、魔力を表している。

此方は魔力を消耗すると色が少し薄くなる。

両方を限界まで消耗したら、両方が灰色になるだろう。

「白、まだかしら？」

「白ー、早くしてよー。」

「ああ、ごめん。」

「爺さんになつてボケたか？」

取り敢えず八夜威は燃やしておく。

指先に高密度の火を集め、空に向ける。

そして体育祭と同じノリで発砲した。

パン！！と。

「四重結解!!」

「洩矢の鉄の輪!!」

瞬間、四角形を四つ重ねたような結解と、ビッグサイズの大量の鉄の輪が激突した。威力はほぼ直角で、諏訪子は神力をかなり消耗した。やはり、紫の妖力は消耗しておらず余裕の表情。

「遠距離なら紫は最強だねえ。」

八夜威が言う。因みにグングニルは持っていない。念じれば、掌の上に召還出来るらしい。いや俺も出来るけれども。

「確かにな。俺や八夜威の能力も紫まで届く前に消されるし。」

「ただ、身体能力は……………」
諏訪子は其処を突いたみたいだね。」

空中では、機動力がかなり勝負を左右する。つまり機動力に優れない紫は不利だ。

普段はスキマ移動で補っているが、禁止しておいた。

「……………っつ!!」

「はあああああっ!!」

紫が弾幕を撃つ前に、諏訪子が紫を吹き飛ばした。

地面へ向かってとんでいく紫・・・・・・・・・・諏訪子の
勝ちか？

「はい、お疲れ様。」

「・・・・・・・・・・は？」

さっきまで諏訪子がいた所から、紫が降りてきた。
まさか・・・・・・・・・・

「「位置と存在の境界」を弄ったわ。」

ズドオン・・・・・・・・・・

落ちた諏訪子が起き上がって、此方に飛んで来た。

・・・・・・・・・・諏訪子哀れ

「ちょっと・・・・・・・・・・酷いよ？」

「ルール違反はして無いわ。」

確かに。

「でもあれは酷いね。」

「八夜威が言うな。」

一瞬で諏訪子吹き飛ばす奴が何言ってるやがる。

「でもまあ、諏訪子の判断力はかなりの物ね。」

紫が言う。確かに。

ちなみに全員、能力以外で特に優れている所は違う。

俺は速さ、紫は弾幕や結解、八夜威は力だ。

諏訪子はオールラウンダーで、何でもそれなりに出来る。

「ありがとう。それじゃ、神社にもどろう?」

「」「」「そうしよう(しましよう)」「」「」

諏訪子の特訓は、取り敢えず終了した。

諏訪子の特訓 Ⅰ V S 紫（後書き）

短かったですね。

白の翼は、両方広げると蝶の様な形になります。

戦いの前夜祭（前書き）

PYが二万を超えた模様です。
以上、速報でした。

あれ？

戦いの前夜祭

諏訪子の神社に住み始めてから五百年が経った。

諏訪子と八夜威は、あれから毎日修行をし続け、

八夜威は既に俺や紫と互角にまで強くなった。

諏訪子は、修行に加えてこの五百年で信仰も増えた。

俺達三人にはまだ遠いが、相当強くなった事は間違い無い。

大和の神が攻めてくるとも言ってたな。諏訪大戦か……………

……………

あと、一番問題なのが俺だ。

いや正確には世斬だろうが、兎に角、これだけは言える。

帰刃的レスレクシオンなのが使用可能になった。デデー

しかも何故かこの状態がデフォ。変更不可。

いや、俺は霧化して戻っただけだぞ？

それでこうなってたのだから仕方無い。

見た目の変化は無い。

ただ「ありとあらゆる物を切断する程度の能力」

が使用不可能になって、魔力が増えて、

素手の戦いに戻った事で速力と瞬発力が上がった程度だ。

音速？何それおいしいの？って程に。

それと、響ソニート転もどきも出来た。

これは霧化能力の応用だ。

俺の魔力が届く所に霧を発生させ、其方に魂を移し、更に、元いた場所に残っている霧を魔力に変換・回収する。これは俺でも反応するのが精一杯な程の速度で移動できる。やべえ、ウル オラ参考にして色々出来そうだな。

いろいろと説明してきたが、一つ重要なのがあったな。

そう、諏訪大戦だ。 もう明日だっけ？

やべえ。

諏訪子は真剣な笑顔で鉄の輪を磨いている。

鉄の輪は最新の錆びにくい鉄で出来ているらしい。

「白も紫も八夜威も、手は出さないですよ？」

「分かってる。」

「分かった。」

「被害抑える為に結解張るわよ。」

「うん。それじゃ今日は呑もうか？」

「『『賛成』』」

こんなノリで、夜は更けていった。

戦いの前夜祭（後書き）

また短いです。

次話は長くしようと思うので勘弁して下さい。

諏訪大戦 Ⅰ 土着神話 VS 中央神話

朝だ。

大和の神軍団が攻めてくる。

見学の準備をしなくては

- - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -
 - - -

かくかくしかじかで、大和の神軍団が見えてきた。
 しかし

「諏訪子、やっば手出すからな。」

「私もだ。」

「私もよ。」

「そうだね……………助かった。」

これは、数の暴力だ。

諏訪子の配下の神（土着神）は、多く見積もって五千。

対する大和の神は、少なく見積もっても五万。

個体の強さで見ても、彼の方が上。

……………勝てる訳が無い、だから俺は手を出す。

ただ、

「八夜威と紫はいい。俺一人で十分だ。」

「何言ってるの？ 一人で勝てる数じゃ無いでしょう!？」

やはり諏訪子は反対してくるが、八夜威と紫は違った。

「……………まあ、ここは白に任せよう。」

「じゃあ私は結界を張るわ。」

敵の大將とそれ以外を分けるから。」

ナイス紫。粋な計らいだ。

「うん、その様子だと大丈夫そうだね。」

そして私は、一対一で大和の神の大將に勝つ!！」

「よし。じゃ、紫、三秒後に結解張つて。」

「了解したわ。敵の大將は．．．．．先頭の注連
縄ね。」

「白、手加減抜きで暴れてきな。」

「白が戻って来るまでには勝ってるからね。」

「おう。諏訪子がんばれ。」

- - -
- - -
- - -

二対の白黒の翼を広げ、敵の前に響転で移動した。
敵の場所は既に洩矢神社の直前。
敵が全員驚いているが、その間に結界が創られ、
敵の大將、もとい神奈子とその他が分断される。

敵は全員「しまった!!」みたいな表情をしている。
結界でもう声も届かない為、俺は振り返らずに構える。

「貴様、何者だ!!」

「吸血鬼の始祖。あー、あと神。」

「何!?!」

大将不在の神軍団の先頭にいた奴が話しかけて来たので、
普通に答えたら敵全体がどよめいた。シュールな光景だ。

「て、敵が何者だろうが容赦はせん!!」

「うおおおおおおお!!」

みたいな感じで一斉に飛びかかってきた。

「遅すぎお前等。戦う気あんの?」

軍団の背後に響転で移動し、炎で一掃する。
千はこれで焼滅した。

「速いぞ、全員で掛かれええ!!」

逃げ道を塞がれた。

だが、もとより逃げる気など無い。

「いくぞ、焰符「マスターブレイズ」」

「ぐあああああつ！！！！」

今ので五千か？

「まだまだ、榴砲「ファイナルマスターブレイズ」」

「あゝあゝあゝあゝ！！！！」

合計一万五千は減ったか？

ていうか五万どころじゃ無くて十万はいるんだよなあ……………

「新技だ、魔炎「プロミネンス」」

さっきの榴符よりは細い、超高密度・超高温の炎のレーザー。

熔岩をも蒸発させる程のそれを、横に振る。

残り五万ですな。あつけ無い。

つまらないし面倒になってきたから終わらせよう。

「終わりだ、「夜斬」」

世界に夜を創り出した。奥義だ。

帰刃状態でも使えるようである。

しかし、自分の『存在』に負担が掛かった。

あの時の最高位神がこの世の物理的概念を強固にしたみたいだ。

これは、もって一分だな。

夜斬を解いて、再び神軍団の方に向き直す。

そして、少しだけ夜の力を集め……………

「最後だ。」
「炎魔天翔」
「永夜幻葬」
「」

この日、十万の神々が、

たった一人の吸血鬼を相手にし、

一分足らずで全滅した。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「互角ね。」

「ほんと、どちらも引かないねえ。」

諏訪子と神奈子の戦いを見物している妖怪二人は、俺の方には興味を持っていなかった。

「ただいま。」

「「おかえり。」」

あんなの勝負では無いからだ。
それは俺も分かっていたので、二人の横（鳥居の上）に腰掛けた。
確かに互角。両者共ほぼ同じ数の傷を負い、
同じ程度に息切れしている。
互角の勝負だと、体力の消耗が速いようだ。

「諏訪子、勝負を決める気だね。」

「そつらしいわね。」

諏訪子が鉄の輪を大量に構えて、神奈子に投合する。
ソニックブームを纏う程の速度。大丈夫か神奈子？

「土着神の頂点 洩矢 諏訪子、ここまでだ!!!」

神奈子の出した鳶が鉄の輪を絡めとり、一瞬で錆びてしまった。
彼女の言うとおりここまで、だな。

「うっ あああああああ!!!」

「くっ、往生際が悪いよ!!!」

諏訪子が神奈子の脇腹に蹴りを入れたが、
御柱による反撃で地面に吹き飛ばす。

.....もう良いだろう。

「諏訪子、良く頑張った。もういい.....」

「！ 八夜威
ひつぐ うわああああん！！」

八夜威が諏訪子をキャッチした様だ。
諏訪子はそのまま泣き出してしまった。

「おい、そこのあんた！」

「私かい？」

「そつだ。名前は？」

俺は、炎魔 白。こつちが、八雲 紫。
諏訪子をキャッチしたのが、神崎 八夜威だ。」

「八坂 神奈子だ。それより
私の配下の神の件はどうしてくれるんだい？」

「あ」

紫に肩を叩かれ、何とも言えない気分になった。

諏訪大戦 Ⅰ 土着神話 VS 中央神話（後書き）

諏訪子 VS 神奈子が殆ど書けませんでした

・o r z

洩矢神社 守矢神社（前書き）

データがとんで苛立ちを覚えた今日この頃

洩矢神社 守矢神社

「うーんと、分かった。

神力やるからそれで勘弁してくれ。」

「……………まあ、多目に見てやる。

その神力は、私の配下だった奴らより価値が在りそうだ。」

神力を神奈子に送る。

回復が速いので消費は気にしない。

神力の総量は諏訪子や神奈子の足許にも及ばないが、魅力的な雰囲気醸し出しているらしい。

神力を送り終えたので、白翼をしまう。

そういえば白翼だけを出したりも出来るみたいだな……………

人間状態に戻ると帰刃は解け、世斬は腰に戻る。

ちなみに帰刃状態になると腰紐も消え、

上着の襟が鳩尾辺りで紐で結ばれる。動き易い。

それは兎も角、今は洩矢神社の本殿にいる。

諏訪子は既に復活しており、八夜威と二人で喋っている。紫はスキマに入って行ったきり戻って来ないから知らん。

大方、結界張って疲れたとか言って寝ているのだろう。

「さて、本題に入るよ。」

この神社は、これから完全に私の配下にする。」

「それは不可能ですわ。」

.....前言撤回。紫だ。

「何、不可能だって？」

私はこの戦いの勝者だ。不可能な筈が無い。」

神奈子の目が変わった。

確かに、いきなり不可能とか言われたらこうなる。実際は不可能だが。

「白は解っているみたいね。」

この地の人々が持つ、土着神に対する信仰は、神奈子、あなたの想像以上に、異常に根深いわ。だから今更あなたを信仰する人はいないわ。」

「ゆかりんの言う通り(、.....)」

「そうなのか.....」

「これはあくまで私の意見だけど、

神社の漢字を変え、表向きは神奈子を信仰させて実際は諏訪子を信仰させる、なんてどうかしら？」

「ゆかりんの言う通り(、.....)」

「そうだね、そうしよう。」

「じゃ、諏訪子、あなたの出番よ。」

「あー、どうしようか?」

諏訪子が、スキマから出て来た和紙に、
筆で文字を書いていく。
達筆だな

「守……………矢……………?」

八夜威が不思議そうに、諏訪子の書く漢字を読む。
全員がその和紙と筆に注目している。

……………出来たみたいだ。

諏訪子が胸を張り、言った。

「これから此処は、『守矢神社』だ!!」

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

「じゃ、またねー。」

「三人とも、達者でな。」

旅の再開だ。

諏訪子と神奈子との別れになるが、また会えるだろう。

「二人も、仲良くしなよ。」

「楽しかったわ、今まで有難う。」

「じゃあ、またいつか、な。」

俺達は、守矢神社を後にした。

洩矢神社 守矢神社（後書き）

神奈子の出番が少なかったですね。

嫌いな訳じゃ無いですよ？

ほかの所が多くて、押し潰された感じですよ。

それと誤字・脱字などがあれば遠慮せず指摘して下さい。

感想も待っています。

それぞれの理想へ

守矢神社から歩き始めて約三十分が経った頃、
八夜威が口を開いた。

「白、紫、話がある。」

「何かしら？」

「何だ？」

何事だろうか？

「私は、これから白達とは別に、旅をしようと思う。
鬼として、私は白を超えたいんだ。」

「あら八夜威、奇遇ね。」

私も、妖怪が暮らしやすい環境を創る為に、
自分の旅がしたいと思っていた所よ。」

どうやら二人は、自分の目標を達成する為に旅を始めらしい。
そう言う事なら俺は二人を応援するし、邪魔なんて以ての外だ。
八夜威のが少し気になるがね。

「じゃあ、これからは三人別々の旅になるのか。」

「白は、目標とかは無いの？」

「俺は．．．．．炎の有効活用法を探そう。
これだけの能力なら、出来ない事はほぼ無い筈だ。」

「白らしいわ。」

紫が、扇子で口元を隠しながら笑う。綺麗な声だ．．．．．
．．．．．
あと、いい加減、八夜威の目線が気になる。
何ぞ？いや予想は出来てるけれども。

「白、戦おう。」

「やっぱそうなのか．．．．．紫！」

「はいな。」

紫が半円状の結界を張る。大きさは半径約1kmだ。
安全確認の為に、結界に火炎光線を撃つ。
ビクともしないので強度は充分だろう。

紫が、俺と八夜威の間に結界を張った。

これが消え次第、戦闘開始か。

「白、多分もう何百年かは会わないだろうから、
お互いに悔いの無いようにやろう。」

「丸焦げになっても知らないぞ。」

結界が消えていく……………

八夜威はグングニルを構え、雷を纏っている。

その威圧は凄まじく、地は抉れ、大気は震えている。

蒼い雷を纏った金髪の立つ地面が抉れて凄い威圧を放っている光景が
某サイヤ人2に見えるのは俺だけじゃ無い筈だ。

髪は逆立ってはいないがね。

俺は二対の黒白翼こはくよくを広げて巨大化させる。

炎を全身に纏わせ、その規模を大きくして、更に圧縮した。

爆発的な威力の炎になるまで、一瞬で何度も繰り返す。

そして左手側には炎の幅広剣を創り出し、

右手側には炎の、約4mの超長槍を創り出し、構える。

最後に、中心の結界よりこちら側を

炎の海の世界にした瞬間、その結界は消えた……………

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

八夜威がグングニルを放って来た。

地面を抉り、風を切り裂きながら飛んでくる

俺でも反応するのがやっとの速度だ。

体を逸らして心臓は守ったが、右半身が消しとんだ。

「流石は白だ。今のに反応するのか。」

「いやいや、速過ぎるから……………」

右半身は既に再生した。

炎を纏い炎の海にいたので、再生が速い。

響転で八夜威の後ろに移動し、右手の槍で薙払う。

八夜威はそれを、何時の間にか戻っていたグングニルで受け止める。

反撃のパンチが飛んでくるが、左手側の剣で受け止める。

腕の骨が悲鳴を上げた。力だけでは負けると判断し、

左手の物と同じ炎剣を二十、創造して撃つ。

八夜威は大きく距離を取り、剣を回避した。

俺は空へと飛び、範囲（結界内）を炎で埋め尽くしていく。
八夜威の雷が俺を撃墜しに来る。掠りはするが直撃はせず、
結界内は既に紅い炎で染まっている。

八夜威がマスパみたいな極太の雷光線を撃ってきたので、
プロミネンスで相殺する。

.....俺の勝ちだな

「八夜威、最後だ。」

「まだまだ!!」

一瞬で八夜威に接近し、蹴り上げる。

右手も炎剣に持ち変え、空中にいる八夜威を迅速で、
縦横無尽に飛び回りながら斬りつける。

炎による追撃も加わっているので、威力は高い。

「つぐ.....」

「これで終わりだ!!」

もう一度、更に空高く蹴り上げ、

飛んでいった場所に上下左右からのプロミネンス。

因みに上、左、右からのプロミネンスは魔法陣、

下からのプロミネンスは人差し指の先から放つ.....

-
-
-
-
-

魔架「十字火葬」

-
-
-
-
-

·
·
·

それぞれの理想へ（後書き）

黒白翼で（こはくよく）と読むのは完全オリジナルです。
分けて言うのが面倒だったので……………

白の炎は紅いです。蒼白くはありません。ここテストに出ます。

感情と絶望の開花（前書き）

『絶望』のお話です。番外編です。
これは再登場フラグですな。

感情と絶望の開花

Side - ????

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

ああ、思い出してきた？

私は、家族を失って.....

自分自身の感情すらも、失って.....

？そして、自分の命も失った。

？私が八歳の時……………？

私は普通の小学校に通っていた。

クラスでは特別目立つ方でもなく、地味な方でもなく、成績は中間ぐらいで、運動神経も並みだった。

親は両働きだったが育児に関心が無い訳ではなく、朝、夜のご飯は毎日一緒に食べていたし、休日は一緒に出かけたりした。

兄弟には兄と姉、弟がいた。

兄は成績優秀で、優しく、頼りになる人だった。

姉は容姿端麗で、かっこ良く、憧れの人だった。

弟は純粹無垢で、あかるくて、守りたい人だった。

私はそんな家族と、毎日を楽しく過ごしていたのだ。??

だがある日、「一つ目」の悲劇が起こる……………??????

両親が、同じ日に亡くなった。？

死因はどちらも交通事故。

二人が同じバスで出勤していた時に、
そのバスが4つトラックと正面衝突したらしい。？

バスは原型を一切留めずに大破し、乗客全員が死亡した。??

この事件で心が折れそうだった私と弟を、兄と姉が支えてくれた。
兄は成人だったので、兄弟の為に働いて、生活費を稼いでくれた。
姉は高校生だったが、学校を辞めて、兄と共に働いてくれた。？

この二人のお陰で、私も弟も挫けずに生きる事が出来た。？

？だが、私達に「二つ目」の悲劇が降りかかる……………。???

？兄と姉が、亡くなった。？

家に強盗が入った時に、殺された。??

私はその時六年生で、弟は四年生だった。
家計は既に安定していたので、休日は全員が家にいた。

その日の夕方はお使いを頼まれて、弟と出かけた。？

買い物を終えて家に帰ると、部屋には紅の池があった。
咽返りそうな臭いと紅の中心には、姉が倒れていた。？

状況が呑み込めなかった。

私は、硬直している弟をおいて兄を捜そうとしたが、
何かに躓いた。兄だった……………。???

泣きそうだった。泣きたかった。？

でも、まだ、私は弟がいる事を忘れていなかったのだ。

私は正気を取り戻し、警察に通報した。??

その時、私は決意していた。？

せめて、弟だけは、護ろうと……………。???

私は弟を、抱き締めた??????

弟との二人暮らしになってから、丁度一年。??

その日、私は「感情」を、失った。??????

弟の通う小学校で、火災が発生した。

「三つ目」の悲劇、最悪の事故だった。??

原因は、理科の実験の失敗だったらしく、

その時同じ理科室にいた弟は死亡した。?

家の電話でそれを聞いた瞬間、私の感情は.....??

????????????????????????????????????

私は、悲しみを感じているのか???
その『悲しみ』が分からないのに?????????????????????
???????

.....あなたに、『絶望』を与えましょう.....???

あなたは、誰???

.....私は、この世界の『喜び』であり、『怒り』であり、『哀しみ』であり、『楽しみ』であり、『祝福』であり、『憎しみ』であり.....そして『希望』です。

感情そのものの存在???

.....言うなれば、そうでしょう。

ただ.....『絶望』だけは、私では無いのです。

それを私に押し付けるの???

.....少し違います。

.....あなたは『感情』を失いました。

未だかつて、そのような人間は存在しなかったのです。

あなたは、とても豊かで、其れ故脆い感情を持っていた.....しかし、だからこそ、あなたには可能性があります。

.....この世界の感情が私であり、私がそれを管理しています。逆にいえば、私以外がそれを管理することは不可能ですから、私では無い感情、つまり『絶望』は、暴走する可能性があります。.....いや、間違いなく暴走します。

その時、世界のあらゆる生命体は死滅するでしょう。
ですから暫くの間、あなたには『絶望』の器になって頂きたいの
です。

じゃあ何故、私を選んだの???

.....先ほど説明した通り、今のあなたには感情がありません。
ん。

私が干渉できるのは、感情の無い『物』だけです。
つまり本来、私は生命体への干渉は不可能でした。
そこにあなたが現れました。最後の希望なのです。

『絶望』の器になって頂くのは、千年程です。

しかし、人間が千年も生きる事が出来ないのは周知の事実なので、
基本的には寿命という概念が無い、妖怪の体になります。
そして手遅れにならない様、過去に飛んでもらいます。
千年が経てば、あなたに『感情』を分け与えましょう。

いいわ。断る理由も意味も無さそうだから。??

.....ありがとうございます。

では、今までの記憶は消しますか???

どちらでも構わないわ。??

『絶望』の妖怪に……、
??

「

!!!!!!
「???????

!

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

???????

私は、『絶望』???

私が、『絶望』???

重く、重く、重くて、重い……………?????

『恐怖』などの軽薄なものでは無い???

私が『絶望』している訳では無い?????

……もつ分かった???

私のやる事は……???

あらゆる生命体に、『絶望』を与える事???

「そんなの嫌だ」と言つ考えも、本能に掻き消されて、見えない???

?ただ、やるべき事をやるだけだ?????????

でも……………?????????

知りたいとも思わない??

妖怪も、神も殺した??

どれも微弱な存在だった??

顔は一つも覚えてなくて、表情だけしか覚えていない??

『絶望』した、表情のみだ??????

私は新しい絶望の表情を創る為に、近くにいた悪魔と妖怪を狙った??

この悪魔が、私の運命を変えらるかも知らずに……………?????

?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?
?

私はこの悪魔に一度殺されるという形で、

暗く深く重い『絶望』から解放された。?
??
??
??

感情と絶望の開花（後書き）

長文に挑戦してみました。どうでしょうか？

途中まではなんか、違う小説の一話目みたいですね。

感想お待ちしています。それと誤字、脱字の指摘も。

「このキャラが好き」みたいなのも歓迎します。

人気なオリキャラとかが分かったら、

そのキャラが主役の番外編とかも書くかもしれません。

悪魔で気分次第ですが。

旅立ちの前の死闘（前書き）

前々回の続きです。

旅立ちの前の死闘

地獄を彷彿とさせる炎

いや、そんな次元の物と比べる事自体、滑稽。

その直撃を受けた『生物』が、無事である筈は無い。
やり過ぎたな

「ふう、死ぬかと思ったよ もう死んでるけど
ね。」

「はあ!?!」

しかし、そこには無傷の八夜威が浮いていた。有り得ない。

「お、お前何で無傷なんだよ!?!」

多少のダメージは入ってる様子だけど

」

「忘れたのか？ 私は鬼霊だ。

傷は出来ないし、消えもしないよ。」

「……………不滅か!？」

蓬萊人と同じじゃねーか!？」

体はあの時完全に消し飛ばしたから、

死体を供養して成仏させる事も出来ないし。

鬼の力も有るのを考えると、蓬萊人以上か……………

体力切れの戦闘不能状態にするしか無いか？

夜斬を使えば消せるだろうけど殺し合いじゃ無いし。

反動もデカいしね。」

「じゃ、一方的に炙り続ければいいんだな？」

「やれるもんなら、やってみな!！」

翼の周りに魔法陣を三十展開し、

その魔法陣からプロミネンスを八夜威に向けて放つ。

直撃するが、体力を僅かに削るのみ。

八夜威が、グングニルを上に向けて撃った。

……………って……………え？

「槍雨「グングニルレイン」!!」

「んな無茶苦茶な……………!!」

その名の通り、グングニルの雨だ。

雨、と言うのは数的比喩では無いようで、

次から次へと大量に、異常な速度・威力の雷槍が降ってくる。

流石にヤバ過ぎるので炎の壁を頭上に創造、

温度を最高まで上げた。防ぎきれない……………

「調子に乗るんじゃ無え!!!!」

結界内全域に渡る特大の魔法陣を、地面に展開。

そこから上に向けての超強力・超大量火炎弾だ。

更に夜の力の弾幕も追加する。逃げ場も無い。

「「炎と夜の悪夢」!!」

「「雷帝激昂天地滅壊」!!」

八夜威も反撃して来るが、俺の弾幕が一瞬で押し切った。

確かに八夜威のも強い。何せさっきのグングニルに、

マスパ並の雷が大量に加わった鬼畜弾幕だった。

只、俺の弾幕の方が強かった。それだけの事だ。

炎と夜が、八夜威を打ちのめして行く……………

八夜威も流石に限界のようだ。

今にも落ちて来そうである。

勝負あり、だな……………

「はい、白の勝ちね。」

「そうだね、私はもう煙も出ないよ……………」

「紫は見物だけで良いよな。」

「あら、誰が結界を張ったと思っているの？」

「紫だよ。白、謝れ。」

「八夜威は一人で調子に乗るな。」

紫、お疲れ様。」

「ええ。あなた達こそ。」

俺達は、今日の夜までは一緒にいようと決めた。

朝になって、別々の旅を始めたら、

千年は会わないのだから……………

日は沈み初め、夜は近い。

紫の家へ向かった。

旅立ちの前の死闘（後書き）

八夜威さんまじパネエす。

白はもう……………規格外ですね。

それと短文ですいません。書けないんです）；；；（

旅立ちの前の死闘 くその二(前書き)

ほーよくてんしょーです。どうも。

MHP3で、温泉の泉質が最高になりました。

では、もう一つの死闘？の始まりです。

旅立ちの前の死闘 くその二

紫が、自宅へ繋がるスキマを開いた。

今まで考えた事も無かったが、スキマという空間は非常に気味が悪い為、出来るだけ入りたくない。八夜威も同じ事を考えているのか、顔色が悪い。いや一応亡霊だから色は薄いけれども。

「さあ、私の家へ行くわよ。」

.....

紫はスキマへ入って行った。

月に行くときは何とも無かったのになあ.....
おそらく俺と同じような顔をしているだろうと思ひ、
八夜威の方を見る。すると案の定、
ゲッソリした表情をしていた。顔が引きつっている。

「.....白」

八夜威の諦めたような声で、沈黙は破られた。

「ああ……行くしか無いか……」

俺も、もう諦めた。

「私が先に行くよ。」

「いや、俺が行こう。」

男として、先に行かせる訳にはいかない。

「私が先に行くよ。」

八夜威も引かない。鬼だからか？ そうなのか？

「俺が先に行くって……」

「……」

……
チッ

……雷符「マスタースパーク」……

……魔炎「プロミネンス」……

雷と炎の光線がぶつかり合い、爆発が起こる。

「何してんのよ……………」

ピチューン(x2)

スキマから出てきた紫が、呆れたような目で此方を見てきた。多少はムキになっていたので反論出来ない。

「それと、白」

「何？」

「爆発が起こったとかサラッと言ってたけど、それでここ等一帯が焼け野原よ？」

「あ……………ほんともう……………スイマセン。」

「まあ、分かったなら良いわ。八夜威もね。」

「ああ、分かったよ。」

俺達は、今度は同時に、紫の開いたスキマに入って行った。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

二度目の紫の家だ。

二千五百年以上も放置してあるらしいが、
外から見る限り、目立った汚れ等は無い。

ゆかりんパウワー……………恐るべし!!

「さあ、上がって。」

「紫の家は化け物か!?!」

「ああ、八夜威は初めて来たのか……………」

確かに、人間がつい最近まで縦穴住居に住んでいたような時代で、平安を彷彿とさせる様な和風の屋敷を目にしたら、

化け物かと思うかもしれないような気がしない事も無い。

紫も、俺と同時に未来から来た事は分かっているが、

インターフォンとかが追加されていなかった事に安堵した俺がいた。

隣であががが状態になっている八夜威を面白がりながら、

靴を脱いで家に入っていく。

埃が少々気になるが、仕方無いだろう。

掃除の手伝いでもしてやるかな……………

居間に入り、最初に目に留まったのは案の定、埃だった。

卓袱台や筆筒、部屋の隅等の場所に、有り得ない量の埃が溜まり、

部屋全体が灰色に染まっている……………ここま

で来ると笑えない。

埃妖怪でもいるのか？ 流石にそれは無いか。

「紫？」

「……………」

あれ？返事が無いぞ？

この惨状に心を打ち砕かれたのか？

「八夜威？」

「……………ああ、酷い有り様だね。」

「うん。いや、それより……………」

ゆ・か・り

「あー、多分、掃除でもしてやれば復活すると思う。」

「やっぱりそうなるか……………よし、全力で掃除をするぞ。先ずは役割分担だ。八夜威の能力で、静電気とか出せるか？」

「出せるよ。で？」

「埃、集めてくれ。」

「うん？……………分かったよ。」

八夜威が部屋の中心に強力な静電気を発生させる。すると、部屋全体にある埃が其処に集まっていく。

フリーズしている紫は放置。

これ以上埃は無いと判断したので、宙に浮いている埃塊を人間状態で、世斬で開けたスキマに放り込む。こうしないと「ありとあらゆる物を切断する程度の能力」が使えないのは、意外と不便だ。まあ、スキマに放り込みすぐに黒白翼を広げる。しかし天井にぶつかつたので畳んで、能力発動。埃を跡形も残さずに焼き消した。

「一件落着、つと。紫？」

「お酒も準備出来てるわよ？ 座りなさいな。」

「切り替えが速いよ！？」

八夜威、ナイスツツコミ。 紫、お前は何者だ？ 埃をスキマに放り込む時はまだフリーズしていたのに、酒まで用意して座っている。

「……………まあ、いいか。 呑もう。」

もう夜だ。

明日の朝には三人共別々の旅になる。暫くは三人での宴会……………と言つよりは静かで上品だが、こんな事も出来なくなるだろう。

俺達は酒を呑みながら、それぞれの理想や夢などを語り合った。

旅立ちの前の死闘 くその二（後書き）

死闘でも無かったようです。

黒の少女と魔の小屋（前書き）

白です。どうも。

作者が体調不良なんで、今回の前・後書きは俺が担当します。

あ、別に俺があいつの体温上げて寝込ませた訳じゃないですよ。

.....前書きって何書けば良いんでしょうね？

兎に角、最新話をどうぞ。

因みにサブタイは作者が考えた物ですので。

黒の少女と麓の小屋

紫も八夜威も、今はもう俺の側には居ない………

こう言うと死んだみたいだ。あながち間違っではない。片方は。

今日の朝から三人別行動だ。

寿命が無いからいつかは会えるし、スキマで会いに行く事も出来る。だが、やはり一人だ。

つまり何が言いたいかというと、暇なのである。

話し相手が居ない、やる事が無い、何かをする必要性も無い………

吸血鬼という体質は駄目人間量産機としか思えない。

ん？ああ、人間じゃ無いか。駄目悪魔量産機か。心底どうでも良いが。

て言うか、吸血鬼なのに吸血しない俺って何？

元が人間なのが由来しているのか？ それとも神力の影響か？

後者は考え難い。神力を持ったのは吸血鬼になってから十年以上後だ。

そうすると、前者である可能性が限り無く高くなる。

これは悪魔で予想だが、人間に必要な不可欠な一般の食事が吸血鬼になった事で、先ず必要無くなったんだろう。

しかし人間の部分、つまり霊力も残った。翼をしまえば確かに在る。それ故に、本来なら吸血鬼に必要な筈の吸血が必要無くなり、逆に吸血鬼でもあるが故に、食事の必要も無くなった。

この通りなら、栄養を取る必要が一切無くなったのか……………

マジでNEETになりそうだ。

それは嫌なので、取り敢えず飛んでいる。ギリギリ音速以下で。

ソニックブームを出さずに音速で飛ぶ事も出来るが、傘を差しながら自転車を運転するような感覚なのでやらない。

風を切る、と言うのは実に爽快だ。

射命丸が幻想風靡をよく使うのも、爽快だからかも知れない。

そつだ、今の俺ならスピードで射命丸に勝てるかも……………

流石に、風を味方に付けた天狗には勝てないか？

いや、翼を巨大化した上で炎によるブーストを使えば、あるいは。

暇だなあ……………

.....ん？ あの黒いのは.....
.....ゴスロリ！？

そっち方面の知識は無いので、取り敢えずそれっぽい物は
ゴスロリと言っておく。違ったら指摘して下さい。

あれ.....誰に言っただ俺？

それは兎も角あれは、ようzy.....妖怪だな。間違
い無い。

倒れている上に、妖力も大きいものの禍々しくは無いので、
無闇に人を襲う妖怪では無いと判断し、地面に降りて翼をしまつ。
助ける事にしたのだ。

まあ、目が覚めるまで介抱する程度だがね。

それにしてもこの妖力、どこかで一度見たような.....
.....

一瞬、五百年程前の戦闘が脳裏をよぎった。

しかしあり得る筈が無いので、それを否定した。

それにしても、黒い。

靴もソックスもスカートも洋服も少し短めの髪も

カチューシャも右手に持っている傘も、全て黒。

辛うじて洋服等のレースやフリル、

洋服や傘等の所々に付いているリボンは紅紫だ。

腰にある蒼い大きなリボンとカチューシャの大きな桜花が目立つ。

．．．．．かなりの美少女だったので説明してしまった。

兎に角、今はこの子をどこに運ぶかが問題だ。

俺は家など持っていない上に、手ぶらだ。

腰に世斬を差してはいるがね。

．．．．．小屋でも建てるか。

実は俺は、建築家を目指していたのだ。
基本的な構造は分かっているし、ここは木が大量にある。
確かスキマ内には畳も大量に浮いていたので、少し頂戴しよう。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

一時間後

建築の知識と吸血鬼スペックと能力のお陰で、もう完成した。
守矢神社と紫宅の構造を多少参考にし、山の麓に小屋を建てた。
その本殿的な場所に例の少女を運んだ。無論、布団は敷いてある。

さて、これからどうしようか

黒の少女と魔の小屋（後書き）

一言も喋ってません。

ていうか話し相手が居なかったんですよ！？

それと俺は後書きなんて書ける器じゃ無いみたいです。

黒の少女の正体と実態（前書き）

ほーよくてんしよーです。どうも。

39 前後の熱から復活しました。

インフルエンザとかじゃ無くて良かったです。

黒の少女の正体と実態

目の前の布団には、黒いゴスロリの少女が眠っている。

倒れてはいたものの、目立った外傷は見当たらず、服も破れたりしてはいなかった。

妖力が枯渇している訳でも無さそうだが、少しこれが気になる。

妖力と言う物は、少なからず、禍々しさや忌々しさなどの負的な要素が含まれている筈なのだが、それが殆ど無い。

それらは年月を重ね、妖力が成長すると共に増えていくのだが、ここまで．．．．． 具体的には俺とほぼ同じ大きさの妖力が在る。

．．．．． 考えていても仕方無いので、ありとあらゆる症状に

対応し、瞬く間に治してしまう奇跡の力．．．．． もとい神力を使い、

少女の傷（物理的な物かは分からない）を、一瞬とは行かないが、かなりの速度で取り除いてゆく。

これで、時間が経てば目を覚ます筈だ。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「……………。」

目が覚めた様子。瞳まで黒かった。

「目が覚めたか？」

「！……………あなたは？」

「炎魔 白、吸血鬼だ。呼び方は白でいいよ。」

「白さん、ですか……………」

さん付けかい！！　て言うか敬語じゃ無くていいのに。

「……………お前の
名前は？」

「私の名前は……………ありません。ごめんなさい……………」

「……………そうか、じゃあ自分で考えてみたら？」

無いと困るだろう。いつまでも「お前」って呼ぶのは嫌だし。

「……………あの……………
……………白さん？」

「うん？」

「なんで助けてくれたんですか？」

普通、私みたいな妖怪は恐れられるだけで、助けてはくれません。
それに私は一度あなたを殺し掛けている……！」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「……………やっぱりそうか。」

間違い無い。こいつは……………絶望だ。
だが、今のこいつからは、あの雰囲気は感じない……………
……………
それどころか、妖力の質が綺麗過ぎる、不自然な程に。

「あの後、何があった？」

「実は……………信用出来る話では無いですが、
私は元々人間だったんです。それも数万年も未来の……………
……………」

……………は？

え？ つまり俺や紫と同じ！？

ていうか数万年!? 俺より未来から来たのか?

「しかしある日、私は感情を失いました。」

包丁を首に刺して自殺をした先で、『感情』という存在と出会い、私が、その時それの中に無かった『絶望』の器になったんです。」

感情では無かった絶望は、感情の域から出て暴走を始める可能性があった。

こんな感じか?

「その後私はこの時代にとばされ、『絶望』として生きて・・・・
あなた達と出会う事になったんです。」

「うん。信用しよう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
何故ですか?」

「俺も紫も、未来から来たから。」

「ええ!?・・・・・・・・・・・・・・・・それは、何年の時にですか?」

「2010年」

「！！……………同じです。」

「マジかよ……………」

予想外過ぎる。

「……………さっきの話の続きですが、私が『絶望』の器になるのは千年で、それが過ぎれば感情を取り戻せるという事でした。しかし一度あなたに消し飛ばされて、何故かその期限が終わり、妖怪の躰と感情を取り戻したんです。」

「じゃあもう昔の事は気にするな。」

「無理です！ 私はあなた達を殺そうとしてしまった！！」

責任感強いな。でも……………

「そつだ、名前だ！」

「……………え？」

「俺がお前に名前をやる。」

だから、これから新しくやり直せばいい。」

「白さん……………」

その名前は?」

「桜」

「さくら?」

「そう、桜。

『一度は散っても再び花を咲かす』と言う意味を込めた。
気に入れば使って欲しい。」

「そんな私には良すぎるぐらいですよ
.
でも、喜んで使わせて貰いますね。」

「ああ。良かった。」

これで使われなかったら悲しすぎるな。
それにしても笑顔が眩しいっす。

「さて、これからどうする?」

「あの、もし良ければ
い一緒に、ここで暮らしたりい
い
いですか?」

「勿論だ。」

山の麓の小屋での、桜との暮らしが始まった。

黒の少女の正体と実態（後書き）

主要オリキャラ（オリ主含む）三人目です。

黒髪黒眼に黒のゴスロリ、黒の傘と言つ具合に、真つ黒にしてみました。

戦いで強さは未知数ですね。白よりは弱いです。多分。

予定変更は世の常（前書き）

ナルガクルガ亜種を狩猟しました。

ジンオウガが出るまでは下位装備で行きます。

でも、敵の体力的な問題で武器は上位の物です（飛竜刀「双炎」など）

予定変更は世の常

桜との生活の開始から十日・・・・・・・・・・

「白さん？」

「ん、なに？」

「白さんの中には、霊力と魔力、神力がありますよね。」

「うん。それがどうかした？」

「ここを神社にしてみてもどうでしょうか？
多分信仰する人は多いと思いますよ。」

「うーん・・・・良いとは思っただけど、何の神になるの？
炎神とか魔神とか？」

「分かりません。多分そのどちらかだとは思いますが・・・・・・・・・・」

「駄目じゃね？」

「……………やってみれば分かると思います。」

「そうなるか……………」

と、言いつつとで……………

一時間で建てた小屋が神社になった。デデーン。

元々造りはそれっぽかった。守矢神社も参考にしたからね。何故かスキマ内にあった注連縄を付けて、賽銭箱を置き、木を削って作った材料を組み立てた鳥居を小屋の前に置く。

これで見えた目は完全、中身もほぼ神社へと変貌した。二人でやったので十分足らずで出来た。

「出来たな。」

「そうですね。」

「どうする？」

「参拝者が来るまで待ちましょう。」

人里は近いですし、すぐに人は集まりますよ。」

「じゃ、そうしよう。」

それよりさ、気になってたんだけど……………

「なんですか？」

「桜の能力って、何？」

「私の能力、ですか……………」

よく分かりません。白さんの能力が炎系なのは分かりますけど、特に言うほどの物はありませんよ？」

「ああ、その能力には名前があるんだ。」

俺の場合は『炎を操る程度の能力』で、他には『雷を操る程度の能力』、

『境界を操る程度の能力』とかがある。
最後に『〜程度の能力』って付くのが特徴だ。」

「.....ありました。」

でも、二つありますけど、そういう事はあるんですか？」

「無い、とは言い切れない。」

俺も一応、『ありとあらゆる物を切断する程度の能力』と

『夜を司る程度の能力』も合わせて三つ持つてるけど、
どっちも刀の能力だしね。しかも夜を司る方は、

本来の吸血鬼の能力の強化版みたいな物だし、
能力二つはかなり珍しいよ。」

「そうなんですか。」

一つは『引力を操る程度の能力』です。

多分、重力を強くしたり、特定の物を吸い寄せたり出来ます。
超能力みたいな物でしょうか.....」

「チートだな。もう一つは？」

「『恐怖を操る程度の能力』です。」

これは、相手に恐怖を与えたり出来る能力だと思います。」

「.....強いな。」

『引力を操る程度の能力』は物理的には最強に近いし、

『恐怖を操る程度の能力』は、妖怪に有効な、

精神ダメージを与えられる。戦意喪失にも繋がりそうだ。」

「でも、白さん程は強くないと思います。」

「そんな事は無い。下手したら俺より強い。」

「白さんは自分を低く評価し過ぎですよ。」

「それは桜だろ。」

「違います!!」

「. 参拝者が来たみたいで
す。」

参拝者は、二十歳位の男性だった。

直接見なくても神社の中に居れば、イメージが伝わって来る。

願い事も頭に直接聞こえて来る。神様機能か。

えっと. 里が妖怪に襲われます どうか助けて下さ

い.

. 妖怪退治か。ていつかアバウト過ぎて

よく分からないな。

巫女さんの重要さを初めて思い知った。

「確かに、人里の方にそれらしい妖力を感じますね。

結構大きいので、面倒な敵かもしれません。」

「よく分かったな.

俺は遠すぎて分からない。」

「能力の問題じゃ無いでしょうか？」

妖怪は人間などの恐怖から生まれますから、
恐怖を操る私は、そういう物を感じやすいんだと思います。」

「そうか……………じゃあ早速、そいつを退治し
に行こう。」

俺と桜は、初の、神の仕事に向かった

予定変更は世の常（後書き）

読んで分かる通り、会話文が多めになっています。
前々回の反動です。

妖怪退治（前書き）

ほーよくてんしよーです。どうも。

ウラガンキン大嫌いです・・・・・・・・・・・・・・・・
太刀を研いでたら転がってきて轢かれて起き上がった途端にまた轢かれて
気絶した所に顎の一撃を食らってその瞬間に冷却効果が切れて死に
ました（´；；´）

妖怪退治

「桜ってさ、能力で飛んでるの？」

「そうです。浮いている感覚に近いですね。」

俺と桜は、例の妖怪を退治しに行く為に人里の方へ飛んでいる。やはり桜の能力は応用がかなり効く様だ。隣にいる俺には一切負荷を与えずに、空を飛んで（浮いて）いる事だけでも分かる。

そう言えば八夜威も、鬼霊に成ってからには浮いていた。

尤も、あいつは足自体が無いから浮くしか無いだろうがね。確か、その影響で生前よりも吹き飛びやすくなったな。ていうかあれで吹き飛ばせもしなかったら超然チートだし。

因みに、今は神の仕事と言うことで、黒翼は出していない。

「人里には着いたけど、ここら辺だよな？」

「ええ。少なくともここから2km圏内にはいる筈です。」

「じゃあ後は肉眼で探すよ。眼は良いからな。」

そりゃもう、本気でならマサイ族の十倍以上の視力はある。普段からそこまで眼が良い訳ではなく、いつもは人間より高い程度の視力だが、特殊能力が何かで右目の視力を上げられる。

..... 吸血鬼の眼には特殊な能力があるとよく言うが、

これが俺の眼の能力なのか？ 微妙なんだが。

「.....見付けた。こっちだ。」

「すごい視力ですね.....分かりました。」

朱い長髪に薄青色の着流し.....あいつだろう。
滲み出ている妖力を感じ、確信した。

俺達は、その妖怪の元へ向かった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

例の妖怪の後ろ側に着地した。

やはり男の妖怪だった。身長は約180cm、体はそこまで筋肉質では無く、

妖力の異質さとも相まって、肉体派の妖怪では無い事が分かる。

観察していると、その藍色の眼が此方を向いた。

「……………お前等は何だ？」

「神。あー、あと吸血鬼。」

「私は普通の妖怪です。」

「で、神と妖怪が何の用だ？」

「人里、襲わないでくんね？」

「断る。」

やっぱりそうなるか……………
面倒臭いな。

「巫山戯ているのか？
妖怪は人間を襲う・・・・・・・・文句があるなら、力強くで
止めてみる！！」

「・・・・・・・・・・炎魔 白だ。能力は『炎を操る程度
の能力』

「二千五百年を生きた吸血鬼の力、侮るなよ？」

「面白い・・・・・・・・・・！！」

俺の名は、霞かすみ 有幻ゆうげん。

『認識を操る程度の能力』を持つ、霞妖怪だ。
その永い歴史も、この能力に抗う事は不可能だ！！」

「あの・・・・・・・・・・私は？」

一瞬で有幻の顔面を掴み、地面へ打ち込む。
その瞬間に地面の温度を上げ、蒸し焼きにする。
頭を抑えつけているので動けないだろう。

・・・・・・・・・・だが、抑えつけていた有幻が霧散した。

「俺の姿は捉えられん！！」

「予想の範囲内だ。」

「私は・・・・・・・・・・？」

後ろから針のようなものを大量に飛ばして来たが、白翼で防ぐ。

言い忘れていたが、俺の翼は飛び道具に対して非常に強い。
グングニルみたいな異常な攻撃は普通に貫通するが、
チマチマした弾幕を防ぐ際には便利だ。
話が逸れた。

炎で結界を創り、徐々に小さくしていく……………
有幻は脱出する手段を持っていない。

「ぐっ……………糞があああ!!！」

「終わりだ。諦めて、里は襲わないと約束しろ。」

「……………」

有幻は、既に全身大火傷だ。

「巫山……………戯るなあああ!!！」

「……………諦めるよ。」

「私……………を……………」

ん？ 桜の様子がおかしいぞ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「桜？どした？」

「私を、空気にしないで下さい！！」

瞬間、地面に押し付けられる感覚が襲った。

周りにあった木々は微塵に碎け散り、有幻は地面に滅り込んでいる。俺は黒翼も出し、魔力で身体を強化する事で、何とか耐えた。

「桜、ごめん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

おい有幻・・・・・・・・・・ 死んで無いよな？

「・・・・・・・・・・・・・・・・ すいません。少し頭に血が上りました。」

「ああ、俺も悪かったよ。それより・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・生きてる・・・・・・・・ぞ・・・・・・・・・・」

死んで無かったか……………

「有幻さん……………すみません。」

「まあ、里を襲わないって言うなら傷は治してやる。」

「……………分かった。」

お前等には、どうやっても勝てなさそうだ。

「この世界では無敵だろ？」

「いや、俺等と同じぐらい強い奴が二人いる。」

有幻が超orz状態になった……………

そりゃあ、自分が最強だと思っていたのに一方的にやられて、それと同じ強さの奴が二人（正確には三人）いるなんて言われたらこの状態になってもおかしくないような気がしないでも無い。

取り敢えず、有幻を治してやる事にした。

妖怪退治（後書き）

文章の付け足しを行いました。

誤字等の指摘をお願いします。

自分では気付けないまま投稿してしまう時もありますので。

妖怪同士（前書き）

ほーよくてんしよーです。どうも。

お久し振りですね。それでは最新話をどうぞ。

妖怪同士

取り敢えず神社へ戻った。有幻を治す為だ。

「治った……………」

「やっぱり白さんは凄いですね。」

「俺って言うより神力だな。」

有幻の大火傷と複雑骨折を治した。

やはり、桜の能力はかなりヤバい。

実はさっき聞いたのだが、

有幻を全身複雑骨折にしたあれでも本気では無いどころか、

おおよそ1/10程度の感覚でやったとの事。

本気を出せばブラックホールも創れるそうである。

全く、紫も真つ青……………とまでは行かないが、チートだ。

さて、有幻を帰らせるか……………

「じゃあな。もうあの人里は襲うなよ。」

「……………逃がしていいのか？ 不用心過ぎるぞ？」

「確かに……………」

また里を襲う可能性は高いですね。白さん、どうするんですか？」

二人の言う通りだ。

傷を治しただけ、しかもその傷を負わせたのが自分なのに、俺は有幻がもう里を襲わないでくれると思っている。何故だか知らないが、そう確信しているのだ。

「有幻はそこまで悪い奴に見えない。理由はこれでいいだろ。」

「白さん……………分かりました、有幻さんを信じます。」

うん、桜は良い子だ。今度井戸でも掘ってやろう。

いくら妖力で体は綺麗に出来ても、風呂ぐらいは入りたいだろ。

俺でも少しは入りたいと思うのだし、女の子なら尚更だろうからな。お湯は能力で沸かせば良いか……………」

などと考えていたら、有幻が口を開いた。

多分『世話になったら』とか言って出て行くのだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・逃げない」

え？ 逃げない！？

「ええっと、それはつまり・・・・・・・・・・・・・・・・」

「有幻さん・・・・・・・・まさか？」

まさか・・・・・・・・・・・・・・・・？

「じ、じこに住むー！」

「本気で！？」

「ああ。」

「一応、神社ですよ？」

「構わない。」

・・・・・・・・・・・・・・・・なんてこった

予想の360度違う。一回転して別次元のどっかだ。
ていうか何故そうなったし・・・・・・・・・・・・・・・・

「俺を信じるなんて言ったのは、お前が初めてだからな。
俺は、自分を信じてくれる人と居たいんだ……………」

「有幻……………」

「有幻さん……………」

そうか……………そうだな。

妖怪なんていうのは、所詮人間の敵だ。

基本的に人間との信頼関係は無い。

しかも妖怪同士の交流がまだ少ないこの時代で、
他の誰かとの信頼関係を持てる妖怪は少ない。

自分を信じて貰えただけで嬉しかった……………」

この喜びの奥底にある悲しみが、俺の胸を刺す

「分かった……………霞 有幻、お前をこの神社の住人
として受け入れる。」

「……………ありがとう、白……………と、
呼んで良いか？」

「勿論だ。」

「それに、桜も。」

「いえいえ、私は何もしてませんよ。」

良かった。なんか白蓮の気持ちがあった気がする。

日は既に落ちて、三日月が空に映る……………

……………そうだ！

「桜、有幻、酒でも呑まないか？」

「賛成！！」

この時、俺と桜はまだ気付いていなかった。

霞 有幻という妖怪の、正体に

妖怪同士（後書き）

いかがでしょうか？

感想、意見など待っています

再びの・・・（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

超展開が苦手な方はご注意下さい。

目眩、吐き気などの症状が出た場合は、直ちにESCキーを押して
回避して下さい。

再びの

神社を建てたのは良いが、する事が殆ど無い。

妖怪退治は有幻の時だけだったし、儀式みたいな物も無い。信仰を集めるのに必死なら忙しいのかもしれないが、そこまで必要な訳でも無い。魔力もあるし。

神社の周りには神力を漂わせているので、全自動で参拝客に運が向くようになってる。

つまり、おまじないなどする必要は何処にも無い。それと同時に、やる事も無い

そんな感じで十年が経った。有幻と桜と上手くやって来た。やはり暇過ぎる
取り敢えず、井戸を掘ってみた。

吸血鬼のパワーがあれば、井戸を掘り出す事など昼飯前だ。

「おお」

「わあ」

「ふう」

上から有幻、桜、俺のリアクション。

二人は湧き出てきた水に感動している。俺は微妙に疲れた。

「これはいいな。」

「水は大事ですよな。」

二人共に気に入って貰えた様子。

こう言う反応が返って来ると、素手で土を掘り返した甲斐があったと思う。

そうで無くても、水は様々な事に使える。

料理洗濯歯磨き手洗いうがい風呂e t c

妖怪には必要無いものばかりだが、風呂は妖怪でも好きな場合が多い。

とは言ってもこの時代、風呂の類は温泉しか無いが、浴槽に浸かって一人の時間を楽しむのも気に入ってくれる筈だ。

. あ、これは有幻の話ね。

桜は元人間だから心配無い。

風呂に入るにはまだ早いな、昼だ。

昼飯をとる必要も無いし作れないし、桜も料理は出来ないらしいので諦める。

有幻は聞くまでも無い。この時代、しかも妖怪だし。

「さて、いつも通り暇な訳だが……………」

「何もする事無いですもんね……………」

「人襲いてえな……………」

何言ってるんだか……………神の目の前で

「俺としては結構だが、神としてやらせないぞ。」

「神の前で言う事じゃ無いと思いますよ。」

「そうね、この子の言う通りよ。」

「やっぱり駄目か……………」

「ん？」

「あれ？」

……………今、何か一人多かった
気がする。

二人も違和感を感じているが、分からん……………

「何か変だったよな？」

「ええ、私も違和感がありました。」

「俺も感じた。」

「うふふ、私もよ。」

瞬間、視界の上から見覚えのある金髪と紫色の目の顔……………
……………
もとい紫が、いつもとは180°逆で出て来た。
顔がとても近い。具体的には距離が0mm。
つまり逆さまの紫とキスをしている状態になっている。

「あ……………あわわわ……………」

「……………」

上から桜、有幻の反応。　そうなるよね！。

「ん……………はあ……………」

久し振りね、白。」

「……………常識的に考えて行動しろ。」

いきなり出て来るのもおかしいし、上から来るのもおかしいし、出て来て人前でキスするのもおかしい。」

「わかったわよ……………後でするわ。」

……………それより、その子は何かしら？」

「……………私は……………」

……………」

「分からん……………どういう事だ？」

紫が、扇子で桜の方を指す。

一発で気付くとは思わなかったが、いつかは説明する必要があったのだ。

今でも変わりはいないだろう。それと有幻には悪いが、説明は後だ。

「紫の思っている通りだ。」

だが、今はあの時と違う。」

「紫さん……………でしたね？」

私は、あれが許されるとも思っていないません。

ですが、もうあなた達を殺そうとは思わないと約束する事は出来ません。」

紫は無言で、桜を舐め回す様に観察し続ける。

扇子で口元を隠している為、表情を伺う事は出来ない。

何を考えているのか予想するが、やはり紫は読めない……………

暫くの沈黙の後、紫が口を開いた。

「別に良いわよ。」

私、過去は気にしない事にしてるの。」

「予想外だが予想通りだ。」

桜、もう気にしなくても良い。」

「あ……………はい……………」

反論しては来ないので、許して貰えたことに疑問は感じてても、裏は無いと思っただろう。

これで五百年前の事は解決した。

「それより紫よ、ここに来たのは何か理由があるからだろう？」

「ええ……………大変な事よ。」

八夜威と神奈子、諏訪子も呼んだわ。」

「やあ。鬼霊の神崎 八夜威だ。」

「神の八坂 神奈子だ。」

「同じく、神の洩矢 諏訪子だよ。」

「よっ。」

「妖怪の桜です。」

「霞 有幻、霞妖怪だ。」

「じゃあ、説明を始めるわ。

本当に緊急事態だから。」

それにしても冷静だが

「何が緊急なんですか？」

「それがね 落ち着いて聞くのよ？
. 月の民が、地上
に攻めてくるわ。」

八意や蓬莱山、綿月などは最後まで反対していたから、
月人の中の強硬派、と言った方が正しいかしら。」

衝撃的だが、黙って聞き続ける。 全員同じ様に。

「月人は次の満月の日、つまり十三日後に地上に降りてくるわ。
今の月人の科学力を考えれば、大量の兵器を使用してくるでしょ
うね。」

紫の話は止まらない。既にこの空間の支配者は紫だ。

「地上に攻めてくる理由はただ一つ、全ての妖怪を殺す事よ。

人間の命に寿命を及ぼすもの．．．．．『穢れ』という物の正体が、

妖力と魔力である事が最近判明したらしくてね．．．．．

．．．．．

全ての妖・魔を消せば、地上から穢れが無くなるわ。

つまりは地上が月と同じ環境になるのよ。

月人では人口爆発が起きたらしいから、尚更必要になったのでし
ようね。」

固唾を飲み込む音が響く。 誰のとは言わない。

「勿論、それを止める方法は考えてあるわ。

その為には私、白、桜、八夜威、神奈子、諏訪子、有幻は勿論、
ある程度の力を持つ妖怪全てが協力する必要があるわ。

具体的には、私が指揮を取りながら境界を操って戦いを有利に進
め、

有幻と桜には私の援護に回って貰うわ。

八夜威、神奈子、諏訪子には先頭の前線に立って戦って貰いまし
よう。

そして最後に．．．．．白には、私の準備の手伝いをし
て貰うわ。

以上、解散して良いわよ。」

今回は月人が完全に悪いみたいだ。戦いを防ぐ必要も無い。

八夜威は配下の鬼を集めに行つた。四天王とか居るらしいが、俺の知識の中にある四天王は居ないだろう。

桜は神社の外に出て行つた。もつと能力を自由に使えるように、有幻を連れて修行中だ。

神奈子と諏訪子も、桜達とは別に修行している。最も、この二人は月人の標的では無いが、協力してくれるらしい。前より信仰が増えているので益々頼もしい。

そして俺はやる事が多いらしいので、紫に詳しく話を聞いている。

「白には、二つの事をして貰うわ。
まず月にある神社に行つて、敵の数とかの情報を私に教えて。
スキマは満月じゃ無いと繋がらないわ。」

「分社ワープか。」

「そして、世界中にいる悪魔を集めて頂戴。
吸血鬼の能力があれば出来る筈よ。」

「了解。じゃあ、明日にでも出るか……………」

「

「ええ。今日は休みましょう。」

こんな事になるとは思わなかったが、永琳達と戦う事にならなくて良かった。

月に行ったら、永琳とも会うことにしよう。

それにしても、あと十三日か・・・・・・・・・・・・・・・・
不吉な数字だが、きっと大丈夫だろう。

空もすっかり暗くなっていたので、寝ることにした。
紫がくつついて来るのも久々だ……………

こんな日常が続くように、必ず勝つことを決意した

月の神社（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうせ。

最近は調子が良いような悪いような感じですよ。どっちだよ
では、最新話をどうぞ。

月の神社

「白ー、朝よー。」

.....この声は.....紫？

朝か、まだ眠いのに.....

「吸血鬼なのに夜に寝るからじゃ無いの？」

仕方無いだろう、元は人間なんだから。

「そう言えばみんなは？」

「修行に行ったわよ。起きなさいな。」

「んー、あと少しだけ.....」

「寝坊する人の台詞を言わないの！」

布団を剥がされた。朝の風が当たって寒い。

俺は起きたばかりで鈍っている思考を働かせ、身の回りの温度を上げた。

丁度布団に入っている時と同程度の温度なので、再び睡魔が俺を襲う
．．．．．かに思われたが、意識
が急に覚醒した。

「『昏睡と覚醒の境界』を弄ったわ。」

「ぬう．．．．．眠気が完全に飛んだ．．．．．」

「巫山戯て無いで、起き上がりなさい。」

「．．．．．」

起き上がった。敷き布団がスキマに吸い込まれて消えた。

俺が再び眠りにつくには、スキマから布団を取り出す必要がある。

今は、と言うより寝る時は人間状態なのですぐにスキマを開けるが、この状態で紫と布団の取り合いをすれば負けるのでやめる。

「どんだけ寝たいのよ．．．．．」

「何時までも（．．．）」

「はあ……………」

「何だよ、その反応は。」

「あなたねえ……………」

言っておくけど、寝ている時のあなたは人間の状態なのよ？

その時に妖怪の不意打ちを食らえば、死ぬわよ？

確かに、人間とは言っても並の妖怪よりは遥かに強いけれど、

私達と同じ位の力を持った妖怪なら目を覚ます前に止めを刺せるわ。

もう少し危機感を持ってよ。」

「俺だって、何も考えていない訳じゃ無い。

一人でいる時は寝ないし、不意打ちにも備えてる。

でも、紫や八夜威達が居ればその不意打ちも止めてくれるだろ？

夜に寝る習慣の無い妖怪は、夜に眠っても妖力を感じれば起きる。

紫達と寝ている時に不意打ちを食らうなんて有り得ない。」

「屁理屈だけは一人前ね……………」

まあ、いいわ。私達を信じてくれてる、って分かったからね。」

「何言ってるんだよ……………信じてる、なんて当たり前のことだろ？」

「ふふ、そうね……………」

……………そろそろ行くかな、月の神社。

月の民からの信仰は消えて無いみたいだし、大丈夫だろ。

「じゃ、月、行ってくる。」

「行っでらっしやい。」

月の神社へ移動するイメージを、何となく頭に浮かべてみる。俺の予想では行ける筈だが、行けなかったので方法を変える。

「白、翼」

「あ」

翼を出していなかった。これでは行けるものも行けない。さっきと同じようなイメージを浮かべる。手を振る紫が軽く見えたのと同時に、視界が切り替わった。

-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .
-. - .

「ぬわっ!!」

痛つてえ・・・・・・・・頭から落ちた・・・・・・・・

これは練習が必要だな。

まあそれは置いて、立派な神社だ。

流石に諏訪大社と比べれば見劣りはするが、
そんじよそこらの物とは比べ物にならない程度には大きい。

鳥居なども綺麗に出来ている・・・・・・・・白黒なのはスル
ーするべきだろう。

そして豪華な賽銭箱の中には大量のお賽銭が入っている。

これだけでもプチ富豪になれそうな程の量なので少し反応に困る。

「ん？・・・・・・・・これはひどい
!!」

何だこれは・・・・・・・・!!?

神社の前に落ちていた紙切れを見てみると『この生活は退屈だ、
いっそのことニートにでもなりたい』と言うお願いが書いてあった

「へえー、それで月に来たの……………大変ね。」

「冷静だな、全く……………」

現在、輝夜と神社の縁側で会話中。

本当はこんな余裕は無いのだろうが、周りが冷静だと感化されてしまふ。

輝夜とは自己紹介とか、地上での出来事とかを話した後で目的を思い出し、

話を此方にシフトした。

「で、だ。八意 永琳って言う人は知っているか？」

「ええ。私の家庭教師よ。多分探しに来るわ。

……………もしかして知り合い？」

もう輝夜の家庭教師なのか……………
依姫・豊姫にはこの短い時間で沢山の事を教えたのだろう。

「ああ。兄妹みたいなもんだ。

ていうか、輝夜はよくここに逃げてくるのか？」

「だって、退屈なんだもの……………」

「それは分からないことも無いけど……………
ん？」

この神社の前に落ちてた紙切れ・・・・・・・・あれを書いたのは、まさか・・・・・・・・

「輝夜、そう言えばこんなものが・・・・・・・・」

「ギクッ　　ってなると思ったの？　私が書いたのよ、神様に頼む為にね。」

でも、もうそんな物を書く必要は無いわね。神様が目の前にいるもの。」

「はぁ・・・・・・・・」

駄目だこいつ、はやく何とかしないと・・・・・・・・

「よし、燃やす。」

「え？　ちよつとまつ・・・・・・・・きゃあああああ！！！」

ははっ、燃える燃える、その根性を燃やし直せ。

え？ひどい？　『だるさ』だけを燃やしてるのにな？

「どうだ、悪性腫瘍を燃やされた気分は？」

「清々しい気分ね……………」
私、なんかやる気が出てきたわ。」

「やる事が無いのにやる気があってもなあ……………」
「……………」

「そつだ、囲碁、やりましょう?」

「囲碁か、いいよ。ちよいとまってて。」

「了解。」

白翼をしまい、世斬でスキマを開く……………
……………
浮いている碁盤と碁石を取り出した。

「じゃ、輝夜はどっちの色にする?」

「黒にするわ。……………今の凄いわね……………」
「……………」

「始めるか。」

「ええ。」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

「白……………黒はどこに行ったのよ……………」
「……………」

「ははははっ、二千五百年と少しを生きた俺を甘く見るなよ!！」

結果は御覧の通り、俺の完勝。

因みに紫には勝てない。完敗以外は無。あれは化け物だ。

「ぬー、永琳には勝てるのに……………」

「そうなのか、そりゃ残念だったな。」

絶対に永琳が手加減しているだけだが、言わないでおく。
輝夜の心をへし折る必要は無。

「姫様ー、ここにいるんでしょー、出て来て下さい。」

おっと、懐かしい声が聞こえてきた。

輝夜は遊べたので満足そうだ。素直に返事をした。

「えーりん、こっちよー。」

「全く、何回もお屋敷を出ないで下さ・・・・・・・・・・・・・・・・
白、来たのね・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ。」

久し振りに会ったが、お互いに外見はほぼ変わっていない。
俺が少し大人っぽくなったただけだ。

「まあ二人とも、立ち話もなんだから屋敷に戻りましょう。
部屋を貸すから、そこでゆっくり話をしましょう。」

「そうだな、ありがとう輝夜。」

「そうしましょう。」

輝夜と永琳に案内されて、蓬萊山家の屋敷へと向かった。

月の神社（後書き）

会話が不調 全体的には普通

微妙ですね。 すいません。

二つの剣（前書き）

ほーよくてんしよーです。どうも。

今回の白はずっと人間状態です。

二つの剣

輝夜に案内されて、月の都を歩いて行く。目的地は蓬萊山の屋敷。

やはり二千五百年前に見た物と変わらず、目に留まるのは超高層ビル群、俗に言う摩天楼だ。が、稀に日本風の屋敷もある。日本風、と言ったが、まだ日本に屋敷など無い。

ていうか、日本の地形自体が微かに違う程の時代であることに、月に来てからようやく気付いた。前は気付かなかった。もしかすると、紫は気付いていたのかも知れない。

話が逸れたが、言いたかったのは日本屋敷を先に建てたのは日本人では無く月人だと言うことだ。

「屋敷が気になるの？」

「ああ、違和感がある。ていうか違和感しか無い。」

「月の屋敷は全て自動ドアとかよ。見た目の問題ね。」

「姫様の家は和を重んじているからね。

金属で出来た様なものは嫌いなよ。」

「でも自動ドアなのか……………」

何か不思議だな、月の民。
血眼で妖怪を滅ぼしに来たり、ビル群とか造るような奴も居れば、
妖怪と無駄に争う事を拒み、屋敷で静かに暮らすような人も居る。
永琳や輝夜は完全に後者。

「さあ、着いたわ。上がって良いわよ。」

「でかいな……………迷いそうだ。」

「姫様の声に反応して出て来るマップがあるわ。」

「そりゃ迷わないな。」

声に反応して目の前に出て来るマップとかもうね……………
……………

「じゃあ、この部屋でゆっくり話すと良いわ。」

最も、ゆっくりする余裕なんて無いかもしれないけどね。」

「困暮の相手させやがって……………。」

「あなたが乗ってきたのが悪いんじゃない……………
……………」

「はは、冗談だ。わざわざありがとう輝夜。」

「別に良いわよ……………」

輝夜は、鼻を擦りながら部屋を出て行った。

感謝の言葉に照れているのだろう。可愛い所あるじゃねえか。

「……………兵の数は十万、兵器は主に戦車と爆弾。」

核爆弾なんて普通に使うし、戦車にも核エネルギーは使われていないわ。

それと、兵は基本的にはパワードスーツを着ているから、

全員が妖怪並みの身体能力を有しているから油断は禁物よ。

人型の巨大ロボットとかもあるけど、核爆弾と水素爆弾に気を付ければ

大丈夫だと思うわ。無音爆弾は威力が弱いから問題無いわ。」

「地上を焼け野原にするつもりか……………面倒くせえな……………」

本当に面倒だ。攻めてくる月人が周りへの被害を考える訳も無い。つまり、早めに決着を付けないと被害がシャレにならない。

「早く地上に戻って、他の妖怪に伝えたら？」

「そうだな……………取り敢えず神社に行くか。」

「私も行くわ、神社までは。」

輝夜にお礼の手紙を書き、神社へ向かった

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

「さて、帰るとするか・・・」

本当は永琳や輝夜ともっと話をしたいが、仕方ない。

「その前に、一回、本殿に入って。」

「？ まあ、良いけど・・・」

永琳の目的は分からないが、本殿へ入ってみる。

そこには、どこかで見た黒色の、まるで十字架にも見える剣が、まるで俺を待つように置いてあった。手にとって、これが何かを確かめる……………

「この剣……………夜斬!？」

……………何でここにこれがある!？」

あの『夜』と全く同じ感覚……………

全てを屈伏させる事の可能な、絶対的な力……………

こんな物は、一つしか無い。

「永琳……………何を知っている?」

「ええ、実はね、私があなたに渡した刀……………
『世斬』は、

一つの剣が二つに別れた内の片方なの。

……………剣を造っている時、その剣には二つの能力があった。

一つは『ありとあらゆるものを切断する程度の能力』。

そしてもう一つが……………」

「『夜を司る程度の能力』か。」

「そう。この絶大な二つの能力は、一つの剣には収まらなかった。

だから、元々強かった『夜を司る程度の能力』が剣を支配し、
『ありとあらゆるものを切断する程度の能力』は追い出された。
この追い出された能力を何とか形にしたのが、世斬よ。」

「成る程、それなら俺に取り込まれるのも分かるな。

只、世斬にも夜の能力はあったな。強すぎたのか……………
……………」

「まあ、何にせよ、夜斬は今回の戦いでも力を発揮するでしょう。」

「そうだな。背中にでも背負ってくか……………
……………長いし。」

柄の先から切っ先までの長さは、俺の身長とほぼ変わらない。
それと、世斬と夜斬は体の一部みたいな物なので、
紐とかで繋いだりしなくても背負える。便利。
ちなみに世斬は普通に腰に差す。こうしないと不格好だ。

「じゃあ、またいつか。」

「ええ。」

もう一つの剣、夜斬を新たに携えて、俺は月を去った

二つの剣（後書き）

久々の投稿で短文

真・夜斬（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

突然の余震でコーヒー牛乳がこぼれた……………

o r z

真・夜斬

視界が切り替わる

「っと また頭から落ちるかと思った . . .
」

なんで分社ワープをすると上下が逆になるのだろうか？
全くもって意味不明、理解不能だ。

「あら、早かったわね。もう少しゆっくりして来ても良かったのよ
？」

「紫 何でみんな呑気なんだよ
」

輝夜も永琳も紫も、冷静ってレベルじゃ無い落ち着き様だ。

まあ、今いる妖怪はチートがデフォだからな

「……………夜斬、持ってきたのね。」

「ああ、紫はこれの存在を知ってたんだろ？」

「勿論よ。だから冷静でいられるの。」

「夜斬の使用には制限がある。紫も分かっているだろ？」

「ええ。でも夜斬本体を持った状態なら、制限も変わるわよ。

干涉系の能力も効かなくなってるわ。

制限はもう大体は分かったわ。」

「マジか……………で、どんな制限が掛かるんだ？」

「まず、夜斬の使い方自体が増えてるから、やってみて。」

無茶振りだ。でも薄々気がついていたら大丈夫。

取り敢えず黒白翼を広げた。

夜斬を抜刀（鞘は無いが）し、構える。これだけなら負荷は無い。

この状態で夜の力……………面倒だから夜力と

呼ぶ事にする。

夜力を刀身に纏わせ、空に向けて放つ。

放射状に飛んでいく夜力は、周りの空間ごと飲み込んでいく……………

……………

大気圏まで届きそうところで、消えるように念じたら消えた。

夜力はまだまだ残っているが、今のを連発することは出来ない。

「少し時間を置きましょう?」

「ああ。夜力がいくらあっても連発は出来ないみたいだしな。って、もう出来そうなんだけど……」

「それは予想外ね……じゃあ、今のとは違うのを。」

「分かった。」

夜斬を霧化させ、その霧で両腕、両脚を包んでいく……

この状態で霧化を解く。

すると手足は金属の様な夜力で包まれた。

爪は鋭く長いが、短くする事もできる。

八夜威とも互角以上に殴り合えそうな程の力が漲って来る。更にはブレードみたいな物も付加する事が可能だ。

「これは凄いな……」

「走るのも速くなると思うわよ。」

「確かに。じゃあ、違うのいつてみよう。」

夜力………
ケ所に集める。

それを弓の形にして具現化 巨大な弓
矢だ。

「予想以上に応用が効くわね」

「今なら弾幕で紫と互角以上に戦えそうだ。」

「無茶苦茶ね。」

弓を霧化させ、今度は二つに分ける。長めの双剣だ。
更には、槍、大鎌、薙鉞、鎖鎌などにも変化させられる。
どれも威力は凄まじく、一振りで地形を破壊する程で、
夜力を纏った一撃は即、死に繋がる。と思う。

「うわあ」

「無闇に振り回したら危ないな。」

翼に夜斬を纏わせる。速く飛べると思う。

「ちょっと地球一周して来る。」

「分かったわ。」

空高く飛翔し、適当な方向に向けて全力全開で飛ぶ。
北極が見えた。が、すぐに通り過ぎる。
さらに南極を通過し、再びの日本。
この間、実に十秒。

「いい風だった。」

「もう、本当に超絶的ね……………」

「えー、まだあるのに……………」

夜斬を元の形に戻し、構える。

そこに、俺の中にある世斬を具現化。

刀身の腹は黒く、刃は白銀……………」

夜力と魔力、神力を纏わせ、空に向けて、左から右に薙ぎ払う。

切断された空間を、夜力が完全に飲み込んで破壊した。

「……………」月の兵が可哀想にすら思えてきた
わ。」

「疲れた……………」

もう夜力は使えないから、制限するのは時間制限か。

……………」風呂にでも入るか。」

「有幻が入ってるわよ。広めに作っておいたから、

一緒でもいいんじゃない？ 男同士だし。」

「冗談のつもりだったんだけどな．．．．．
わざわざ作っと思ってくれてありがとう。」

しかし、有幻が入っているとは．．．．．夜だ

けど、この時代の妖怪が

もう風呂に慣れてるなんて予想外だ。

それに有幻は風呂とかを嫌うタイプだと思ってた。

神社の風呂場へ向かった

真・夜斬（後書き）

誰も白に勝てないと思います。はい。

認識（前書き）

ほーよくてんじょーです。ごうせ。

風呂に入るので夜斬と世斬を壁に置き、服を脱ぐ。

黒く、マント程の長さがある上着、白いＴシャツ、黒いズボン・・・

.....

なんで色が白黒しか無いのかは謎だ。

脱いだ服を全て畳み、紫が用意してくれていた籠に入れた。

隣の籠に入ってるタオルを持ち、風呂場に入っていく。

ちなみに、この時代だからかは知らんが、ドアは無い。

「有幻ー、入るぞー。」

「.....え？」

朱い長髪に藍色の大きな瞳の、幼女が、そこには居た

風呂というものに入った時、あまりの心地良さに能力を解除してしまった。

そしてそのまま湯に浸かっている時に、白の声が聞こえて来たのだ。

「有幻ー、入るぞー。」

「……………え？」

……………見られた

しかも、よりによって、裸を……………
……………！

……………
……………
……………

side - 白

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええーっと、有・・・・・・・・・・・・・・・・げん？」

「出て行け！！」

針が大量に飛んできたので、急いで風呂場を出た。

人間状態であんなのをくらったら最悪死ぬ。

それより・・・・・・・・・・・・・・・・

有幻が幼女！？

それも桜や諏訪子以上に！？

さつき見えた感じだと、外見は10には確実に満たない程だった。

ちなみに桜、諏訪子は10ぐらい。八夜威と輝夜は12 13ぐらいだ。

なに冷静に説明してんだ俺！

取り敢えず服を着て、もう一度見てみる。

・・・・・・・・・・・・・・・・幼女に欲情した訳では無い事をここに記しておく。

「……………有幻？」

「……………」

浴槽に浸かっていた。こちらを向く気配は無い。

「……………有幻ちゃん？」

「うるさいっ！ー！」

さっきの針に大きな釘が加わった弾幕が飛んできた。

慌てず冷静に、戦略的撤退。

ちなみに神力で執拗に強化した神社の壁には軽い傷がついただけだ。

黒翼は天井にぶつかるので白翼のみを出し、再び有幻ちゃんの元へ。

「有幻ちゃん、出ておいで。」

「うるさいっ！！黙れっ！！出てけ！！！」

ロリヴォイスと同時に、レーザーまで加わった弾幕が飛んでくる。
白翼で弾幕を防ぎ、ロリヴォイスに言葉を返す。

「分かった。外に出てるから、もう少ししたら出ておいで。」

「子供扱いするなあ!!!」

再び飛来するロリヴォイスと弾幕。

炎で弾幕を打ち消し、ロリヴ（ry は華麗にスルー。

俺にばれたから、もう隠そうとはしない筈だ。

世斬、夜斬を持って外へ.....

.....

外には紫と、桜が居た。

「あら、お風呂は?」

「白さん、久し振りです。」

「ああ、久し振り、桜。

それがね 衝撃的な光景だったよ。」

「「え?」「」

二人は、さっぱり分からない、という表情を浮かべる。
俺は一言で、その光景を紫に伝える。

「 有幻ちゃんが居た。」

「 」

呆気に取られた様子の二人。

「もう少しで出て来る筈 ほら出て来た。」

「全く気が付かなかったわ 」

「紫さんでも分からなかったんですか 」

風呂の方から、身長とほぼ同じ長さの朱い髪をツインテールにして、

着流しでは無くワンピースを着た有幻が歩いて来る。
恥ずかしがっているのか、頬は赤く染まっている。

「……………何で誤魔化してたの？」

「必要無いと思いますよ？」

「本当、隠す必要ねーだろ。」

普通に可愛いし。

危ないオッサンとかが襲って来そうだが、有幻は強い。

「……………は……………かし……………
……………から……………」

「「「？」「」」

「恥ずかしいから!!」

ふむ、恥ずかしい……………恥ずかしいとな……………
……………

「あら、そんな事？」

大丈夫よ、普通に可愛いわ。」

「紫に同じく。」

「私もそう思います。」

「まるでお人形さんみたいです。」

「え．．．．．かわいい．．．．．？」

．．．．．本当に？」

特にそういう所がね。

何言ってるんだ俺。

．．．．．普通に大多数の人が、可愛いと『認識』するだろう。

「私は意味のない嘘はつかないわ。」

「俺も、無意味な嘘はつかない。」

「嘘なんて言いませんよ。」

「そう．．．．．」

「なんだ、隠す意味なんて無いじゃない!!」

．．．．．紫、白、桜．．．．．本当に
にありがとう。」

もやが晴れたように笑う有幻．．．．．良かった。
良かった。

「じゃあ、ゆうちゃん、とでも呼ばせて貰おうかしらね？」

「そうだな、ゆうちゃん？」

「ゆうちゃん……………いいですか？」

「ええ、いいわよ。」

「じゃあ、他のみんなに説明して来るね。」

「私も行きます。」

夜なので、俺は寝る事にした。

ゆうちゃんはこれでスッキリしただろう。良いことだ。

布団を敷いて神社で寝る。

いつも通り、紫の温もりを感じながら……………

認識（後書き）

本日二話目の投稿です。

吸血鬼と悪魔王（前書き）

ほーよくてんしょーです。どしませ。

吸血鬼と悪魔王

「月人が攻めてくるまであと……………」

「五日よ。」

oh……………普通に生活してたら、もうそんな経つたのか。

そういえば全員に例の事を説明して帰ってきた有幻、桜が、八夜威も神奈子、諏訪子も「戦争は白達とは別々にやる」とか言っていたらしい。つまり帰ってこない。

そういえば有幻が「改めて考えると、ゆーちゃんは流石に無い。」とか言ってきた。だが俺はこの呼び方を変えるつもりは無い。ちなみに二人は再び修行に行った。ていうか、もし俺が一人でいたら、戦争なんて確実に忘れていただろう。別に楽な戦いだと思ってる訳では無いのだが……………」

「必要以上に騒ぐことは無いけれど、もう少し危機感を持ちなさいな。」

「いや、日常が続くとどうしてもね。」

……………悪魔の召還でもするか。」

「.....悪魔は、強大な妖怪よ。
あなたが吸血鬼の始祖だからって、簡単には協力してくれないで
しよう。」

まして世界中の悪魔なら当然、悪魔王サタン、つまりルシファー
は勿論、

ベールゼブブ、レヴァイアサンなんていう伝説級の者達がいるわ。
まあ、最悪、実力行使に出ても良いけどね。」

ルシファー.....中二病のイメージキヤ
ラとして有名なアレか。
え？ちがう？

「最初からそのつもりで交渉しても変わらなそうだけどな。
取り敢えず、召還してみるか。初めてだけど。」

.....と言っことで、神社の隣の山
の頂上に来た。
辺りに木などは生えておらず、なかなか広い。

「じゃあ、始めるぞ。」

「魔法陣とか出さなくていいの？」

「大丈夫でしょ…………… うおおつ！」

俺が、なんとなく悪魔っぽいイメージで召還魔法を唱えると、闇の様にも見える、黒い光の球が現れた。やがて光は大きく広がり、その中に見えたのは、異形の漆黒の翼と細長い尻尾を持つ、小さな人影……………

……………
……………
……………
……………
……………

「一人だけ……………？」

「ああ、こいつ一人で精一杯だった。」

「じゃあ頑張つてね。私は神社に帰ってるわ。」

「ああ。」

正直、今召還した悪魔は、全力の紫や俺より弱いだろう。

力（魔力等）の総量だけで言えば俺達とほぼ互角。

ただ、吸血鬼の身体能力は悪魔より高い事と、

論理的に最強の能力（夜を司る程度の能力は除く）を考えれば、

この悪魔、おそらくルシファーは、俺達には勝てない。

尤も、どんな能力を所有してるかによるが.....

.....

「.....私を召還するとは.....

.....生意気な吸血鬼ね.....

.....」

.....声を聞いただけで分かった。

こいつは、強い.....

「ルシファー.....か？」

「少し違う、私の名はルシフェル。」

お前は、吸血鬼の始祖にして夜神よるのかみだな？」

夜神よるのかみなんてのは初めて聞いたが、満更でも無い。

ていつか、俺も有名になったもんだな。

「そつだ。」

「で、お前が私に何の用かしら？」

「説明が面倒だから省くが、月の人間との戦争がある。勝てなければ全ての妖と魔が消されるから、協力して欲しい。」

「……………いいわ。でも、条件はあるわよ。」

「何だ？」

「私の僕しもへになりなさい。」

「断る、と言ったら？」

「お前を消すだけ。月は私達悪魔が潰すわ。」

全く、ロリババアが……………

「そつかよ……………名前を言い忘れていたな、俺は 炎魔 白。戦るなら本気で来ないと、お前の命の保証は無い。」

「生憎、私は不死よ」

瞬間、俺は範囲重視の極太プロミネンスを撃った。

視界の右端からナイフを持ったルシフェルが突っ込んで来たが、バックステップで回避してそのまま地面へパンチで打ち落とす。

しかし殆ど堪えてはおらず、赤いレーザーを至近距離で放ってきた。予測済みだったので炎の壁を創造して防ぎ、ルシフェルが距離を取った瞬間、響転で背後に周り込み、蹴り上げ、両手に短めの炎剣を創造。

間髪入れずに高速で斬りかかり、そのまま飛び回りながら斬り続ける。

最後にもう一度大きく蹴り上げ、ルシフェルの上と左右に魔法陣を展開。

灼熱の十字架 不死らしいので手加減は抜きだ。

魔架「十字火葬」

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

「死んで無いんだろ？」

十字架の中心の所から、灼け焦げて灰色になったルシフェルが落ちてくる。

地面にまで届きそうになると形は崩れ、飛び散った灰が集まり、翡翠色の髪から漆黒の翼や尻尾まで形を成していく。

「 私を本気にさせた事、後悔するなよ？」

「なら、能力を使って見るよ」

「『魂を操る程度の能力』 私の前では、不死も不滅も意味を持たない」

ルシフェルの右手に創造されていく、漆黒の大鎌

それは本当に『魂をも』魅了するような妖しさが有る。

「『断魂映月』」

「凄まじい魔力の鎌だ……………
フフフ……………ハハハハハハハハ！！
……………良いぜ、本気で戦おう（楽
しもう）じゃねえか！！」

俺は戦闘狂ではないが、何故か楽しくて仕方が無くなってしまっ

夜斬を抜刀し、世斬を創造、白黒の長剣へと姿を変貌させた。

断空と夜力の重ね技を使わなければ、特に制限は無い。
体力の消耗が少し増えるだけだ。

「何、その剣は？」

「そつだな、『夜世永魅の剣』、とでも名付けようか」

断空で断魂映月を両断しようとしたが、斬れなかった。

恐らく、魂そのものの様な武器なんだろう。

世斬の能力で魂は斬れない。頑張らないと斬れない。

ちなみに夜斬でも頑張らないとなかなか消すことは出来ない！

普通に考えればルシフェル最強だな。

さっきのリザレクシオンでも体力の消耗は見られなかった

「魂符「魂縛の黒鎖」！！」

黒い鎖がドーム状に広がり、俺を中心に迫ってくる。

脱出する隙間も無く、簡単には斬れそうにない。

翼を巨大化し、さらに炎を全身に纏う。

夜世永魅の剣を前に突き出し、全力全開で前方に飛翔する。

「「炎魔天翔」！！」

「予測済み！！」

瞬符「月刃狩魂風迅斬」！！」

瞬速の踏み込み斬り、と言うには遅すぎるな。

鎖を突き破ってから鎌を大きめに避け、鳩尾を突き刺す。

その勢いで山から離れ、約3km程遠くへ剣を刺したまま吹き飛ばす。

大きな岩に突き刺さったのを右目で確認し、剣を霧化させて手元へ戻す。

炎で空高く打ち上げ、俺より上に行ったのを確認してから剣を変化、下四割が白く、上六割が黒い弓矢を創造した。

腕甲も創造した方が強くなるので創った。

「『夜世永魅の弓』」

「俺の神社だ。」

気を失って倒れたので、運んでこようと思ったたら紫が運んでくれた。最低限の行動は可能な程度に回復している。そもそも目的は殺すことじゃ無いしね。

紫は「最後まで頑張ってたね」とか言って去っていった。

「白……… といったかしら？」

私の負けだわ。こんなに清々しい負けは初めてよ。」

「そうかい。 神と戦った事はあるだろ？」

この少女が伝説上のルシフェルなら、ある筈だ。

それと戦う前にロリババアと言ったが、あれは悪魔でも見た目と喋り方を皮肉っただけだ。悪魔だけに。

実際は……… おおよそ14 15ぐらいか？

「ああ………

あいつらは能力が強いだけ。」

「そうか。」

「ていうか、白は私に勝ったのよ。」

なにか命令か約束、契約をしないの？」

「うーん……………じゃあ、戦争に協力する、
で良いよ。」

別に俺は悪魔王をこき使うつもりは無い。

「そんなことは言われなくてもするわ。いや、します！
だから、私に命令して下さいっ！！」

「……………」

困った…………… 実に困ったぞこれは……………

「命令して下さい」なんて頼まれるとは……………
それもただの悪魔王ならまだしも、悪魔王に、だ。

うーん…………… カオス過ぎるぞこの状
況……………

契約？ 使い魔にするとか？ 悪魔王を？

確かに顔は整ってるし、俺好みの華奢な身体だし、
身長も150ぐらいだし、髪も綺麗で長いし、胸も形が綺麗で

それなりの大きさだし、異様な形の翼もよく見れば美しい……

これらを総合的に照らし合わせた結果、かわいい。

口に出せば紫に殺されるだろう。心身共に。

「何も命令してくれないんですか……………」

「やべえ……………泣きそうだ……………」

「どうするどうするどうする？ いい案が浮かばねえ……………」

「こうなったらヤケクソだ!!」

「俺の^{メイド}使い魔になれ!!」

「分かりました、ご主人様 / (はーと)」

瞬間、口元に温かく、少し湿った感触……………もとい唇が

「え？」

「契約です。」

ああ．．．．．紫に殺される．．．．．
．．．．．
語尾にハートマーク付けるのは出来ればやめてほしい。

「それから．．．．．よしっ．．．．．と。
これを首に付けておいて下さいね。」

「何これ？」

ルシフェルが恐らく能力で創った、黒い十字架のネックレス．．．
．．．．．
十字架は別に弱点では無いが、見ていて気分が良くはならない。
だが、このネックレスを見ていると何故か安心する。

「私の魂の一部です。
それを身に着けていれば、いつでも私を呼び出せます。」

「でも、ルシフェルは大丈夫なのか？」

言いながら、ネックレスを着ける。

すると紐は一つに繋がり、外れなくなった。

「ええ。ご主人様が心配する程ではありません。
時間が経てば回復します。」

「そうなのか。」

さて、紫を呼びに行くか。」

「行きましよう。」

「そうね。どこにいるのかしらね?」

「うわあ!」

「きゃあ!」

心臓に悪い……………いきなり出てくるのは止めて欲しい。

「吸血鬼の始祖が悪魔王のご主人様……………面白いわ。」

「まさか、ずっと聞いてたのか?」

「勿論よ。別にキスぐらい良いんじゃない?」

「マジで?」

予想外だ．．．．．視線でルシフェル
に風穴が！！

「あんまりにもニヤけてたからつい．．．．．」

「えー．．．．．」

「も、申し訳御座いません！！」

「ふふ、分かればいいのよ。」

相性の問題で、ルシフェルは紫に勝てないな。

その事と、ルシフェルと俺の主従関係を踏まえた態度を紫はとって
いる。

．．．．．
ていうかルシフェルって長いな。いい呼び方は無いのか．．．．．

「ルーでいいじゃない。」

「そうだな、グツジョブ、紫。」

「了解しました、ご主人様、紫様。」

「あらあら、紫様なんてよそよそしいわ。」

「分かりました、紫さん。」

「戦う前とは完全に別人だな……………」

この夜は、平和な夜明けを迎えた

五日後の夜はどうなるのだろうか？

そんなことを考えながら、残された日々は過ぎていった

吸血鬼と悪魔王（後書き）

あのルシフェルが白の使い魔、メイドになりました。
これで月人対策はバッチリだね。

大戦の始まり（前書き）

ほーよくてんしよーです。どつせ。

大戦の始まり

蒼い夜空

映るは幾億もの星々

その中で一際大きく、最も妖しく地上を照らすのは、満月

満月の夜、全ての妖魔は自身の最高の力を発揮する

ある者は身体能力

ある者は妖力や魔力

ある者は自身の能力

また、ある者はこれら全て

そして、満月の夜は穢れた地上と穢れ無き月を結ぶ

今宵の月は、いつにも増して強く、妖しく輝いている

此が示すのはいつも通り、妖魔の宴か

それとも、妖魔の宴の終焉か

何れにせよ、夜はまだ浅い

満月の方には重戦車や戦闘機、モルスーツの大軍が見える。月人との戦い……………人妖大戦だ。ちなみに紫とは別行動である。

何でも、異常に強い霊力を幾つか感じ取ったから、最初は分散して数を減らした方がいいんだとか。

取り敢えず、月人軍の出鼻を挫く事にする。

「魔焰「プロミネンスエクспанション」！！」

「紅砲「クリムゾンベルセルク」！！」

空気が張り裂ける様な轟音と共に、二つの紅いレーザーが放たれる。俺の新技はその名の通り、温度を更に上昇させることによって元々細くしか撃てないプロミネンスを膨張させた灼熱の光線。ルーの放ったレーザーは、膨大な魔力を凝縮した紅い光線で、魂にも傷を付けられる能力の効果で、再生能力を無視出来るらしい。ちなみに単純な威力だけでも滅茶苦茶強い。

「……………一割撃破ってとこかな？」

「変なバリアで威力を落とされましたね。」

そう、問題はそこだ。

正直な話、さっきのレーザー二つを合計した威力は、俺が今まで見た砲撃の中では最高の威力だった。勿論、夜力を付加すればあれ以上の物を放つ事も容易だろう。それでも、バリア一つでここまで威力を落とされたのだ。

月人の技術力の高さは、俺の想像以上だったようだ。

「しかも落ちたのは雑魚ばかりってか……………」

急接近してきたモルスーツのビームサークルによる一撃を炎剣で受け止めたら吹き飛ばされた。糞馬鹿力が……………

「油断は禁物ですよ、ご主人様。」

「おう……………ありがとう、ルー。」

後ろに回り込んでいたルーが受け止めてくれた。

胸の感触を若干気にしつつ翼をしまい、世斬を抜刀。

距離を詰めてきた全長約100mのガダム……………
……………でさえ。

だが……………

「断空!」

両断出来ない程の大きさでは、決して無い。

鋼鉄よりも堅い装甲と八夜威程では無いが凄まじい力を持つ
モルスーツ。こういう奴には切断の方が有効だ。

頭の中から股に向かって、縦に入った一筋の線

「ご主人様!!」

横からの重い衝撃が全身に走り、視界が反転する

何回か世界が回ると地面に落ち、衝撃で血が脇腹と口から吹き出る

こちらに走ってくるルーが見えた瞬間、俺の意識は途絶えた

大戦の始まり（後書き）

初っ端から主人公ピンチです。そして短いです。

はたしてルシフェルはどっすするのか？ 白はどっすなっしてしまっのか？

使い魔として (前書き)

ほーよくてんじょーです。ごっせ。

使い魔として……………

s i d e - ルシフェル

「ご主人様!!」

ご主人様は月の巨大人型兵器を両断した。
翼をしまった、人間の状態でだ。

ここまででは、私の、ご主人様の予想通りだった。
しかし.....

月人の不意打ちで、ご主人様が吹き飛ばされた。

よく見れば、その月人は有り得ない程の霊力を持っている。
無論、ご主人様は人間状態でも、並みの妖怪より遥かに強い。
悪魔でも体は人間の域を出ていないが、それでも今まで見た
人間の霊力の中では群を抜いていたのだ。
だがこの月人は、その何倍もの、具体的には私の五割程の、
明らかに不自然な量の霊力を纏った打突でご主人様を吹き飛ばした。

既に、ご主人様に意識は無い.....

「お前.....」

だが、その月人の異常さなど、関係無い。
ご主人様がやられた、その怒りしか私は感じない。

契約したからか？

いや、そうでは無い。

ならば何故か？

.....好きになったからだ。

普段は優しく、戦いでは強く、吸血鬼で、神で、人。
よく分からない性格、その中にある強い意志。

そんなご主人様 白になら、ついていき
たいと思えた。

もう一度、ご主人様の方を見る

紅い血を流し、胸はあらゆる方向を向いている。

一瞬の油断 それは戦場では言い訳にな
らない。

つまり、ご主人様は弱い。

魂を見る事が出来る、私には分かる。

ご主人様の本質は人間だ

人間は、幾ら戦いが巧くなろうと、如何なる兵器を使おうと、妖怪の身体を手に入れようと、弱いのだ。

ならば、その弱いご主人様を護る。

これが、使い魔でありメイドである、私の役目。

倒れたご主人様を見たことで、更に激しい怒りがこみ上げてくる

それは、あの月人と私自身への怒り……………

•
•

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

「すぐに戻ります、ご主人様」

「くそ……………妖怪めがあ!!!!!!」

激昂する月人。

しかし手足には風孔が空き、黒い鎖で動きを封じられている。

「まだだ」

「……………!?!?」

「ご主人様をあんなにした罪は、こんな物では無い!!」

漆黒の大鎌、断魂映月を振り下ろす。

肋骨が落ち、右の肺が鮮血と共に飛び散る。

「……………!!!!」

声にならない月人の叫び。それと同時に、今度は鎌を横に振る。腸と腹を抉り、骨は刈り取らない。

「……………!!!!」

息は最早、虫よりも小さい。

最後、確実に命を絶つ、最後の振り
.....

.....
死映鎌 しにえいがま
.....

ルー・・・・・・・・・・・・・・・・

ああ、俺は気を失っていたのか・・・・・・・・

「戦いは？」

「ご主人様に不意打ちを仕掛けた月人だけ殺しました。
お身体は大丈夫ですか？」

「ああ。このネックレスが無ければヤバかったかもな。
ルー、ありがとう。でもごめん、こんなご主人様で
・・・・・・・・」

使い魔に助けられるようじゃ駄目だよな・・・・・・・・
・・・・・・・・

そう続けようとしたが、抱きついてきたルーに止められた。

「何を言っているんですか・・・・・・・・」

私はご主人様のメイド、使い魔なんですよ？

何時でも、何処でも、好きなだけ頼つがって下さい。

たとえ世界が敵だとしても、私はご主人様の味方ですから . . .

.
「

ルー
」

.
本当に、ルーが使い魔で良かった

照れくさいから、これは心の奥にしまっておこう

「 さあ、気を取り直して行き

う！！」

「はい！！」

夜斬を背負い、二対の翼を大きく広げる。
現地は神社の前の庭だ。 戦場まで遠くない。

俺とルーは、戦場へ再び飛び立った

使い魔として……………(後書き)

ルシフェル、白の秘密に気付くのを避けた。

悪魔と魂と不死（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

悪魔と魂と不死

再びの戦場

驚くことに、両方互角の攻め合いをしている。

右目で確認したら、神奈子や諏訪子、その配下の神達、八夜威を中心にした鬼、その他の妖怪達も地味に奮闘していた。

紫は何時も通り確認出来ないが、代わりに大量のスキマから大量の弾幕や巨大レーザーなどが発射されている。

そして、桜と有幻が対峙していたのは、不自然な量の霊力と、高圧電流が流れる刀を持った月人二人だった。

.....おかしい。

月人とは言っても、何であんな霊力を持っている？

まさか.....永琳の作った薬か？

もしそうならば、助けに行った方が良い。

最悪の敵である可能性が高いからだ。

「ルー、あそこの月人二人、見えるか？」

「はい。 !? あれは . . .

.」

ルーが話す前に、桜の能力で二人は磁石の様にぶつかり、地面に叩きつけられて血肉と骨のオブジェと化した。だが、その心臓から腕、脚、頭が完全に再生された。最悪だ

「不死 蓬萊人

.」

「そのようです。魂と軀の結び付きが明らかに強すぎますから。

私は自らの能力により不死に成りましたが、

あそこの人間は違うようですね

「.

困った 夜斬を使えば殺す事も可能だが、消費が激しすぎる。

夜の世界は数秒も展開出来ないから、不死を一瞬で殺^けしきるのも不可能。

出来たとしても体力の消費で隙が出来る為、芳しく無い。

やっぱ、ルーに頼るしか無いか

「ご主人様、良い方法があります。」

「え、どんな？」

「不死とは言っても相手は人間です。」

「ならば、魂を斬る事が出来ればそれで問題は解決します。」

「ふうん……………」

「いや、それは分かってるんだけどね……………」

「咳いていた俺は、次の瞬間、耳を疑った。」

「私が武器に変身すれば良いんです。」

「え……………」

武器に変身する？ 悪魔が？

出来る訳が無いだろうに……………

「ご主人様、私の能力を忘れたんですか？」

「『魂を操る程度の能力』だろ。」

「そうです。つまり、私自身の魂を弄れば良いんですよ。」

「そんなに応用利くのか……………」

ルーは右手を伸ばし、俺に手を握るように言った。

こう改まると小恥ずかしい……………

白く細い手が、黒い光に包まれていく……………
しばらくすると、ルーは全身が光に変わり、形を崩した。

そして光は俺の右手を中心に、細長い棒へと姿を変えていく。

棒の先の方には弧を描くような大きな黒い刃……………

何処かで見たと、漆黒の大鎌が姿を表した。

しかし刃はその時より大きく、感じられる魔力も比べ物にならない。

「『断魂映月』……………だったな？」

「そうです。ですが持つ魔力は本来の私と変わりません。」

何時の間にか左側に寄り添っていた半透明のルーが言う。そりゃそ
うだ。

この鎌自体がルーなのだから、同じ魔力で当然だろう。
よく考えると、今使える魔力はいつもの二倍だ。

「じゃ、取り敢えずあの二人は瞬殺するぞ。」

夜斬を翼と脚に纏わせ、跳躍。飛翔。
一瞬で桜、有幻のそばへ降り立った。

「桜、有幻、助けに来た。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・白・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・白さん・・・・・・・・・・」

あの人間達、おかしいです。

何回殺しても復活してきますし、恐怖の能力も殆ど効きません

・・・・・・・・・・」

「それより、その大鎌は？ ただの武器じゃ無いでしょ？」

恐怖の能力も効かないとは・・・・・・・・・・
そして有幻鋭い。幼女になってから特に鋭い。

「ルシフェル、悪魔王だ。俺のメイド、使い魔になった。能力の応用で鎌に変身してる。な？」

「はい。．．．．．宜しく、黒い妖怪と朱髪の妖怪。気軽にルーって呼んでね。」

「宜しく願いします、私は桜です。」

「わたしは 霞 有幻だ。よろしく。」

一通り自己紹介を終えた瞬間、月人の片方が飛びかかってきた。空気は読めるようだが、実力差を読めていない。空中に発生させた炎剣で四肢の健を斬る。

「じゃ、月人瞬殺する。」

「二人共、ここまで良く耐えた。あとは私とご主人様に任せて。」

ルーって味方に対しては優しいのか．．．．．
．．．
俺と紫に対してはずっと敬語だったから知らなかった。
まあ、良いことだ。

考えながら、片方の月人を両断しようとした時、ある事に気がついた。
さっき炎剣で斬った傷が再生していないのだ。何故？

「ご主人様自身の攻撃にも、私の能力は付加出来ます。
先程は私の判断で付加しましたが、ご主人様の意志で出来ますよ。」

「解説ナイスだルー。」

炎柱を落として、健が切れたままの月人に止めを刺した。
もう片方の月人に接近し、両断。 完全勝利。
同時に夜斬を解く……………

「さて、俺達は不死を先に殺しとくか。」

「そうですね。 数が少ないとも思えませんし……………」

……………
「平気で不死を殺すなんて、どれだけ強いんですか……………」

……………
「強いとかより、もう呆れたわ……………」

……………
ブツブツ言いながら、二人は別れを告げて飛んでいった。
神と鬼達の方に加勢するらしい。

桜の能力は兵器に対し相性が良く、有幻は戦いを有利にするエキス
パート。

これであつちは大丈夫だろう。

紫……………というよりスキマは、相変わらず発狂弾幕や巨大レーザーで大量の月の兵を一方的に潰している。

「不死、どっちにいるか分かる？」

「多いのはあつちですね。数は23で、内二人はかなりの実力者のようです。」

ルーは人差し指で南の方を指した。

八夜威達を基とする妖怪・神軍団が戦っているのは北の方なので、挟み撃ちにするつもりだったのだろう。

「で、強いつて大体どのくらい？」

「強い二人と私一人が戦つて互角ぐらいでしょうか……………元の姿に戻つた方が良いですか？」

「今は消費なんて気にしても仕方ないか……………よし、そうしてくれ。」

「承知しました。」

大鎌が黒い光になり、形を変えて元のルーの姿に戻った。
ちなみに手を繋いだ状態だった。

手を離れたら少し悲しそうな表情になった。分かり易い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・戦いになるまでは手繋いで
良いよ。」

「あっ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

再び手を繋いだら、ルーの顔が赤く染まった。分かり易い。

「あ、有難う御座います!!」

「どういたしまして。　じゃあ歩いていくか、あっちも近付いてる
し。」

妖力等を探るのが非常に苦手な俺でも、それぐらいは分かる。
表情を引き締めるがニヤニヤを隠しきれないルー。分か（ry

俺達二人は、蓬萊人の密集している方へ歩き出した

鬼の亡霊と人間（前書き）

ほーよくてんじょーです。どうも。

鬼の亡霊と人間

退屈だ

戦いが始まってから始めに出て来た感想だ。

相手は兵器。それも大して強くも無く、数で攻めてくるのみ。
レーザーを撃ってきたからグングニルを投げたら十機は落ちた。

神奈子と諏訪子、さっき来た桜と有幻だけで月の兵器は破壊されていく。

私が戦って来た鬼達（四天王含め全て瞬殺）は私の配下になり、
今も月人と戦っている。戦えているのだ。

ここ数年で、私は相当強くなった。白にも追い付いたかも知れない。

つまり、この程度の敵など敵では無い。

つまらない

次に私が思ったのはこれだ。

小蠅の群を叩き潰すような戦いの何が楽しいのか？

否、私が望むのは『戦い』では無く『闘い』だ。

最後に本気で闘ったのはいつだっただろう？

考えながら、巨大人型ロボットをパンチでぶっ壊す。

十年前、別れ際に白と闘った時か。

ならば私は十年以上も『闘い』をしていなかったのか……………

……………

さて……………

私の前にいる、私と互角まではいかなくとも強そうな人間。

彼は私に向かって、一対一を要求している。

男が天に手を翳した瞬間、周りにいた味方も敵も消えた。能力か？
どちらにしても、素晴らしい力だ。
そして男は此方に向き直し、口を開いた。

「鬼の頂点……『鬼神』は、お前で間違い無いな？」

鬼神になったつもりなど無いが、鬼の中で最も強いのがそんなのならば、
私が鬼神だ。

「そつだ。亡霊の雷鬼神、とても言っておこつか……」

神崎 八夜威、最強の鬼にして亡霊だ。 勇気ある人間、お前は「？」

「俺は月人、望月蓮華。」

今のは「条件を対等にする程度の能力」だ。」

「へえ．．．．．人間が持つものとは思えない程に、私好みの能力だねえ。」

でも、その能力が役に立つのは圧倒的強者だけだ！！」

雷槍「グングニル」

言い終わると同時にグングニルを投げた。

強大な雷を纏った槍は風を切り裂き、地を丸ごと抉り取りながら、一人の男の心の臓を貫く為に一直線に飛んでいく。

人間の命を貫く事など造作も無いが、これで死なれてはつまらない。
だが避けられないだろう。 嗚呼、つまらない．．．．．
．．．．．

だが、私の予想は外れた。 身を逸らして避けていたのだ。

勿論加減はしたので、妖怪最速の白なら余裕で避けられる程度だった。

しかし、それでも、今の雷槍を避けたのは賞賛に値する。

.....予想が外れて嬉しいと思ったのは初めてだ。

「今の、本気では無いな？」

しかも見破るとはね.....闘い甲斐がありそうだ。

「ああ。でも、今からは本気で来ないと死ぬよ!!」

「言われなくても、そうさせて貰う!!」

雷を纏った状態で殴り掛かる。対する蓮華は背中の大太刀に手を添えた。

居合抜きの構え.....グングニルを手元に戻して突きに移行。

そしてぶつかり合う大槍と大太刀.....

力づくで押し切るが蓮華はそれを紙一重で交わし、両断せんと振り抜く。

自らの身長程もある大太刀を自在に扱うとは……………
……………しかもこの速さ。

雷槍で受け止めて刀の腹にパンチを入れるが、吹き飛ぶだけだった。

「頑丈だねえ、その刀。今の威力なら神剣でも砕け散るのに。」

「……………この刀の『傷が付かない程度の能力』のせいだ。」

「へえ……………グングニルで試してみたいねえ。」

全てを貫く槍と傷付かない刀……………面白そうだ。

ちなみにグングニルは『あらゆる物を貫く程度の能力』を宿している。

『ありと』が最初に付いていないせいか、物質以外は貫けない。

「随分と余裕だな……………いや、楽しんでいるのか……………」

……………

「その通り、私は今、楽しくて仕方が無い!!」

「それは俺も同感だがな!!」

再び刃が交わる
雷を纏った状態の私と鏢迫り合いをする勇氣は認めるが、如何せん力が足りない。更に力を強めて吹き飛ばし、グングニルを放った。しかし背後に気配を感じ、すぐに手元にグングニルを召喚しガード。案の定、蓮華が首筋を狙って斬り掛かって来たが、雷で迎撃する。やはり交わした。私はグングニルを投げた。それは大太刀に命中し、ギチギチと重い音を立てる。
だが

「貰った、「雷神剛拳」!!」

「!!」

蓮華の腹に、渾身の一撃が命中した

いや、やっぱりグングニルを避けた近くにはある。
だがやはり、主な傷は最後の一撃による打ち傷だけだ。
しかも骨は折れていない。罅が入った程度だろう。血は吐いている
けど。

しばらくすると、蓮華は起き上がってこちらを見た。

「俺は負けたのか……………」

「ああ、でも強かったよ。こんなに楽しめたのは久し振りだ。」

「……………お前は、人間なのにこんな
力を持つ俺を、どう思う?」

どんな……………ねえ……………

人間の中で、蓮華が煙たがられていた事は予想出来る。
でも、私が蓮華に対して感じた事は一つしか無い。

「格好いい。」

人間なのに妖怪より強く、更に強い奴と闘いたくて私に挑んだ。

私は、そんな蓮華が格好いいと思うけど?」

「!!!でも、俺はお前に負けた。」

「はあ謙虚なものも格好いいねえ。」

「.」

あれ、私は何を言っているんだ?

まさか惚れたのか、人間に

種族は気にはしていないけどね。

「.八夜威、と呼んで良いか?」

「当たり前だよ。」

「俺は、月の計画なんか実はどうでもいい。それに不老だ。

だから八夜威が良ければ、俺は地上で暮らしていこうと思う。

.惚れた! 八夜威!! 結婚して

くれ!!!」

蓮華

.
これからは、永遠に、一緒に
.

「じゃあ、能力を解くぞ。早く戦いを終わらせよう。」

「そうだね じゃあ、行こう
! ! !」

「ああ! ! !」

鬼の亡霊と人間（後書き）

何故こうなったし・・・・・・・・・・・・・・・・

感想、誤・脱字指摘、駄目出しなど待ってます。

不死の月人と二人の悪魔 - 前 - (前書き)

ほーよくてんしよーです。どうも。

不死

その二文字は、それに対抗する力を持たない者にとって恐怖だ。此方が殺しても殺せず、彼方に殺されれば自分は死ぬ。

勿論、連続無限に復活する事は出来ないが、単純な力量に圧倒的な差が無ければ、勝機は薄い。

幸い、俺とルーは不死を殺せる能力を持っているが

「一人でも逃がしたらちよつと面倒だからな。」

「了解です。全員を殺せばいいんですね。」

「そーゆう事。」

「では、瞬符「月刃狩魂風迅斬」!!」

実はすぐ前にいた不死軍団の一人の首が跳んだ。

そしてすぐ、強いつぱい蓬莱人Aとモブ蓬莱人A B C E F G H Iと
の斬り合いになる。

しかし全員では無いので、強いつぱい蓬莱人Bとモブ蓬莱人J K L
M N O P Q R S Tが此方を睨んで来ている。

夜斬を抜刀、変化させて両腕両脚に纏わせ、ブレードを付加。

「精々、耐えてみる!!」

.....

右腕左脚右脚左腕の順に、流れる様に回転しながら夜力の炎の刃を放つ。

炎の刃は黒く、世斬程は無いが切れ味は至高。蓬萊人を豆腐の様に斬り裂く。

しかし、強Bは生きていた。右半身が綺麗に無くなっている。

「く……………そがぁぁ!!!!!!」

「落ちて着けて、どうどう!!!!」

黒炎を纏った右手で背中を叩いた。

結果、強Bは「俺は馬じゃなああああああい」とか叫びながら焼滅した。

結構面白い奴だったのかは知らん。

さて、と……………

「ルーフはどつかな・・・・・・・・・・・・・・・・！！？」

そこには満身創痍のルーフと、掠り傷だけの蓬萊人強Aが居た

不死の月人と二人の悪魔 - 前 - (後書き)

次話の前哨戦みたいな感じなので、いつにも増して短文です

それと絵を描いたので、みてみんなにupさせて頂きました。
幾つか描いた後に最初から書き直しました。

左から八夜威、桜、有幻、白、ルシフェル、紫と、オールスターで
すね。

蓮華は描き始めたときに登場してなかったの

みてみんで、東方炎魔録で検索すればきつと出ます。

素人の絵に嫌悪感(下痢、目眩、吐き気等)を感じない方は見て下
さい。

ついでに言つと画質悪いです。

不死の月人と二人の悪魔 - 後 - (前書き)

ほーよくてんしょーです。どうも。

ユニークアクセスが5万を超えていました。短文なのに。やったね

!!

10万を超えたら糖尿病の検査を受けようと思います。

不死の月人と二人の悪魔 - 後 -

やばい

こいつは、本当にやばい……………

霊力の大きさなどの問題ではない

もっと根本的な『何か』がやばいのだ

その月人と目が合った

背中が冷や汗で湿っているが、気にしてはいられない

.....どうするっ..

恐怖で身が思い通りに動かない

だが、最初に、満身創痍のルーを助けなければ.....

夜斬を纏ったままの脚に全力を込める.....

震える身体を魔力で抑え、倒れかけのルーに向かって跳んだ

「ご主人.....様.....」

「馬鹿！ そんな状態で喋るな！！」

膝裏と肩を持って抱え、一瞬で100メートル程距離をとる。幸いにも、此処は入り組んだ森の中だ。ゲリラ戦に持ち込んで逃げる事も出来る。

「紫つつ！！」

「ええ、分かってるわ。」

スキマの中にルーを放り込む。

紫にはまず治療をして貰いたい。それは紫も理解していた。

「私はこの子の治療をするから、それまで耐えて。」

「ああ……………」

「へえ……………速いんだね」

「！！！！」

「ねえ……………名前、何て言うの？」

「……………!？」

……………この状況で何故、そんな会話が出来る！？

だが、答えないよりは答えた方が良さだろう。

「……………炎魔 白、吸血鬼だ。『炎を操る程度の能力』を持っている。」

今まで何回言ったか分からない自己紹介。しかし、今回程に動揺していた事は無いだろう。

「あたし、望月もちづき 梗華きんか。

能力は……………これがヒントだよ

「がはっっ!!」

さっきと同じように、何時の間にか持っていた肝臓を握り潰した。それと同時に、俺の下腹部に重い激痛が走る。炎を纏っていたのですぐに再生し、梗華とか言う少女に断空を放つ。

とっさに世斬を付加したので、夜斬の効果は無いが

「もーっ、悪い子にはそのままお返しっ!!--」

「は!?!?」

俺の身体が、真っ二つに斬れた

傷口同士でくっ付いてすぐに再生したが

.

梗華の身体は、斬れていない

.

「ケケケヒヒ 残念、正解は『位置を操る
程度の能力』でしたー」

.....狂っている

何が起こったなら、ここまで狂うんだ
.....
.....!!?
.....

「じゃ、次はコレね」

紅く脈打つ、『心』に例えられる事もある物が、彼女の掌に
あつた

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

「……………!？」

「よよてんぷく夜世天覆」

大きく紅い満月……………

夜斬の、俺の最終奥義と呼ぶに相応しい、夜の世界。

自分以外は基本全行動不能（指定した人のみを行動可能にも出来る）。

俺の魔、神、霊力の全てが飛躍的に上昇する。

普段は使用に制限が掛かっている夜力も使い放題。

ただし制限時間は一分。今は夜斬本体を持っているので、これを超えなければ負担は無い。

一度使うと（使った時間×60）の間は使用出来なくなる。

夜世永魅の剣を前に構え、魔、神、夜力を込める。

確実性を増す為、一撃に全てを賭ける……………

……………

「ねえ……………白くん？動けなくて苦しいよ……………」

「……………お前、いや梗華は、自分の
している事が分かってるのか？」

さっき彼女が持っていたのは、俺の心臓だった。

再生能力が高くても俺は不死では無い。

いくらなんでも、脳も心臓も握り潰されれば本当に危ない筈だ。

それに、ルーは体力が枯渇する程、あれを繰り返された……………

「はっ
.....
はあっ
.....
」

限界だ
.....
視界が揺れる
.....

だが、一番の危機は、俺が一番信用する一撃で葬った

あとの雑兵は八夜威達が大体は倒しきっている

これで終わりか
.....

のに・・・・・・・・

梗華は無い左腕と左脇腹を右手で押さえもせず、
ポロポロの燃え屑になった左脚を引きずりながら歩いていく

方向は・・・・・・・・八夜威達の方だ！！

不死の月人と二人の悪魔 - 後 - (後書き)

ルシフェルのネックレスで白は不死になっていますが、本人は気付いていません。

それと夜力は夜そのものの力だから絶対値が変わる事は無いし無くなるような事も絶対一切無いです。そういう設定です。

梗華の梗は狂気の狂と掛けてたり
サブタイトルの後は後悔の後だったり
.

狂気の戦場　・起・（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

執筆中に三回ほどデータが飛んだので更新が遅くなってしまいました。
た。

速更短文と言う私のモットーの良い方が
．．．．．
．．．．．
．

位置

それはこの世界において、全ての原点。

例えば、ある物体の位置が不安定だったらどうなるか？

その物体は一ヶ所に留まる事はなく、存在自体が不安定になる。

あるいは、ある物体の位置が固定されたらどうなるか？

その物体は如何なる事をしても永遠に動かず、死も同然になる。

心臓の位置を、元々の身体の位置と切り離されたとする。

妖怪の身体でも当然、死に直結する事は間違いない。

彼女が遠くの物に触れる時、その物体は彼女の手元に映し出される。
これは、白とルーが彼女・・・・・・・・・・・・・・・・望月梗華
と戦った事で分かった。

そしてあの能力の危険度について、最も分かり易い証明がある。

白の『夜』の中で、ほんの僅かだが、自身の位置を右にずらした

これ程恐ろしい事は無い

「紫、しっかりして!」

「. ルー
私が震えてちゃ駄目よね
」
「. そうね、

危なかった

ルーが話せる程度に回復していなかったら恐怖に飲まれていた

「倒れたご主人様はどうするの？」

「私の家に運ぶわ。消費した力は回復させられないけど……」

二千年以上前に、消費しきった白の魔力と神力を再生させたことがあるが、

あれは回復の早い神力を利用して魔力も回復させたただけだ。

私のスキマの中には膨大な妖力が溜め込まれている場所がある。

しかし妖力は、神力程応用の幅は広くない。

こればかりは規格外と言われる私の能力でも、どうしようも無い。

何れにしても、夜力による疲労は神力でも回復させられる筈は無い。

……

家へ運ぶ為に白を背中に乗せる。

身体は、あの強さとは反対に、そこまで大きくない。身長は私と殆ど変わらないし、体重は言えないが私よりも少し重い程度。夜斬は既にスキマに入れた。

翼の重量を考えると、下手したら私よりもちよつと軽いかもしれない。

それに、翼も含めて筋肉は普通にしか付いて居ない。

・・・・・・・・・・・・・・ずつと、昔のままだ

変わったのは髪と瞳の色だけね・・・・・・・・・・・・

私達は、目の前に開いたスキマに飛び降りた

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

意識の無い白を、ルーに用意させた布団に寝かせた。
疲労は大きいが命に心配は無い。ルーのネックレスの効果もある。

そして、これから私がする事はただ一つだ
.....

「ルー、少し白のこと着てて頂戴。」

「でも……………」

ルーは暫く考え込んでいたが、口を開いた

「……………分かった。コレを持っていくと良い。」

「これは……………」

ルーの魂の一部分で創られた、黒い蝶形の指輪。

私はこれを、右手の中指に填めた。

すると、きつくは無いが抜けなくなった。この指輪は 呪われている！！

……………人間だった時のもので例えてみた。

実際は外す必要が無いし能力を使えば外せるから問題はない。

そして、ルーがこれを私に渡す事が意味するのは……………

.....

「これからは奥方様と呼ばせて頂きますわ。」

ルー.....あなたも白に気があるのに.....

「本当に、ありがとうございます。.....行
ってくるわ。」

「行ってらっしゃいませ、奥方様。」

畳に映る、自分の影に向かって後ろ向きに倒れる。

次の瞬間には、私は見慣れた戦場に居た。

そして目の前に居るのは、左半身の無い狂気の月人
.....

「お前だけは許さないわ……………」

「お姉ちゃん……………だれ……………」

……………？

あたし……………ね……………」

痛いの……………す……………」

……………」

うあう……………あ……………」

あああああ……………」

狂気に染まった悲鳴とさえ呼べぬ奇声が、戦場に響き渡った

狂気の戦場 - 起 - (後書き)

今回ルシフェルは紫に対して敬語を使っていませんでした。

理由は、白の意識が無い為、紫の立場が客人でも無かったからです。

奥方様になっただけだな!!

それと、妖魔夜行と紅楼のアレンジをニコニコ動画にアップしました。

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm14317995> (妖魔夜行)

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm14338936> (紅楼)

感想、指摘等を頂ければ幸いです。

狂気の戦場　・承・（前書き）

ほーよくてんしよーです。どうも。

全身に干渉遮断結界を張る。

最初にこれをしなければ文字通り瞬殺されるからだ。

だが、これだけでは結界の位置をずらされるから、結界と位置の境界の場所を固定した。

やはり梗華本体の移動を制限するのは不可能だった。

そして、スキマの中から一振りの刀……境楼剣を取り出した。これは二千年以上昔、まだ月人が地上に居たころ、私が妖怪になってから初めて知り合った妖怪が鍛えた名刀だ。

その妖怪は、靈魂すら斬り伏せるといふ長刀、楼観剣と、生死のどちらにも扱えない、迷いを断ち切る小刀、白楼剣、いかなる圧力の中でも錆びも壊れもしない大太刀の楼仙剣、境界の主、私にしか扱えない境界を斬る紫の刃の刀、境楼剣……この四振りの刀に己の全てを捧げ、私に三振り、ある月人に一振りを託し、

私とその月人に見守られながら死きえてんでいった。

私がついているのはこの境楼剣と楼観剣、白楼剣だ。そして月人、望月蓮華が持っているのは、楼仙剣の一振り。

彼との仲は中々良かったが、月移住計画で離ればなれになった。
しかしこの戦場で、彼の霊力は微かだが感じ取れていた。

再開の喜びと、敵同士であるという不安

しかし、そんな中で現れたのが、彼の妹だったのだ……………

そして、その妹に、大事な人を二人も傷つけられた

蓮華には申し訳ないが、私は二人の仇を討つ

純白の鞘から刀を抜く

紫色の刃はまず、獲物との距離の境界を斬る……………

「断境剣「生死流転斬」！！」

位置を操り、私の後ろから巨大な鋸刃の剣を振りかぶる梗華。計算済みなので横薙ぎをした瞬間、姿がまた消えた。

その場で境楼剣を振ると、刃の根元からスキマが開き、同時に私の周りに開いた幾百のスキマ全てから、紫色の刃が出現した。

「剣山「紫刃千閃」！！」

「うあっ！！」

更にその倍以上の刃が出現し、半径5メートルは刃で埋め尽くされた。

だが不死。右で肉片になっていた梗華はすぐに再生し、私の首元に鋸刃があった。

スキマで素通りさせる事は不可能とみて、境楼剣で受け止める。

同時に楼観剣をスキマから取り出し、境界操作で六人に分身、六発同時に境楼剣の斬撃をあて、更に同時にスキマで梗華の上に移動。

楼観剣に持ち替え妖力をつぎ込み、魂を両断する一撃を振り下ろす

……

「空観剣「六根清浄斬」！！」

「無駄だよ」

手元に握られていた筈の楼観剣は、梗華の右手にあった。
だが……………

「境符「四重結界」！！」

更にスキマで梗華の背後に回り込み、四枚重ねの結界で斬り裂く。
怯んだ隙に楼観剣を取り返し、境楼剣を左手に、楼観剣を右手に構えた。

「死剣「二重断命蝶刃斬」！！」

蝶の翅を彷彿とさせる、鮮やかな紫色の衝撃波を纏った、必殺のX字斬り。

どちらも魂を斬るには十二分の威力を有している上に、
前方10メートルは射程範囲内という、私の奥義だ。

それに加え、境界操作で、能力の使用を一瞬妨害した……………

しかし、刀を振り切った瞬間に消し飛んだのは、私の両腕だった

「斬撃の当る位置を、お姉ちゃんの両腕にずらしたよ」

「うっあああああああああああああああああ……!……!……!」

「何で……………」

「あれが幻だったからよ。」

私は、ルーと白の記憶を覗いて、戦いを観たのだ。

だから、斬撃などのダメージも跳ね返せる事も知っていたから、あのタイミングで斬撃を出せばそのまま返される事など八夜威でも分かる。

別に八夜威の頭は悪くは無いが。

そして先程放った境楼剣は『長さ』の境界を斬り、刃渡り約10メートルの超長刀へと変貌し、私の手元に戻った。言うまでもないが、重量は変化していない。楼観剣をスキマに刺し込み、超長刀を右手に構える。

「数符「境の紫刃 - 百 -」!!」

横に振るった刃が分身し、百重の鋭刃となって梗華を襲う。

背後に移動して来たが、これは360。薙ぎ払う技なので問題は無い。

しかし、やはり、当る直前で頭上に移動して来たので、さつき楼観剣を刺したスキマを上向きに開く。当然串刺しになった梗華。

私の胸に、小さな穴が空いていた

今度は幻影では無く、本当に本体に

「……………っ!」

「キキキキキキツ」

妖力を注ぎ込んで傷は癒やしたが、楼観剣は妖力も斬る。
今までの攻撃もあって、残る妖力はスキマ内の物のみ。

私の妖力を全快は出来ないし、質も私自身のそれより遙かに下回る。

「何、闘いはこれからだろ？」

「やっと再会した旧友の窮地だ、狂った家族とでも戦う」

「紫さんを死なせはしませんよ」

「白と桜の友人だからね、あたしは手を貸すよ」

「五百年も共に過ごした友人を死なせたら、土着神の頂点の名が廃るよ」

「諏訪子がこう言うから、私も本気で助けるよ」

八夜威、蓮華、桜、有幻、諏訪子、神奈子……………

気が付けば、もう兵器の轟音は止んでいる。

「あつちは、終わったのね。」

「ああ、桜の異常な一撃でね……………」

気付かなかったが、八夜威が異常と言うのなら本当に異常だったの
だろう。

前から、桜の能力が強大な事は理解していたけれど……………

「……………白とルーの仇、取るわよ！」

「……………言われなくても……………」

気味が悪い程に息が合っている理由について追及するつもりは無い。
多分、同じ戦場で一緒に戦ったから、とかいうことだろう。

「……………みんなも……………私みたい
に……………痛くなっちゃえ……………」

私達は再び、目の前の狂気との戦いを始めた。

狂気の戦場 - 承 - (後書き)

藍を描いてみました。

みてみんで「手描き 八雲藍」か「ほーよくてんしょー」で検索すれば見れます。

何故、藍を描いたかって？ 頭にもふもふが浮かんだからさっ！！

狂気の戦場　・ 転　・ (前書き)

ほーよくてんしよーです。どつま。

.....

紫一人も護れないんじゃ何の意味も無いじゃねえか。

妖怪最速とか強大な悪魔とか都合の良い肩書きばかりで、

本当にピンチの時には自分の身すら護れずに仲間が犠牲になる.....

.....

冗談じゃ無い、吸血鬼の力は何の為だ？

人や仲間を傷付ける為の物か？ 確かにそれはこの力なら出来る。

だがしかしそれは違うだろう、真逆だろう！

これは、大切な仲間を護る為の力だ.....

.....!!

「ご主人様..... いけません、まだ安静にしてください。」

「ルー、命令だ..... そこをどいてくれ.....」

俺は、みんなを護りに行く.....

まだ本調子では無いが、行かなくてはいけないのだ。

「今不調のご主人様が行かれれば、私は責任を取れません。

それに紫様達もご主人様が行かれるのを望んでません

.

何より 私は大好きなご主人

様に死んで欲しくないんです!!

どうしても行くと仰るのであれば、私は命を賭けてでも止めます

!!

. ただ一つ、命令に背くこと

をお許し下さい」

「お前の気持ちは嬉しいよ

でも今行かなくて誰かが死んだら、俺は死ぬ程後悔する!!

立ちはだかるなら、俺はルーを倒す!!!!!!」

それに加えて桜の引力の能力で、移動しても同じところに引きつけられる。

私達が引きつけられていないのを見ると、かなり制御出来ている様子。

そして八夜威と蓮華が近接で戦い神奈子は御柱、諏訪子は鉄の輪の弾幕を、

嵐の如き勢いで大量に発射して二人を援護している。

八夜威と蓮華が、梗華から距離をとった。

気が付けば、桜の傘の先端に黒い妖力が集まっていた……………

「黒砲「惑星破壊光線」!!!!」

惑星破壊という言葉も満更嘘では無い程の、圧倒的な黒光線。

桜の妖力は私達の中で一番大きいし、見る限り能力も付加されている。

異常な一撃と言うのはあれの事だろう。背筋が凍った……………

桜はあれを斜め上に撃っていたから、地球は無事だった。

「「雷帝激昂天地滅壊」!!」

「「断永染無の大太刀」!!」

八夜威のグングニルの雨に巨大な雷が加わった弾幕が止むのと同時に、

1キロメートルはありそうな霊力の刀身が振り下ろされた。

既に荒廃し穴だらけになった地が、真つ二つに割れる……………

……………

「風神様の神徳」！！」

「崇符「ミシヤグジさま」！！」

大量の札弾幕と、緑色の大量……………と言つより避ける隙間の無い弾幕。

梗華の体力も流石に尽き掛けかと思つたが、気付けば私の背後に居た。

予測していなかつたから動揺したが、すぐに右手の楼観剣を振り抜く。

「妖鬼「未来永劫斬」！！」

初撃は妖力をこめられなかつた為、有効打にはならなかつた……………

……………

でもこれは、打ち上げた後に斬撃を加える技だ

……………が、打ち上げた筈の梗華は既に居な

い……………

「油断したね」

「くっ・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

後ろからの横薙ぎに反応が間に合わず、脇腹を斬られた。傷は深くは無いが、鋸刃は私を『斬る』のでは無く『削った』。白いドレスが紅い血で染まるのと同時に梗華は吹き飛ぶ。神奈子の御柱が飛んできて吹き飛ばしたのだ。

「神奈子、ありがとう」

「本調子じゃ無いんだろ？ 危なかったら幾らでも助けるよッ！！」

良いながら神奈子は、再び突っ込んで来た梗華を地面に叩きつけた。次の瞬間に梗華はおらず、少し遠くでは轟音が鳴り響く・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・. 庄されてるわね」

「やっぱり、紫もそう思うか・・・・・・・・・・」

あの能力に対抗できる能力が、紫と白ぐらいしか持って無いから

ね。

生憎、私の神力は回復には使えないんだよ。
出来れば紫を回復させてやりたいんだけど

「.....」

「その気持ちだけで充分よ、ありがとう」

.....とは言ってもどうするか

このままではあの能力に対抗できず、負ける。

全員に干渉遮断結界を張ってはいるが

やはり、白が居ないと駄目なのか

？

いや、いつも無茶ばかりする白の事だ。

「危険だ、俺が夜斬で倒す」とか言うだろう。

私は、本調子じゃ無い白が戦う事が、一番怖い……………

でも、このままでは負ける……………

「っ!?!?」

神奈子の神力が、極端に弱まった

そして次に桜の妖力、諏訪子の神力も……………

．．．．．まさか、結界の位置をずらし
たのか？

．．．．．こう考えているうちにも、蓮華の霊力と八夜威の妖力が殆ど消える．

．．．．．そして一番冷静に立ち回っていた有幻の妖力までも．．．．．

気が付けば、私の目の前に、
返り血で紅く染まった梗華が立っていた

「お姉ちゃんです……オワリ……」
「……？」

「違う、終わるのはお前だ」

どこか哀愁を感じさせる声……

同時に、夜より更に暗い、紅い満月の『夜』が天を覆った

終焉
「下」H・ジ

狂気の戦場 - 転 - (後書き)

技名に関しては生暖かい目でスルーして下さい。

感想、誤脱字指摘、駄目出しなど歓迎しております。

狂気の戦場 ・ 結 ・ (前書き)

ほーよくてんしよーです。どうも。

狂気の戦場 - 結 -

巨大な漆黒の十字架が顕現したのと同時に、『夜』は消えた

空に広がっているのは、いつも通りの夜だ。
ただ、光を弱めた満月が、月人の敗北を暗示している

黒く染まっていた白の髪が、元の純白へと戻っていく……………

完全に色が戻るのとはほぼ同時に、白がその場に崩れ落ちた

「白っ!」

白から感じられる魔力は、もとの半分程度まで減っている。
無くなったと言うより封じ込められたような感じだ……………

梗華は、結論から言うと死んでいない。

ただ、霊力は約八割も減っていて、もう瞬間移動程度しか出来ない
だろう。

そして、内に孕んでいた狂気は消えている……………

.....

「.....奥方様.....」
「.....」

「！！ル.....」

.....
満身創痍という程では無いが、凄まじい量の傷が付いている.....

「ご主人様を止めようとしたら.....無理
でした.....」

「良いわよそんな事は。あの白は私でも止められないわ。
それより.....まず全員、神社まで運ぶわ

「よ。」

「了解しました。」

「……………やっぱりこれは返しておくわ。」

黒い蝶の指輪を外し、ルーに渡す

「……………何故です？」

「やっぱり、あなたとは対等な友人でいたいのよ。駄目かしら？」

「……………いや、改めてよろしく、紫。」

「ふふふ……………こちらこそ。」

「今起きた、駄目じゃ無い。」

「. 久し振りだな、紫。」

「あなたは私達を殺すの なんて、馬鹿な質問はしないわ。」

「そうだな。それより八夜威達は？」

「. 梗華も」

「全員ここに運んだわよ。梗華の左半身も治したわ。」

「ここは山の麓にある、白を祀る神社よ。」

「もう戦いは終わったわ 白の一撃で」

「ハク って誰だ？」

「そう言えば八夜威が話してたが、炎を操りあらゆるものを斬り夜を司る、」

「吸血鬼で人間で神っていう複雑な奴が友人にいるらしい。」

「桜と有幻、神奈子と諏訪子とは戦場で既に仲良くなったが、そのハクって奴とはまだ会っていない。」

「強さを聞く限り、筋骨隆々なオッサンのイメージしか無い。」

「今、変なオッサン想像したでしょ？」

「心読むなよ でも実際どうなんだ？」

「見てみれば良いじゃない、横で寝てるわよ。」

「え!?!? え?」

隣で誰かが寝ているのは分かっていたが、まさかハクだったとは
そしてその身体の小ささに、目を疑った。

「こいつが ハク
.?」

「『ハク』じゃなくて『白』よ。カタカナじゃ無いわ。」

「身長、紫よりある?」

「ちよつとはね。」

見た目は人間基準で十七ぐらいで、病的では無いレベルで痩せている。

髪は純白で肌も白いが、服装は中のTシャツ以外、全て黒。
遠目で見ると白黒の塊に見えるだろう。

身長は、紫より少し高いと考えて165cm前後か。

「女々しいとか言つと燃やされるから気を付けてね。」

「気を付けるよ。　ていうか何故霊力があるんだ？」

「そういう状態なのよ。　翼を広げれば魔力と神力を使うわ。」

「本当に無茶苦茶な奴だな　・・・・・・・・・・・・・・・・」

「紫ー！　八夜威と有幻は起きたよー。」

うん？　聞いたことのない声だが　・・・・・・・・・・・・・・・・

「こつちも一人起きたわ。　望月蓮華よ。」

紫の声と同時に、翡翠色の髪に白い洋服と赤いスカートを着た、
背中に黒い異形の翼を持ち、細長く黒い、先端がスペード状の尻尾
を、

黒いニーハイを履いた、白く細長い両脚のうち左に巻き付けている、
見た目年齢十四五の少女が隣の部屋の襖を開けて出てきた。

ていうか神社広いな　・・・・・・・・・・・・・・・・

「初めまして、か？　月人の望月蓮華だ。」

「初めましてだね。　私は白様のメイドにして使い魔、
そして某悪魔王こと、ルシフェル。

気軽にルーって呼んでくれて構わないよ。」

「勝てる気がしねえ……………」

悪魔王が使い魔だと？ どんだけ強いんだ白！？
紫や八夜威よりも強いんじゃないのか？

「白は吸血鬼、吸血鬼は強大な悪魔の上位版だからね。
尤も、ルーに勝てる吸血鬼なんてこの世に一人しか居ないけれど。」

「白様は全ての吸血鬼の中でも最強の、始祖だからね。
でも反則の能力は身体に掛かる負担が大きすぎるから、
ずっと全力で戦い続けるのは、今の所は不可能らしいよ。」

「それでも普段からお前等並みに強いんだろ？」

「「当たり前。」」

本格的に、勝てないだろこれ。

……………そして、この部屋にはもう一
人、

まだ目を覚ましていない奴がいる……………

「……………梗華は、どうするんだ？」

「もう私たちの脅威じゃ無いわ。

でも、どうするか決めるのはみんなよ。」

気が付けば、白と梗華以外の全員が、この部屋に集まっていた。
流石だ、全員がもう殆どの力を回復している。

「蓮華あああ！！ 無事で良かったあああー！！」

「オーバー過ぎだ。

……………まあ、八夜威も無事で良かった。」

「白ももうすぐで目覚めると思っわ。」

「……………良かったー……………」

「そして梗華も、ね……………」

s a i d - 白

「うっ うっは？」

俺はまた倒れたらしい。

だが今度は確実に、梗華に一撃を浴びせてからだ。

. 俺のあの一撃は、『命』を破壊したのでは無い。
梗華の孕んでいた『狂気』のみを飲み込み、消滅させたのだ

.....

『夜を司る程度の能力』の根本は、消滅だ。

あらゆる物質・力・感情をも飲み込み、跡形もなく破壊する。

応用幅は広く、夜世天覆使用時は相手の動きすら封じ込め、

威力は下がるものの、武器に夜力を纏わせれば消滅能力を付加出来る。

終焉「ジ・エンド」は、尋常では無い肉体への負荷を伴う代わりに、この能力の全ての力を引き出す事の出来る奥義だ。指定したもののみを、完全に消滅させる。

その気になれば、地球だろうと悉く消滅させられるだろう.....

危険物につき、取扱い注意である。

「わーい、起きた！」

そして、俺を起こしたのは、狂気の完全に消えた梗華だ。
靈力まで減少してしまっているが致し方有るまい

「梗華……………ここは？」

「分かんない、あたしも起きたばかりだよ。」

「……………神社よ。白、あなたはその子を
許すのかしら？」

「紫……………」

その場にいた全員が俺を見てくる。
まあ、答えはとっくに決めてるけどね……………

「『狂気』は消えた。もう、そこそ強いだけの一人の子供だ。」

「……………私は、ご主人様と同じ考えです。」

「私も良いと思うよ。」

「八夜威さんに同じです。」

「わたしは更に桜に同じく。」

「神は全てを受け入れる!!」

「神奈子と諏訪子はもういいわ。」

「あたしもいいよ!!」

「梗華、意味分かってる？」

「分からないーっ」

「はあ……………蓮華、だっけか。」

「良いよな?」

「ああ。梗華の精神が戻ったからな。」

「……………弟として言わせて貰う、ありがとう。」

「は?弟……………!」

「え? いや双子だけど……………」

「蓮華、私も初めて聞いたわよ?」

「いや、言つきっかけも無かったしな。」

「あれ？ 蓮華と紫って知り合い？」

「ええ。」

「ああ。」

「じゃ、私達はこれで。」

「神社も結構忙しいからね……………」

「神奈子、諏訪子、じゃあな。」

「今度神社行くからー」

「私はお酒持つてくわー」

「ていうか梗華より蓮華の方が上じゃん。見た目とか見た目とか……………」

「むー…………… 蓮華がおっきいのがわるい!!」

「月人の外見は精神で決まる。梗華の精神が幼女なんだろ。」

「そうなのか……………」

「白さん……………うう……………」

「白、逃げ……………ろ……………」

「

「桜、有幻!? 一体何が ?」

「ふはははははははあー!!」

白うー 蓮華あー

「.

「おい何で酔っ払ってんだ?」

「うおっ 落ち着け八夜威!!」

「私は外に出てるわ」

「紫ーーーっ!! うわあああああっ!!!!!!」

「えーっと アルコール90パーセント?」

「梗華あ お前もだああああっ!!

「!」

「ひゃああああああ!」

無事だったルーと紫は、外で静かに呑んでいたそうなの

狂気の戦場 - 結 - (後書き)

蓮華の見た目は18ぐらい。梗華の見た目は8ぐらい。

作者はロリコンでは無い……のだろうか？

さて、そろそろお待ちかねの原作キャラ5人目が登場するよ!!

え？ 待ってねーよsnks？

ははっ、御冗談うおあああ!!

番外編 刀の妖怪（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

今回は紫達の過去の話です。

番外編 刀の妖怪

妖怪になってから目が覚めた時、私は布団の中だった。

意識が少しずつ覚醒し、ここが古い家の中だと認識した。

私は境界の妖怪で、人間では無い。

漠然としているし信じられない事だが、
私の本能 心が、それを理解し受け入
れていた。

記憶は、元々は人間だったという程度しか残っていないが、
意識は今までの自分そのもの。

文句を言っても仕方ないから、これからどうするか考える。
先ずは、ここが誰の家かを確認しないとイケない。

恐らく倒れていた私をここまで運んでくれたのだろっし、
ここの主にお礼を言うのと、ここがどこなのかを教えて貰おう。

布団から這い出て立ち上がり、部屋のドアを開ける

するとそこには刀を打つ、着物姿の少女が居た。

髪は桃色で長さは膝元まであり、
前髪は目が隠れない程度まで伸びたおかつぱ。
着物は紺で統一されていて、所々に銀色の刺繍が入っている。
瞳の色は黒く、身長は150cm前後。

そして彼女は、起きてきた私を見るなりこう言った。

「本当に、戦わないと駄目なの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあ武器は貸すわ。」

「つと!!・・・・・・・・・・・・・・・・・・抜き身の刀投げないでよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そつちから来なさい」

彼女は、腰に差してあった刀を抜いた。

私に投げってきた刀と同じ物だ。刀にある力も・・・・・・・・・・・・・・・・

ちなみに、家からは出ている

「刀に有る力、見抜いたわね？」

それは妖力と言って、妖怪が主に使う力よ。」

「妖力・・・・・・・・・・・・・・・・・・つまりこれは妖刀？」

「そういう事。」

しかしいきなり戦えと言われても、

私は生まれてこの方、喧嘩もした事が無い。

それに刀の妖怪であろう彼女相手に刀で戦っても、

勝ち目が万が一にも無い事は分かっている。

．．．．．妖力を使った戦い方か？

幸いにも、私の妖力はほんの僅かだが彼女より大きい。

馬鹿みたいに正直に刀だけで戦うよりはマシだろう。

あとは、使った事は勿論無いが、能力だ．．．．．

取り敢えず妖力を刀に込めて、彼女に向けて振った

「その発想は無かったけど、まだまだ荒いわ。」

妖力の弾を飛ばしたが刀で斬られる。　　が．．．．．

「これだけな訳、無いじゃない!!」

「っ!!」

さっきの妖力弾を盾にして近づき、妖力を込めた刀で斬りかかる。
しかし弾かれたので、左手から妖力弾を発射する
.

「能力を使わないと、私には勝てないわよ。」

「あれが効かないの?」

全ての妖力弾を斬り払った無傷の彼女が、そう言った。
そんな事言われても、この能力を上手く使える自信は無い。

『境界を操る程度の能力』
妖怪である私の中にあつた私特有の能力。

.境界とは、全ての物事を分け隔てる
線のようなもので、
それを操る事は論理的に全てを創造し、破壊すると言つ事である

妖怪になって、私の頭に刷り込まれた様にあつた言葉。
言葉通り文字通りの意味ならば、チートという代物だ。
試しに、刀を振りながら距離の境界を弄った。

「はっ!!--!」

「!？」

ギイーン、という重い金属音が鳴り響いた。

確実に勝ったと思ったが、受け止められたのだ

.....

左右の境界を弄り、左から薙ぎ払う。

目視で受け止めようとした彼女だったが、実際は右からの攻撃。

右腕に刃が届く瞬間に彼女は異変に気付き、大きく後ろに下がった。

私の妖力は尽き掛けて来ているが、あとどれだけ戦えるか

.....

「今回はここまでよ。初めてにしては上出来ね。」

「え、終わり？」

「あなたの力量は大体計れたから。」

「.....ふう.....」

.....

一気に全身の力が抜ける.....

「私の家に戻るわよ。」

「．．．．．そう言えば、名前は？」

「楼塚 伐刃。」

「伐刃ね、分かったわ。」

「．．．．．あなたは？」

「．．．．．私の記憶の中に、名前は無い。」

空を見ると、大量の雲が日の光を遮っていた。

大量の雲．．．．．八が確か大量って意味だったから八雲．

．．．．．

着ていたドレスが白と紫色．．．．．

紫．．．．．むらさき．．．．．

紫って確か、ゆかりって言うふうにも読めるからこれで。

「八雲 紫よ。」

.....

能力はかなり使い慣れてきて、実戦でも十分使えるようになった。

伐刃の能力は『あらゆる刀を扱う程度の能力』で、刀を造る事から剣術を使用する事まで可能らしい。

だが、あくまでも、本質は刀鍛冶らしい。

私から言わせれば剣術も異常だが、どちらかと言うと苦手なんだとか。

今日もいつものように、伐刃と剣の訓練をしていた。

結果は私の負け。私は能力に頼っているが、伐刃は剣術のみだった。

そして訓練が終わった時、ある人間が話しかけてきた

「俺と、戦ってくれないか？」

伐刃と顔を見合わせ、同時に溜め息を吐いた。

いくら殺し合いでは無くても妖怪と戦いたいなんて酔狂な話だ。
霊力は確かに大きいが、種族として身体能力の差がある。

．．．．．最近、ここが元の世界では無いんじ
やないかと思う。

．．．．．妖怪が普通にいて人間の服装の時代感が一人一人バラバラで．．．

今気にしても仕方無いか。

「伐刃、どうする？」

「良いわよ。私がやるわ。．．．．．これ使いなさい」

「感謝する。俺からいかせて貰うぞ！！」

「人間なのに強気ね．．．．．」

「私に剣術で勝つなんて、人間では無理よ。」

こうして伐刃と戦ったのだが、これが強かった。

霊力で身体能力を強化して妖怪に対抗出来るようにし、

刀の妖怪である伐刃を相手に、ジリ貧にでも斬り合ったのだ。

最後は伐刃の巻き技（相手の刀を落とす技）で終わったが。

彼の名は、望月 蓮華。

力が強すぎた為に煙たがられ、強い妖怪と戦うようになったらしい。負けたのは今回が初めてで、もっと強くなる為に

「頼む！俺もここに住ませてくれ！！」

とか言いながら私達に土下座している。

そしてボロ雑巾を見るような目で蓮華を睨む伐刃。

流石に可哀想なので、フォローを入れる。

「住む空間とかは私がどうにでも出来るから、良いんじゃない？」

「ふん……………分かったわ。」

「ありがとう！！」

伐刃は基本、無愛想なのだ。

だから面倒な事などがあると、心から厭そつな表情をする。でも、本当に興味も無ければ厭そつな表情すらも見せない。

「じゃあよろしくね、蓮華。」

「鍛冶の邪魔はしないように。」

「分かった。よろしく、伐刃、紫。」

伐刃の家に三人で住み始めてから10年

この時、私と蓮華は、伐刃に衝撃の言葉を告げられる

「私はこれから、四本の刀の作成に自分の全てを捧ぐわ。
多分、四本全てを造り終えるまでに5年間は掛かるから、
悪いけどそれまで一人にして

「自分の全てってお前」

「あなたまさか?」

「造り終えたら、その刀は二人に託すわ。
.出て行きなさい。」

「.分かった。」

「妖怪として、止めはしないわ」

「

私と蓮華は、二人で放浪を始めた

『全てを捧ぐ』と言うことは、妖力も体力も使い果たすという事だ。
普通の価値観なら、気違いの様にも見えるであろう選択。
しかし彼女は刀の妖怪。妖怪は本能に素直なものなのだ。
だから、自分の命の全てを刀に捧げ、死ぬことを選んだ。

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

「 久し振り、 伐刃
お前
」

「
お前
」

蓮華と五年間の放浪を終え、帰ってきた伐刃の家。
そこには四振りの刀と、妖力も枯渇し切った伐刃が居た。

「．．．．．その大太刀が楼仙剣．．．．．
．．．壊れる事の無い刀．．．．．
この一振りを．．．．．蓮華に託すわ．．．
．．．．．」

「．．．．．ああ、分かった。」

「．．．．．日本刀が、境界を斬る境楼剣．．．．．
．．．．．
長刀が楼観剣よ．．．．．二つを紫に託すわ．．．
．．．．．」

「ええ．．．．．あなたの刀は永遠に受け継ぐ
わ。」

「そして．．．．．この小刀が、迷いを斬る白楼剣。
生と死を併せ持つ者が私にしか扱えない刀だけど．．．
．．．．．
．．．．．そんな誰かが現れる時までは．．．
紫が持つていて．．．．．」

「．．．．．確かに、約束したわ。」

「伐刃．．．．．もう本当に．．．．．
．．．?」

蓮華の言つとおり、こうして話している間にも、伐刃の存在は……

もう、消えてしまってもおかしくない……

「……二人と会うまで、私はずっと一人
だった……誰の為でも無く、刀を打ち続けてい
たの……最後に一人に……」

最後に伐刃は、消えそうな声で、確かにこう言った

『しんがが』

「月へ移住することになった。

もしかしたらもう永遠に会えないかもしれないけど……………

……………

紫と伐刃と過ごした時間は、永遠に忘れない。

……………今までありがとう、紫。」

「月なんて私からしたら目と鼻の先よ。

……………でも、私が月に行けば騒ぎになるから無理ね。

お互いに寿命も無くなるし、またいつか会いましょう。」

「蓮華格好いいよ蓮華あ」

「妖怪の本能か……………」

「蓮華ーあたし初めて聞いたんだけどー」

「姉さんが聞こうとしなかったんだろ。」

「むー……………」

「ご主人様とどっちが剣術巧いのかな？」

「確かに。白も巧いよ。」

「白さんはそれ以前に身体能力が高すぎますから……………」

「生きてたら伐刃。あれは勝てない。」

「蓮華と戦ってみたら？」

「純粹に剣術なら、伐刃の次に出来るぞ。」

「じゃあ明日にでも頼む。」

神社は今日も平和です

番外編 刀の妖怪（後書き）

感想、批判、誤脱字指摘などよろしくお願いします。

そして紀元は訪れる(前書き)

ほーよくてんしよーです。どつせ。

そして紀元は訪れる

「断空 - 塵 - !!」

「仙符「ウォールブレイド」!!」

世斬を地面に突き立て切断能力で前方をズタズタにする技だが、切断出来ない楼仙剣が蓮華の霊力で巨大化し、防いだ。
今ので霊力を使い切ったので、翼を広げて降参の意思を伝えた。

「やっぱり人間状態では勝てんか……………」

「何万年か前よりはマシだけどな。」

「うんにゃ、蓮華が強いだだけだ。」

「白、蓮華、そろそろよ。」

「ご主人様は楽しみにしてましたよね。」

「ああ、そうだな。」

そう、あの戦争から約十万年が経った今、紀元が始まるうとしてい
る。

月人が地球を去った時から存在していた人間は滅びた。

紫曰く「月人の成り損ない」だったらしく、俺達の良く知る人間は、
約一万年前の氷河期が終わってから見かけ始めた。

紫曰く「衣服を身につけ始めた」だけで、既に進化はしていたらし
い。

丁度そのくらいから集落を見かけるようになったな……………

そして神奈子と諏訪子は信仰を失った為に、自分の神社に籠ってい
た。
しかし再び人類が現れたので少しずつ回復している。

因みに俺、紫、ルー、八夜威、桜、有幻、蓮華、梗華は、
戦争が終わってから殆ど力（妖力魔力神力霊力）は変わっていない。
あれ以上強くなっても使いどころが無いので別に良いが。

「でもさー、きげんが始まるって言っても特に何も無いよね？」

「確かに。」

梗華は口リで阿呆なのに、たまに的確なツッコミを入れて来る。実際、本当に何も無いのだ。

話しながら、本殿に入って座る

「八夜威と蓮華の子供が産まれるわ。」

「遂に産まれるのか、私と蓮華の子が……………」

信じられるか？ 見た目15も無い奴が妊娠してるんだぜ？
まあ妖怪では良くあることだがね。

「おめでとう、二人とも。」

「ありがとう、ルー！」

……………八夜威の子供だ、可愛いだろうなあ……………
……………」

「バカップルだ……………」

確かに二人で居る時はいつもデレデレである。

「ゆーちゃん、それはあの二人も……」

「あー……………ルーもそう思う？」

「うん。もう当たり前でしょ。」

「白、二人って誰と誰だかわかる？」

「え？……………誰と誰だろうな？」

「二人だよ（ですよ）！！」

「否定は断固としてしない！！」

三人の「末期だこいつらもう間に合わない」みたいな目線をスル
し、

紫が真剣な表情でこちらを見て、口を動かした。

「私達も、つくっちゃおう？」

「え、良いけど……………」

「良いんじゃないですか？」

「ご主人様と紫の子供なら良いと思いますよ？」

「二人が良いなら作れば？」

「愛し合ってるってこの前言ってたよ!!！」

梗華は空気読め……………いや、読んであの
台詞を言ったのか？

それは兎も角、俺からしたら今まで妊娠しなかった方が（ry

「あら、いつでもしようと思えば出来たのよ？」

「心を読むのは頂けないね。」

ふざけている紫が可愛いと思っている事は言わない。

「もう……………言ってくればいいのに……………」

しかし、言っても言わなくても同じだ。

ていうかイチャイチャしてる蓮華と八夜威が、見ていて気分が悪い。

「うわああああ!!!!!!」

思った瞬間に、二人は突如出現したスキマに落ちていった。

「紫、八夜威は妊娠中だからね？」

「ちやんと考えて落としたから大丈夫よ。」

「うわぁ……………」

「流石に酷すぎるよ？」

「紫、情けは掛けなよ……………」

「蓮華ー、死ぬなー。」

スキマを覗いた四人の感想に、思わず苦笑いしてしまった。ルーと有幻の間からスキマを覗き込み、苦笑いを強める。

「紫……………流石にあれは酷いぞ？」

「手加減したわ。八夜威は無事だしね？」

「まあ確かに……………」

スキマの中は妖虫の巣窟だった。八夜威は結界の中だが、

いきなり落とされた蓮華は毒や粘液塗れだ。
不老不死だから死にはしないがね。

「取り敢えず子作りは保留でいいかしら？」

「そうだな、欲しいと思った時で良いな。」

他愛も無い会話をいつも通りに交わしながら、紀元を迎えた

ちなみにこの後蓮華が紫に喧嘩をふっ掛けたが、
善戦後某チート能力の不意打ちの前に呆気無く敗れた。

そして紀元は訪れる(後書き)

十万年とびました。紀元前一万年というのは嘘っぱちです)笑

漫食する闇と炎（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

漫食する闇と炎

かくかくしかじかで、一人になりました。

紫たちも、これから成長するであろう人間や妖怪達、これらの力がバランスを崩したりしない様に注意しながら、それぞれ思いついた事をやっていく方針らしいです。

紫はスキマ、ルーは召喚でいつでも会えるのですが、わたくしは幻想郷が出来るまで彼女たちに会わないつもりであります。

そしてわたくしはやる事が見つけれずにいる上、何故だか知りませんがとある妖怪と対峙してしまいました。

かの有名な二次キャラクター、その名もEXルーミアであります。ルーミアの能力は『闇を操る程度の能力』という恐ろしい代物ですが、

一面ボスである為か、その力は矮小な物というこけおどしなのです。しかしEXルーミアは『闇を操る』という言葉が二次設定で暴走し、御覧の様に邪悪で強力に出来あがってしまった姿なのです。

「あなた、美味しそうね。」

「まだ百年も生きていない娘さんに分かる味ではありませんせぬぞ?」

「人間のあなたよりはマシじゃないかしら?」

「おやおや……………」

そんな滑稽千万で無様で無意味な挑発にのって差し上げる程、
わたくしは紳士的ではありませんせぬ。

ですが貴女が空腹なのは可哀相です。ではこれで。」

「巫山戯るのもいい加減にしなさい」

「礼儀がなっておりますせぬぞ、闇の小娘が」

いきなり剣で腹を刺しに来たので、世斬で受け流した。
人が紳士的に対応してるんだから止めて欲しい。
炎を放射し、追っ払う。

「あのさ、戦いしか頭に無いの？」

「残念、私が欲しいのはあなたの血肉よ!!」

ルーミアが右手に持っている闇の剣を回すと、大量の剣が現れた。そして間髪いれずに放って来るが、すべて炎で撃ち落とす。

周りの闇と同化して背後から剣を振りかぶってきたのを、炎を纏った世斬で受け止める。

切断したがやはり闇。すぐに元通りになった。

「なによ……………強いじゃない……………」

「だろ？　あまり人を挑発しない方がいいだろ？」

「まさか」

闇が俺を包もうとしたので跳んで躲かし、プロミネンスを撃つ。またもや後ろに周り込んでいたルーミアをパンチで吹き飛ばすが、その左手が闇に浸食され、ボロボロになった。

どうってことも無く、霊力による治療だけで元通りになったが、ルーミアの持つ妖力が大きくなった。

「『闇を操る程度の能力』は、あらゆるものを浸食し、
浸食したものの力を吸収する能力よ。

無論、それだけじゃ無いけどね。」

「わざわざ説明ありがとさん。

お礼と言っちゃ何だが、俺も教えといてやるよ。

俺は大炎の神魔こと、炎魔白だ。」

同時に、黒白翼を広げる。

「!!!人間にしては強すぎると思った
わ。」

「まだやるのかい?」

「当たり前じゃない!!!」

瞬間、ルーミアから俺の3/4程度の妖力が湧き出た。
今までののは本気の1/5つてところか？

「闇はどこにでもあるのよ。」

例えば……………あなたの後ろとかにもね」

「そして全てを喰らう、とでも言うつもりか？」

闇に包まれたが、圧倒的な炎で振り払う。

「あなたが闇を被おうと、無駄なことよ。」

この世界には、闇は無限にあるわ。」

「それは中途半端な力を持った者の思い上がりだ。」

言いながら、更に規模を広げた闇を、炎で相殺していく。

「いくら力があるうと、全ての源はじまりである闇には勝てない。
たとえそれが最上の神だとしてもね。」

「全ての始まり……………ねえ……………」

「..

ついにはルーミア自身が、禍々しい闇と化した。
触れた地面も空気も、闇の中へと消えていく……………

「そしてあなたも、闇から産まれて闇へと滅びる。

『闇』の中なら苦しみも哀しみも、感じないわ。

……………私と共に、闇へと帰りましょう」

「残念だが、俺はまだ死ねない」

「予想外か？」

「ふ．．．．．実力差がすこし埋まったただけだ」

「分かって無いなあ、闇は夜の下位なんだよ。」

「だから、闇のお前が、夜を司る俺に勝つことは出来ない。」

「世迷い言を．．．．．」

「なら自分で確かめれば良い」

ルーミアが襲い来るが、夜斬で斬りつける。

しかしダミーだったらしく、後ろからの闇を避けた。

拡散している物を斬るのは骨が折れるので夜斬を変化、

漆黒の弓から黒炎の矢を大量に放つ。

「つく．．．．．ぐうつ．．．．．」

「まだ戦えるのかよ．．．．．」

埒が明かないので、この十万年で編み出した新技を使う。

まずは、夜斬をビー玉サイズに圧縮する。

そこに全力の炎を練り込み、黒い炎の丸薬を作った。

そしてこの丸薬を、一気に飲み込む．．．．．

「「夜炎神魔」やえんしんま」

「なによ、それ」

説明しよう！

「夜炎神魔」とは、全ての力を注ぎ込んだ丸薬を飲み込む事で、身体自体が魔力・夜力による炎へと変貌する技である。身体能力は炎と夜斬を全身に纏った時と同じで、常に夜力を使用する事が可能で燃費も良好。身体の炎の温度は0〜10000まで調節可能。更には、炎故に物理攻撃が効かないというステキ具合。神力は何故か練り込めないが、魔力の補給はできる。

因みに丸薬は約100000。熱が極々至近距離にしか漏れないように封じているが、うっかり封じ損ねたら地球が危ない。

つまりは優れた封印能力が無ければ出来ないのだ。

これは約二万年前に分かった、俺の左目の能力である。

『あらゆるものを封印する程度の能力』と呼んではいるが、実際、この能力に名前は無い。

それに封印するには封印先の器、入れ物が無いと出来ない。これの場合は一時的に夜斬を器にし、炎を封印してから、飲み込んだ後に封印を解く事でこの状態になっている。

「闇の妖怪、終わらせるぞ」

「くっ」

神魔天翔

これを器にすることにした。そして割とあっさりと封印が完了すると、

上着の布が赤く染まっていたが細かい事は気にしない事にした。そして原作同様、幼女と化したルーミアの髪に結び付けた。こういうのは常に身につけていないと意味が無い。

ルーミア自身の妖力で、ルーミアの能力を抑制する効果もあるからだ。

無論、紫クラスの実力者でも容意には外せない様に強固に封印してある。

「んっ……………むうっ……………あれ、私は……………?」

「起きたか」

「……………ありがとう、封印してくれて。」

「? 炎魔王だ。白って呼んでくれ。」

「うん……………私はルーミア、闇の妖怪よ。」

口調まで幼女になっていて、なんか力が抜けた。

「じゃあ、私はこれで。またいつか会おうねー」

「ああ、じゃあなルーミア。」

何とも言えない脱力感を感じながら、手を振った

浸食する闇と炎（後書き）

EXルーミアです。そーなのかー

あの丸薬は投げつけても普通に強いです。
弾幕にしては燃費と威力が高すぎますがね。

感想など気軽にどうぞー。

山と一人の天狗（前書き）

ほーよくてんしよーです。どうも。

最近、持久力と柔軟性が暴落しています。

山と一人の天狗

取り敢えず切れた上着を神力で直し、
実は神社の近くに居たので隣の山にでも行ってみる。
翼をしまい、世斬を腰に差し、夜斬は神社に封印して、
極普通の旅人にしか見えない姿で歩いて行く……………

夜斬は物騒なので当分は神社に封印しておく。
何時でも手元に取り出せるから問題は一切無いし、
雑魚妖怪を必要以上にビビらせてしまうのでこれで良い。
能力による干渉はデフォで世斬で切断しているので、
間違えてもそういう能力による不意打ちで一撃死する心配は無い。

それにしても、一人になるのは初めてだ。

強いて言うなら吸血鬼になってすぐの時もそうだったが、
八夜威、永琳、紫、桜が、一人になる筈の時に一緒にいた。
やはり一人というのは寂しいが、同時に自由でもある。
人間は進化の代償に自由を捨てたが、妖怪は限り無く自由に生きる。
俺は感情はまだまだ人間のつもりだが、自由は好きである。

後ろから高速で飛んでくる妖気を察知し、左に避けて裏拳を顔面に
入れる。

頭は俺の真横で停止した為、そいつの身体は衝撃でその場に崩れ落
ちた。

「うつつ もう駄目
.」

「もう駄目だ？ 全然堪えてないだろうが。」

「まあね。」

てへっ みたいな感じで言ってくる少女もとい鴉天狗。
髪は銀、特徴的な帽子（名前忘れた。六角形のやつ）を頭にのせ、
右手には葉団扇を持ち、一本歯の高下駄を履いているのに黒の二
ソ。

シャツの上に若干スーツ風の黒い服を着ているだけだが、
この服の長さが膝あたりまでである。ボタンと言う性質上、
途中までしかとまっていけない事も考慮した上で丁度良い長さ。
外見上の年齢は十五ぐらい。俺や紫の少し下、ルーとほぼ同じだ。

「でもでもっ、いきなり女の子の顔を殴るなんて駄目だよ？」

「いきなり、飛び掛かって来たのはお前だ。」

「そりゃあ飛び付きたくもなるよ、『大炎の神魔』なんて伝説的な
妖怪なら。」

「あーそうかい。」

この状態の俺の正体を見抜いたという事は、かなりの実力者なのだろう。

少なくとも実力が八夜威並みで、観察力に優れた能力が無いと無理だ。

そして何だかんだで、この二つ名を十万年以上前から名乗っている。

蓮華と能力フル使用で勝負した時に「炎が強すぎる」とか、

「身体能力より炎ヤバイ」とか言われたのが由来である。

実際、蓮華は炎のみで封殺した。死なないが。

「あ、そうだ！」

「うん？ 何だよ？」

「自己紹介、まだだったね。」

私は幽観ゆうかん楓かえて。元は鴉で、今は天狗。

『ありとあらゆるものを見極める程度の能力』を持ってるとよ。」

「俺は炎魔 白。今は人間だが、始祖の吸血鬼兼夜神だ。」

『炎を操る程度の能力』が、俺自身の本質の能力だけど、

この刀に『ありとあらゆるものを切断する程度の能力』、

始祖の吸血鬼として『夜を司る程度の能力』を持っている。

………って、その能力なら分かるだろ？」

「自己紹介では使わないのが私の礼儀なの。」

「そうなのか、まあ良い心がけ……………なのかな？」

よく分からないが、そういう事にしておこう。

そしていい加減気になるが、こいつ実はめっちゃ強くないか？

「……………戦ってみる？」

「本気で言ってるの？」

「冗談。白……………で良いかな？」

「良いけど、俺も楓って呼ぶぞ？」

「勿論良いよ。で、さっきの続きだけど、

白なんかと戦ったら勝てないよ。

そもそも、戦いなんてあまり好きじゃ無いからね。」

「強いのに戦いが嫌いなんて珍しい……………事も無いか。」

俺の知り合いにも戦闘狂はいないし、紫は本気を出さない。

「だって白も本気出して無いじゃない」と返されるので、

まあ俺も本気は滅多に出さないから言える立場じゃ無いのだが。

そして有幻は無駄な戦いを激しく嫌うし……………

「よく勘違いされるけど、戦いが『嫌い』な訳じゃ無いよ。」

「戦えって言われたら戦うし、戦わないって言われたら戦わない。つまり好きでも無ければ嫌いでも無いって事か？」

「そゆこと。戦う？」

「うんにゃ、戦わない。」

「そう。じゃあ私の家にも寄って行きなよ。」

「この山に来たんでしょ？ 私が案内してあげようか？」

「ああ、ありがとう。宜しく頼むよ楓。」

「……………って言っても、観光になる様な場所は無いけどね。」

「いや、単なる好奇心だから。……………まあ気軽に楽しむ。」

「いきなり襲いかかってくる妖怪は返り討ちで良いよ。」

「はは、襲いかかってきたらな。」

無駄に大きい楓の妖力のお陰で、おそらくそんな馬鹿はいない筈だ。……………でも偶にいるから馬鹿なんだよなあ

「家って言ってもこの程度だけだね。」

「いや、すげーよ……………」

楓の家は、ビッグサイズの山小屋だった。

この時代にこんな建物があるのは衝撃的だろう。
いや、神社や紫宅は抜きでね？

「靴のままで良いよ。」

「ほ……………綺麗だな。」

「えーっと、そうかな？」

言いながら、頬を掻く楓。

仕草が妙に人間臭いのはよくある事だ。

「こういう家は汚れやすいが、ここはかなり綺麗だ。」

「えへへ、ありがとう。」

「……………じゃあ、これから何処に行く？」

「うーん……………おつきな滝があるけど、行ってみる？」

「滝か。よし、行ってみよう。」

「じゃあ、あっちの方ね。」

「この家は山の頂上に近いから、結構どこでも楽に行けるよ。」

「便利だな……………他に天狗とか居ないの？」

外に出て、滝の方に歩きだすのと同時に聞く。

「私以外では知らないかな。」

「そうか。」

「……………ねえ、十万年間の話、聞かせてよ?。」

「ああ。」

最初は……………まだ月の民が地上に居た頃の話だな……………

昔の事を思い出しながら、そして懐かしみながら、俺は話した

「……………そして現在に至る、ていう感じ?」

「ああ。……………一方的に話しすぎたか?」

「いや、面白かったよ。」

「おかげで滝より話に夢中になっちゃったもん。」

「滝も凄かったけどなあ……………」

「ま、良いか。楓と知り合えて良かった。」

「じゃあ、また機会があれば会おう。」

「うん。じゃーねー!」

「またなー!」

新たな出会いに喜びを感じながら、俺は山を去った

山と一人の天狗（後書き）

楓は一對一なら夜斬不使用の白ぐらい強いです。

感想や意見など、よろしくお願いします。

堕ちた月姫と過去の記憶（前書き）

ほーよくてんしよーです。どうも。

墮ちた月姫と過去の記憶

時は流れながれて、公家が登場した。

俺は人間の姿で妖怪退治などの仕事をして家を建てたので、飽きるまではこの生活を続けてみる事にした。

名前は讚岐 縁真と名乗っている。

白ってというのは浮くし、炎魔じゃ目立つから文字を変えて名前は縁真。

讚岐は……………何かそれっぽいからというテキトーな理由だ。

服は、上着を着流し風に紐で結って誤魔化している（いつもどおり）。

しかし、炎魔白改め讚岐縁真は、基本的に暇人である。妖怪なんて殆ど出ないし。

少しでも改善しようと料理を始めてみたのだが、根本的な問題として採れる食料が少ない為、仕方無く筍を取りに出

.....スルーするべきか？

しかしその考えは打ち砕かれる

「白ー！ 居るんでしょう？
ここから出して頂戴！！」

「.....はあ」

世斬の能力を使用し、手刀で光り輝く竹を斬る。

すると中から、手のひらサイズまで縮んだ輝夜が出て来た。

「くうううー！ー！ー！ー！！」

「．．．．．もう、体中が凝り固まったわ。」

「助けて貰ったら．．．．．?」

「ありがとう。」

「よろしい、合格だ。」

『ちびかぐやちゃん』という単語が浮かんだが消去した。

それよりどーすっかな．．．．．

この場合、俺が翁になるのか？ 筒取の翁でも良いのか？

まず翁ですら無いしね。十万そこらの若者だし。

兎に角、輝夜を一人には出来ないので、肩に乗せてお持ち帰りする。
下的な意味では無い。

「．．．．．ねえ、どこに行くの？」

「一応俺の家。」

「襲わないでよ？」

「襲わねーよ。」

「即答しなくてもいいじゃない、少しぐらい襲いなさいよ。」

「幼女にすら程遠い身体に欲情は出来無い。」

「これは縮められたのよ!!」

「そんなぐらい予想出来るって。」

詳しい話は家についてから聞くから。」

ふんっ、とか言いながら輝夜が俺の頭の上によじ登った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・身長、永琳より低いわね」

「余計なお世話だ。燃やすぞ?」

「悪かったわよ・・・・・・・・・・・・・・・・」

他愛もない会話をしながら、家へ向かった

「うーん……………無理だけど、普通に少しずつ戻らと思う。」

「ところで何で地上に居るんだ？ 月で何かやらかしたのか？」

「知っている事ではあるが、聞いておく。」

「お茶を啜り湯呑みを置いて咳払いをしてから、輝夜は口を開いた。」

「蓬莱の薬を永琳に作らせて、飲んだのよ。」

「あの薬を飲むと穢れが発生するから、私は月から追放されたの。」

「成る程、若気の至りって奴か。」

「……………って、んん？」

「まさか、人妖大戦での蓬莱人達は……………」

「……………」

「……………捨て駒、という事ね……………」

「……………」

月の軍隊……………」

……………」

「……………あれの首謀者は？」

「月に残っていたけど……………」

「本気で怒った永琳が、施設諸共破壊して処分したわ。」

自分の薬をあんな風に使われたんだもの、いくら永琳でも怒るわよ。

「……………それを永琳の昔の教え子が見て、青ざめてたわ。」

永琳こわい。本気の永琳こわい。一人で施設破壊とか永琳こわい。いや本当の話ですよ？……………まあ、それは置いといて……………

「永琳がケリを付けたなら良い。で、輝夜は月に帰りたいか？」

「永琳の計らいで迎えが来るらしいけど、正直帰りたくないわ。あんなの、広い檻の中に居るような感じだもの。」

「そうかい。じゃあ取り敢えず囲碁でもやるか？」

「碁盤が大きすぎてやりづらいわ。」

「そりゃそつだ。」

全長約10センチメートル。

体重に至っては、そよ風で飛ばされそうな程度しか無い。

「もう……………しばらくは寝てるわ。おやすみ白。」

「今は讃岐縁真だ。」

「そう……………おやすみ……………」

えん m ………………」

「……………はぁ……………」

話し相手も居ないことだし、俺も寝ることにした。

もう空も黒いので、空中に常温弱光の炎を出しておく……………」

不覚にもちっこい輝夜の寝顔が可愛いとってしまった。

取り敢えず、自分の頬を殴っておいた。

堕ちた月姫と過去の記憶（後書き）

永琳の本気はすごいっつよいとおもっよー！

感想意見誤脱字指摘矛盾点好感嫌悪感など気軽にどうぞ。

ぶくねしな そんねい(前書わ)

ほーよくてんしよーです。どしぜ。

しりとりって競められますよね。い ばっかり回されたりとか。

ぶくぢいな そんぢい

「吸血鬼なのに夜に寝るのね」

「変わってると言われるのには慣れてる。

でも俺の知り合いの妖怪は大体そうだがね。」

「伝説的に最強の妖怪達なのに、人間臭いわね。」

「人間臭いから強いのかも知れん。」

「それは無いわ。」

「いや冗談だよ。」

輝夜と再会して二日目になった。

やはり小さいが、性格は前に会った時と変化が無い。

昨日家に帰った時に、俺が石を溶かして作ったミニサイズ湯呑みは、身体に合うように小さく作ったので、輝夜も気に入った様子だ。

さつきから凄いペースでお茶を飲み干していく。がしかし、10センチ程度の身体なので、我が家の茶葉は平和を保っている。そしてミニ湯呑みは神力も込めてあるので、まず壊れる事は無い。俺が何かを作る時の癖だ。直すつもりは無い。損害も無いし。

「暇だな。」

「暇だわ。」

「暇ね。」

なんだ紫が。

「はじめまして、彼の妻の八雲紫よ。」

「はじめまして、月の姫こと蓬莱山輝夜よ。」

「よろしくね。」

「ええ、こちらこそ。」

「いきなり現れたのはスルーなのか……………」

なんか、俺の周りには冷静と言うか危機感が無い奴が多い。それだけ個々人の力が強いのが理由なので文句は言わない。

そして紫が妻宣言したのに対しても、俺は文句を言わない。

「あら、あなたも大概よ縁真？」

「強いし、危機感何それ美味しいの？って感じよね。」

「そうかな？お前らよりはマシだと思うがね。」

輝夜の発言はスルーする。

「二人とも、暇なのよね？」

「ええ。」

「ああ。」

暇すぎてNEETになりそうだよ全く

「……………しりとり」

「？」

「輝夜は知らなくて当然だろ。林檎」

「胡麻」

「ああ、分かったわ。マンドラゴラ」

・・・・・・・・・・・・・・・・なんだそのセンスというかチヨイスは

まあ別に良いがね。

「落雷」

「西表山猫」

「乞食」

「啄木鳥」

「木」

「樵」

「栗鼠」

「雀」

「姪」

「椅子」

「雀蜂」

「地下」

「鴉」

「西瓜」

「かもめ 鷗」

「雌」

「諏訪大社」

「や？」

「そうね。」

「そうだな。」

「薬師」

「シーラカンス」

「杉」

「議長」

「白」

「スキマ」

「薪」

「キリギリス」

「寿司」

「死海」

「生簀いけす」

「堇すみれ」

「レーザー」

「座椅子」

「酢」

「巢」

「スイス」

「すたれ簾」

「冷害」

「インダス」

「す李ち」

「萌やし」

「白子しらこ」

「.....すき焼き」

「キマイラ」

「ライス」

「！ スリランカ！！」

「かき氷」

「リラックス」

「.....」

す攻め酷い.....もう浮かばない。

「諦める？」

「まだ沢山あるわよ？」

「.....っ！ クソッ！！」

「紫、罰ゲーム考えましょう。」

「そうね、負けたら性別を変えちゃうとか？」

「うわあああ！！スピード！！」

「どら焼き」

「キス（魚）」

「スパイ！！」

「炒り豆」

「メス（医療用の）」

「……………くっそお」

やだ、女になりたくない……………

「性別だけじゃつまらないわよねえ、紫？」

「そうね……………加えて見た目を少女にする？」

「やめて下さいマジで！！」

「じゃあ勝ちなさいよ。」

「輝夜の言う通りよ、グダグダせずに戦いなさい。」

「……………」
「キンヘッド……！」

「怒号」

「驚」
「おこへい」

「……………」
「俺の負けだ」

「三時間は戦い続けただろうか……………」

「ああ……………」
「さらばだ、我が男としての十万年」

「はい、出来たわ。」

「……………顔は白、いや縁真って分かるのに……………」
「……………」

「……………すんだのか？……………」

ロリヴォイス……………だと……………!?

「きゅううううう……………可愛いわ!?!」

「当然だけど、霊力は変わらないわね。」

「ちょっと待て!! マジか!?!
……………声が……………」

「吸血鬼になってみて。」

「? ああ……………なっただけど?」

翼を広げるが、いつもよりデカく感じる。
当然と言えば当然なのだが……………

「で、戻ってみて。」

「うん。 って、おお!!」

「男女に自由自在に変身できるの?」

「いや、ある条件が有るわ。」

「……………何だ?」

もつとも重要な事だ。
ていうか、男に戻れて良かった。

「人間状態と吸血鬼状態を、高速で二回切り替えるの。
つまり人間 吸血鬼 人間か、その逆ね。」

「縁真の強さは変わるの?」

「幼女時は男性時よりスピードが上がるわ。
ただ、パワーは勿論下がるから注意してね。」

「ああ、分かったよ。」

案外、まともな能力を手に入れたのかも知れない。

「あと大事な事が一つあるわ。もう一回幼女になって。」

「ああ。．．．．．よつと！」

翼を一瞬出してすぐにしまい、幼女へと移行した。
なんか俺が変態紳士だと思われそうで嫌だな．．．．．

「で、大事な事って何ぞ？」

「それ、一日二回までしか出来ないのよ。」

．．．．．嵌められた、完全に

「紫、戻して。」

「厭よ。可愛いから。」

「紫って残酷ね。しかもレズでロリコン。」

「あら、縁真にしか興味は無いわよ？」

「輝夜……………他人事たうじんじみたいと言いいやがって……………」

「因みに炎とかに影響は無いから、安心して良いわ。」

「はあ……………今の俺は何なんだ？」

余計に複雑な存在になった日だった。

ふくざつな そんざい（後書き）

縁真はいま、吸血鬼の始祖で夜神で人間で男で幼女です。
もう何が何だか作者も分から（ry

面倒事の前兆（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

最近ペンタブで下手くそなイラストを描いています。

あとテイルズオブグレイセスFとかやってます。

ゾーオンケイジでびよびよを倒すところまで進みました。

アスベルLv・96、ヒューくんLv・94、シエリアLv・94、
教官Lv・95です。

やってる人とか知ってる人は気軽に話しかけてみてください。

マリクビームは歴史に残ると思う。

面倒事の前兆

「私、わたし、w a t a s i」

「それ位は自然に使えないと困るわよ？」

「せめて一人称は最低限ね。」

「分かってるわよ ああっっ!!」

「 やっぱ縁真には無理かもね。」

「そんなこと無いわ!! 私だって出来るわよ!!」

「 ぷっ あはははははははははは!!」

似合わない過ぎよ、いくらなんでも!!!!!!」

「紫、幾らなんでもそれわっ 酷いわよっ」

「っあーっはっはっはっは!!!!」

「 ぬう、やはり無理なのか」

「.

「 無理ね。」

現在、ようじょ状態での喋り方を練習している。結果は御覧の通り。

それは置いといて輝夜はというと、元の姿まで成長した。有名な貴族たちが続々と迫って来始めており、翁の俺涙目。しかし輝夜の見た目は子供なので貴族は変態なのだろう。因みに俺は違う。涙目の理由は忙しさからだ。なんと言っても書類が多過ぎて洒落にならない。

しかし実際問題、こうしてふざけて遊んでいられるのは、吸血鬼の能力で分身を作ってそいつに任せているからである。勿論、力は俺の足許にも及ばないが、便利だ。吸血鬼の姿から人間の姿に戻れないという性質上、接客(?)だけは仕方なく俺がすることになる。だるい。

「ん、終わったみたい。」

「蝙蝠化で分身してるのね、こういつ時は。」

「そう言えば霧化と蝙蝠化ってどう違うの？」

細かい分、霧化の方が良いと思うんだけど。」

「霧化って言うてるけど、正式には粒子より細かい魔力。どんな攻撃も無効化できる代わりに、消費する力が大きい。蝙蝠化は霧化より性質は劣るけど燃費は良いし、隙が霧化よりも少ないから、普段はこっちしか使わないよ。」

説明を終えたところで、蝙蝠を掌から身体に戻す。

「そうね。そのぐらいにしておいたら？」

「少しだけ女口調、でも完全にそうでは無いって感じね。」

「あれ、霧化と蝙蝠化の違いの事は……………」
「？」

「もつどつでも良いわ。」

「……………はあ」

兎に角、する事が無いので紫とイチヤイチャし輝夜と戯れるのだが、どうも幼女だと勝手が違う。俺が弄られるポジションなのだ。

さて、蝙蝠化の分身の記憶情報は全て私に還元されるのだが、一月後にはお偉いさん五人がお見えになれるよーである。

「面倒な事になってきたから帰るわ。」

「ちょっと、こういう時こそその紫の能力でしょ!!」

「じゃあね紫ー」

「じゃあね、二人とも。」

「.....」

紫は置き鏡の中に入ると、手を振りながら鏡の脇へと消えていった。境界操作は基本的に何でもありなのでバリエーションが豊富である。

「私、決めたわ。」

「なんぞ？」

面倒事の前兆（後書き）

縁真「久し振りに短いね。いつにも増して。」

作者「イラスト描いてたんだよ。」

縁真「ゲームもしてたでしょ……………うって、背景は？」

作者「止める、背景はもう帰って来ないんだ……………」

縁真「で、マジレスすると？」

作者「初めてのイラストで練習も兼ねてるから、背景は無い。」

縁真「いや背景も練習するべきだと思う。」

作者「次は描く。ていうかレイヤーを理解していなかった。」

縁真「あー、そう。それで一つ聞いて良い？」

作者「私も聞きたいことが一つあるから、どうぞ。」

縁真「何で白じゃ無くて縁真って表示なの？」

作者「本編で今はその名前だからだ。」

縁真「さいですか。で？」

作者「何でようじよなん？」

縁真「……………あんたが戻る機会をつくらな
かった。」

作者「はあ？」

縁真「冗談。喋り方の練習よ。」

作者「変態紳士が。」

縁真「本名晒すよ？」

作者「止めれ、冗談だから。」

縁真「……………読者様、
ばらばらな後書きで
申し訳ありませんでした。」

作者「あー、あと、白と作者じゃ見辛いからだな。」

縁真「先に言え」

呼び出し(前書き)

ほーよくてんじょーです。ごうせ。

呼び出し

「なあ輝夜」

「なに？」

「晩御飯、何が良い？」

「うーんと、お茶漬が良いわ。」

「そうかい。」

いつも通りの会話である。

しかし、俺の状況はいつも通りでは無いのだ。
何故なら・・・・・・・・・・・・・・・・

「呼び出しを受けた、家を数週間空ける。」

お茶漬は作つといたから貴族の件はよろしく。」

「え、ちよ……………」

最後まで聞きとらずに、俺は足元のスキマへとダイブした。

……………

「わざわざお呼びして申し訳ありません。」

「うん、暇だったから良いよ。」

スキマを抜けた先は、外国の建物であった。どこかは知らん。そして目の前にいるのは悪魔王、つまりルーである。

さて、ルーは何故、俺を呼んだのだろうか？

しょうもない理由で呼び出したりはしないのは確かだが………

「何の用事？」

「それがですね……………」

これから、私の配下の悪魔達とのお別れ会をやるんです。
それでみんなが一度ご主人様に会ってみたいと騒いでいまして、
幾ら言っても聞かなかつたんです。」

「それでこの数が……………」

「二十万の悪魔ですから、私の部下の一人の屋敷を借りてます。

あ、あの子です。　　おい、レヴィー!!!」

レヴィ……………レヴァイアサンか？

向こうの方からとととと走って来たのは、幼女だった。

あれ、レヴァイアサンって巨大な筈なんだが……………
……………?

「どうもはじめまして、レヴァイアサンです。

あなたが白様ですか？」

「そうだな。」

何か、幼女が全体的に多い気がする。特に俺の知り合いで。
桜とか有幻とか梗華とか……………俺とか。

「では、レヴィとでも呼んでくださいませ。」

「ひとつ質問なんだが、それは本来の姿か？」

「そつですよ?」

あんなえー、おかしいな

「レヴィは巨大な水龍に化けたりします。それでしょうか?」

「おう、ナイス解説だルー。」

「.この屋敷は、私が人型になる以前に建てられました。」

ですので、二十万人程度なら余裕をもって入れます。」

「そうなのか。レヴィって悪魔の中では?」

「「No.2です。」」

「そつか。」

やはりレヴァイアサンは強かった。ルーの次に。

「実は私自身、悪魔のトップの立場をずっとほったらかしてましたから、

ここにいる悪魔はレヴィ含め二人しか知らないのです。」

「ずっと俺のメイドしてたもんな。」

「ルー様の居ない間は、私が代わりでしたよ。」

「……………で、お別れ会で事は、またこっちに来るのか。」

「ええ。私は使^{メイド}魔ですから。」

「また私ですか……………ちょっとベルにも言
つて下さいよお。」

「ベル？」

「ベールゼブブです。レヴィの次に偉くて強いです。
でも性格は……………」

彼つてことは、男なのか。

男率の少なさを緩和してくれる貴重な存在だ。

「ベルは蠅です。」

「いやその情報は別にいらないけども。」

レヴィ……………天然なのか？

「ぬわあっ!!」

「これがベルです。」

ルーが手を翳した瞬間、悪魔の中から一人の青年が吹っ飛んできた。そしてルーのパンチが彼の腹に炸裂すると同時に何か飛び散った。

「ううっ」

「あんた何ここでナンパしてんの？殺すよ？
しかも幼女限定って何考えてんの!？」

「 ああっ 」

「ちよっ ルー様、落ち着いて!!」

さっき飛び散った『何か』の正体があった。翅だ

「ルー様 その方 が
. ?」

「そうよ、なのにあんたは……………馬鹿なの？」

「ルー様、そろそろ死んじやいますよー？」

「もうよセルー。」

「^{かしこ}畏まりました。」

「「早っ！！」」

悪魔二人のツツコミを喰らうが気にしない。
そしてベルは変態であり紳士だという事が分かった。

「白様、今僕が不名誉な扱いを受けた気がするんですけど？」

「だまれ変態。それより傷はどうした？」

「僕の能」「ベルの『再生を操る程度の能力』ですよ」「レヴィ様……………」

「だから彼はサンドバックです。しかも動きます。」

「そんなのがNO.3って……………」

いや、よく考えたら普通に強いな。

しかも魔力はかなり大きい。まあ俺やルーには及ばないが。

ていつか純粹な魔力だとレヴィが俺達とほぼ同じなんだな

「で、レヴィの能力は？」

「『海を操る程度の能力』です。つまり環境依存です。魔力もそのままでは白様やルー様の魔力に大きく劣りますし。」

「ただ、海でのレヴィは下手すると私より強いです。少なくとも、互角程度には戦えるでしょう。」

「. 相性も考えると、白様には通用しませんね。」

「なんで？」

ベルの質問は尤もだろう。火は水に弱い。ただ俺の炎の温度だと、海水など触れる前に蒸発させられる。だが教えてやらない。

「. ベルは自分で考えろ！」

「. だって炎ですよね？」

まあ放置で良いだろう。

悪魔王お別れ会は、まだ始まってはいない

呼び出し(後書き)

ちなみにレヴアイアサンは翼無しです。

ベールゼブブは蠅の翅です。そして変態です。

ルシフェルと愉快な悪魔達（前書き）

お久しぶりです。ほーよくてんしょーです。

ルシフェルと愉快な悪魔達

ここは魔界です

なんて事をいきなり言われたら、あなたはどつする？

「えー」

「まあ、はい。ルー様の言った通りです。」

そう、ここは………なんですよ、奥さん

さて悪巫山戯もこちらへんにしておいて、ここはイタリアである。
なんで言葉が通じてるんだらうね？

「さて、今日は力のある悪魔達が客で来ています。
みんな開会の前にご主人様に会いたいそうですが、よろしいです
か？」

「問題ない。」

「じゃあ最初は………氷魔のところへ行き
ましょう。」

彼は紳士的で、戦いを好まない温厚な男です。

しかし一度能力を使用すれば、街一つを一瞬で氷結させる実力が
あります。

最後に、彼は氷の悪魔ですから、溶かさないで下さいね。」

「了解。あれ、二人は？」

「開会に向けての最終準備をさせています。」

「そうか。って、悪魔は二人しか知らないんじゃないのか？」

「部下では無くて友人ですから、先程は申し上げませんでした。それに殆どは起源が始まってから知り合いました。」

「．．．．．一人、地上でのレヴィやベルより強い吸血鬼もいます。」

「彼女以外は吸血鬼では無く、純粋な悪魔です。」

「ふーん、吸血鬼か．．．．．」

「確か今は、西暦千年にもなって無いな。」

「では、氷魔はこちらです。」

「フリーズ、紹介するね。ご主人様の炎魔白様。

ご主人様、紹介致します。フリーズ・K・デッドロックケルビンです。」

「初めまして。白、と呼ばせて貰っても良いかな？」

「勿論だ。俺もフリーズって呼ぶけどな。

「……………宜しく、フリーズ。」

「ああ。宜しく。」

凄じ凍りそうな名前だ。

フリーズは見た目が二十歳ぐらいで、優しそうな感じだった。氷だから性格も冷たい、みたいな感じじゃなくてホツとした。

「じゃ、フリーズの能力は？」

ちなみに俺は『炎を操る程度の能力』な。」

「『氷と結を操る程度の能力』。
氷を削り出したり、物と物を繋ぎ合わせたり出来るよ。
結界も張れるけど得意じゃ無いね。少なくとも境の妖怪には敵わ
ない。」

「割と面白い能力だな。俺は炎なら何でも出来る。
太陽の炎に飲み込まれたりしたら……………
．．きつと強くなるな。」

俺は吸血鬼だが、それ以前に太陽は炎の塊である。

「面白い吸血鬼だね君は。」

「変わってるとはよく言われる。」

「良い変わり方なんですよご主人様は。」

．．．．．妖怪らしくない、とも言えますが……………
．．．．．

私は、ご主人様のそんな所も好きですよ。」

「ルーがここまで信頼するんだ。白の人柄の良さは分かるよ。」

「過大評価されるのには慣れてるが、ありがとう。」

「……………ご主人様、そろそろ次に行かなければ……………」

「……………じゃあ、僕はここで。
今回は白に会えたし、ルーの顔も見たから、屋敷に帰るよ。
いつか日本にも行こうと思うから、そのときは宜しく頼むよ。」

「ああ。またな。」

フリーズは軽く手を振った後、氷の翼で屋敷の入り口へ飛んで行った。

ていうか改めてこの屋敷が広いと思った。
少なくとも、某京ディズニールランドよりは広い。

「さて、次は吸血鬼、紅魔のところへ行きましょう。宜しいですか？」

「………紅魔………」

ここでその名前が出て来るとは思わなかった。
時代から考えると、レミリアやフランの親だろう。

どちらにしても、あの姉妹と関わりがあるのは間違い無いか。
偶然の一致という可能性もあるが限りなく低いし……………
……………

「……………どうかなされましたか？」

「ああ……………そうだな、行こう。」

「では、じゃあさ。」

「うって、うおお！？」

「ご主人様！？」

突如、身体が白黒の光へと変化し、
次の瞬間には、俺はそこに居なかった

「……………ルー、今の彼が？」

「うん。でも突然
多分、他のだれかに呼び出されたんだね」

「そう、じゃあ次の機会があればその時で良いわ。」

「悪いね。じゃあまた今度、ご主人様に頼むよ。
あなたと話をしたいって」

「……………今日はやたらと呼び出しが多いな」

「すみません炎白夜様、力を貸して下さい。」

炎白夜はくぜと言うのが、神としての俺の名前らしい。

炎は読みに入れないという不思議は、取り敢えず後回しである。
何故なら、目の前に数万の妖怪が見えるから。

そして俺を呼び出したのは、綿月依姫である

「まあ良いけど、取り敢えず夜力は使うな。」

「何故ですか？ 相手は強力な妖怪軍団ですよ？」

「いくら俺を卸していても、あれの反動で動けなくなる。

それに、これで十分だろ。」

今の依姫は炎を纏い、祇園の剣は世斬の能力を纏っている。

さらに炎は二対の翼を形成している。白黒の炎。

おそらくは再生能力もあるしソニックブームにも耐えられるだろう。霊力は依姫依存だが、燃費の良さでどうにかなる。等。

「あとは依姫、お前の実力次第だ。

無論出来る限りの援護はするが、あくまでお前の身体だからな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい、分かりました!!！」

依姫の若干上からの視点のまま、俺は横から来た敵を炎で一掃した。俺を憑依させた依姫は、その速度に反応出来ていた様だった。

「さて、お手並み拝見だ。頑張れ依姫」

ルシフェルと愉快的悪魔達（後書き）

呼び出し2ndでした。

感想や意見など、基本的に何でも受け付けてます。
暇な方は駄目出してもどうぞ。

首謀者（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

大輝星竜、撃破しました。難易度セカンドです。
カオスはちよつと無理です。

首謀者

「紫、本当に大丈夫なの？ 月の使者？」

「大丈夫よ。私達は観ているだけで良いわ。」

「……………紫様、他の始妖達は呼ばないのですか？」

始妖しやうというのは、私や白などの、六桁単位の年を生きた妖怪の事だ。いつからか、他の妖怪達からはこう呼ばれている。

「構いません。彼らの手を借りるまでも無いわ。」

「はあ、そうですか。」

「私もその始妖の一人ですが？」

「桜、そうだったのね。」

「……………全く気付いてなかったのは私だけですか。」

藍も気付いているかと思ってはいたが、そうでは無かったらしい。桜を尊敬していたので、気付いているかと思ったのだが。

まあ、藍にはまだまだ伸び代がある。今後の成長に期待しよう。

「紫さん」

桜が、小声で話し掛けて来た。

ちなみに桜には、凜湊という名字が付いた。

幽々子が自害した時……彼女が人生で最後に残した、桜への贈り物だ。

彼女は一番の友人だった桜に、一番のお礼として、名前を遺したのだろう。

亡霊になった時、幽々子は既にそのことを忘れていた。

でも私は幽々子の陽気に笑った表情だけで十分だった。それは桜も同じだった筈だ。

「……………紫さん？」

「あ、ああ……………少し前の事を思い出していたわ。

それで、何かしら？」

「この戦い、態と負けに行ってますね。」

目的は・・・・・・・・・・増長し横暴さを増した妖怪達の
処理・・・・・・・・・・ですか？」

流石に見抜かれた様だ。

敵を欺くには味方からと言つが、敵には見抜けないだろう。

「やっぱりあなたは気付いたわね。その通りよ。

ただ、月の使者は強いけど、実力ではあの妖怪達を止められない
わ。」

「・・・・・・・・・・でも、月の都を乗っ取ったりする事は
目的じゃありませんよね？」

妖怪側が負ける事が、紫さんの計画でしょう？」

「勿論よ。だから月の使者には、ある事を吹きこんでおいたわ。」

「？」

「白の、神としての本名よ。炎白^{はくや}夜^やっていうね。

前に言った通り、月の使者の妹の方の能力は神卸だから。」

あの能力は厄介だ。何故なら隙が無いから。

八百万の神の力を貸りられる能力なので、あらゆる能力を使えるの
である。

勿論、貸りた力が本来の力に及ぶわけも無いが、白程になればそれ
でも十分だ。

「ああ．．．．．妖怪達が少しだけ可哀相に思えて来ました。」

「．．．．．ただ」

「え？」

「ちょっと耳貸して。」

「はい。」

「．．．．．y．．．が．．t．．．ちや．．
「．．．ら。」

「．．．．．大丈夫なんですか？」

「きつと大丈夫。だって白だもの。」

月の使者．．．．．依姫の身体ではどうなるか分からないが、そこは魔法の言葉『きつと大丈夫。だって白だもの。』で切り抜ける。

「まあ、白さんですね．．．．．」

「紫様．．．．．妖怪の動きが変です。」

全体に動揺が走っています．．．．．あれが月の使者ですか。」

「そうね、本当に強いわ。」

前方を見てみると、そこには妖怪を斬り捨て焼き消し去る依姫の姿が見えた。

これで月側の勝利は揺るがないだろう。不安要素はあるが。

「紫、やっぱりそうなの？ あの炎はあなたの旦那さんのじゃない？」

「ええ。」

「……………どういう事ですか……………」

「藍さん……………」

藍は相変わらず、私の目的が見えていない様だ。

九尾とは言え、まだまだひよつこと言う事か……………」

……………」

そう考えると幽々子は凄い。桜の次に見抜いた。

私達に戦いを挑んだのが間違いだっただの。

十万年前、月の兵器を破壊した数は、私と桜がトップだった。いくら高性能とは言え、所詮は扇子一つ。

それだけで私達と戦える月人は蓮華とあと一人ぐらいしかいない。

「……………っ!!」

「どうするんですか、この月人。殺したりしませんよね？」

「ええ。『妖怪四人は逃亡した』っていう記憶に書き換えるわ。

……………あっちも大体は片付いたみたいだし。」

私が扇子で指した方向には、炎を纏った依姫と、雷を纏った鬼神がいた。

「……………後は、白がどつするかね。私達が手出ししては駄目なもの。」

「白さん……………」

死闘と雑談（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

うちのPCでは地霊殿以降の原作ゲームが動きません／（＾o＾）
／

死闘と雑談

「……………依姫、先に帰ってる。相手が悪過ぎる。」

俺は依姫から離れ、実体化した。

確かに依姫は強い。こいつ以外の妖怪全員を依姫が倒せるとは思っていなかった。しかしどちらにせよ、こいつが居る時点で、途中で実体化するつもりだったのだ。

「炎白夜様……………分かりました。どうかご無事で……………!!」

「永琳に宜しく言っといってくれ。」

「!!! 師匠のお知り合いだったのですか!?!」

「いいから早く行け」

「は、はい……」

依姫が街の方へ走っていったのを確認してから、俺は前に向き直した。

「茶番は終わりかい、白？」

「何でここにいるんだ、八夜威？」

これは紫の策略だ。本気なら俺や他の始妖達を呼ばない筈が無い。恐らくは増長した、見境無く人間を襲う妖怪達の始末が目的だろう。それに、紫は月の技術に興味は無い。

ついでに言つと紫以外でこんな事が出来る妖怪も居ない。

と、いう訳で、ここに八夜威が居る理由が無いのである。

「何でつて、強い奴と闘えるつて聞いたからねえ。」

八夜威が俺の目の前へ飛び込み、雷パンチを放ってきた。上に跳んで回避し、上下逆さまの状態になる。

「要するに暇？」

そこをグングニルで雑払つて来た。

「そういう事。」

着地し、しゃがんで回避。八夜威は雷槍を手放し、俺に向かって近接攻撃の雨霰。

パンチキックチョップを受け流し躲し、空中に創った炎剣を放つ。

「はぁ……………つたく、勘弁してくれ。今日は人生最大の厄日だ。」

雷を纏い、八夜威がそれを全て叩き壊した。

「人生じゃなくて魔生じゃないか？」

距離を取りプロミネンスを放つ。八夜威のマスパ的な何かで相殺されて大爆発。

しかし間を置かず一瞬で背後に周り込み、踵落としをお見舞いする。

「どっちでもいいだろ、それに翼をしまえば人間だ。」

さっき八夜威が手放したグングニルが、背後から飛んできた。

速度が速く避けられないので態と当たりに行き、空いた孔を炎で塞いで再生。

「確かにどっちでもいい。」

そのまま踵落としを左肩に入れるが、裏拳で相殺される。

「ところで、子供産まれたんだろ？ おめでとさん。」

雷神剛拳と炎魔天翔がぶつかり合い、互いに後ろに吹き飛ばす。プロミネンスエクспанションを放ったが、何かに弾き飛ばされた。

「「天破雷神剛拳」！！ そりゃどーも。紫と白ではつくらないのかい？」

夜斬を召還し両腕に纏い、拳圧を受け止める。そのまま殴り合いに移行。

「生憎、すぐにつくるつもりは無い。」

互角の力での殴り合いだが、この闘い方に慣れた八夜威には相性がイマイチなので両脚と翼に夜斬を纏わせ、余らせておいた分を日本刀型に変形させて斬り掛かる。

「『すぐに』って事は、つくる気はあるんだねえ、楽しみだよ。」

雷帝激昂天地滅壊を使って来たので攻撃を中止、夜斬を纏っている
ので全て躲す。

「いつかはな。それより、息子さん？娘さん？ 今度会いに行つて
いいか？」

更に攻撃が激しくなり、もはや雷帝激昂（ry）では無くなっている。
が、躲す。

「「雷帝激昂天地滅壊槍降蒼光無劫衝」！！！！ 大歓迎だ、息
子だよ。」

雷帝激昂天地滅壊槍（ry）が強すぎるので夜斬に世斬を付加し、夜
世永魅の刀に。
降り注ぐ雷槍と雷を一撃で消し飛ばした。正確には斬り刻んだ。
ていうかもうネタだろ。漢字15文字つて……………
……………

「じゃあ、お前らに似た戦闘馬鹿にならないようにしないとな。」

八夜威は諦めたような素振りです、こちらに歩いて来た。
足がないので浮いている為、この表現が正しいのかは分からないが。

「失礼だねえ、戦闘馬鹿だつて？」

「そうだろ。」

瞬間、雷槍の刃が首元に突き付けられた。

「油断大敵。闘いはいつ終わったんだい？」

「やっと、勝負が付いたな。お前の負けだ。」

しかし、八夜威の首元には既に三つ、白銀の刃が突き付けられていた。

「!？」

「終止符「四面楚歌」。俺が夜斬を纏い、尚且つ一定時間攻撃を一切行わず、一切攻撃を喰らわなかった状態から

『夜世永魅』の武器で全力攻撃すると発動出来る、ロマン技だ。ちなみに三体とも、俺自身と同じ強さだからな。」

俺を含めて四人。言わずもがな、フランのフォーオブアカインドを参考にした。

夜世永魅の刀を三つも突き付けられ、流石の八夜威も本気で諦めたようだ。

「降参だよ。こうなったら一体誰が勝てるんだ？」

「多分、誰にも負けない。ただ、純粹に体力が持たない……」

分身が消えるのと同時に体が崩れ落ちそうになるが、八夜威に受け止められた。

そして八夜威は、虚空へ向けて叫んだ。

「紫——!!」

「紫……………疲れた。」

「はいな。お疲れ様。」

スキマが足元に開いたので、俺は重力に身を任せた。

死闘と雑談（後書き）

とくにありません

感想等よろしくお願いします。

白玉楼（前書き）

ほーよくてんしょーです。どうも。

今日、文花帖で、境符「波と粒の境界」、貴人「サンジェルマンの忠告」、百万鬼夜行」をクリアしました。勿論全て気合いです（
、・・・、）

白玉楼

「疲れはとれた？」

「ああ。ありがとう紫」

「私にも感謝しな。布団は私が準備したんだ」

「八夜威がいなけりゃこんなに疲れなかったがな」

今俺が居るのは何処かの御屋敷の布団の中であるが、神社や紫の家では無いようである。起き上がると布団はスキマへと消えて行った。そして何故か居た桜？の横にいた人物を見た瞬間、謎が解けた。

「白さん、無理すぎですよ。すぐに無理する癖は直して下さい。」

「確かに放って置けないわねえ。初めまして、私は西行寺幽々子。」

そう、ここは白玉楼だ。
幽々子は既に亡霊になっており、なんだか漂々とした雰囲気を感じ
る。

「俺は大炎の神魔こと、炎魔白。讃岐縁真。炎白夜だ。
種族は吸血鬼、人間、夜神だけど、ひっくるめて神魔って言われ
る。」

「えーっと……………呼ぶ時は白で良いのよね？」

「勿論。ていうか桜……………だよな？」

「はい……………」

先程俺が 桜？ と彼女の事と呼んだのには理由がある。
まず根本的な問題として、見た目年齢が上がっているのである。1
6歳程度、つまり俺や紫とほぼ同程度にまで成長している。右目で
確認したが、妖術の類では無いようであり、ますます謎だ。そして、
変な言い方だが、妖力が妖力らしくなった。初めて会ったときから

ずっと綺麗過ぎる妖力だったのだが、妖怪らしい穢れ……
と言っのたろうか？そう言ったものが見える。
服も変わっているが、それは昔からあった事である。やはりゴスロ
リだが。

そして髪が伸び、カチューシャがシンプルになり、ツインテールに
なった。

「……………白、それは今度話すわ。私と桜で」

「そうか……………いきなり変な質問して悪かった」

「お茶をお持ちいたしました」

「ありがとうございます。そこに置いて頂戴」

部屋に入ってきたのは、紫の式神である九尾の狐、もとい藍だった。

「かしこまりました……………目が覚めたのですか」

「ええ」

藍は紫に聞くと、お茶を机の上に置き、俺に一礼した。

「私は八雲藍、九尾の妖狐であり紫様の式神です。藍という名前は

紫様から頂き、

僭越ながら八雲を名乗らせて頂いています」

「俺は炎魔白。神魔だ」

大幅に省いた自己紹介。

藍が紫から俺のことを教えられている事は聞かなくても分かるので問題無い。

「藍、白には敬語じゃ無くて良いわよ」

「しかし……………」

「俺も今丁度それを言おうとしてた所だ」

「……………分かったよ、白。これでいいか？」

「うん」

敬語を使われるのは慣れていないが、俺は敬語よりも自然体が好きだ。本当はルーにも桜にも、敬語ではなく自然体で喋ってほしいと思っている。だが二人は敬語を止めようとしなない。何故だろう？立場上ルーは分かるが、桜が敬語を使う必要も理由も意味も無いと思うのだが……………

「白、蓮華とも知り合い何でしょう？ 庭にいるから会ってきた

ら？」

「蓮華？ あいつがここに居るのか」

幽々子の言ったことは、八夜威が居る時点で予想出来ていた。

「今は妖忌と剣の練習中だね」

「妖忌？」

「この白玉楼の庭師で、私のボディーガードよ」。

妖忌と蓮華が剣を交えている姿が頭に浮かんだ。妖忌は妖夢の爺ちゃんで、相当の剣の腕の持ち主だと記憶している。二人の剣術のどちらが上なのか……………見に行くか。

しかし次の瞬間、予想外の言葉が飛び出した

「まあ、二人の息子だから、相当強いわよ」

「……………は？」

紫の発言に、思わず目を見開いた。

二人だと！？ まさか……………

「なんだい白、会いたがってたじゃないか。私と蓮華の息子だよ」

「……………マジか」

完全に予想外である。が、二人の息子なら、凄腕の剣士であることも頷ける。

そして恐らく、紫の持っていた楼観剣と白楼剣も……………

「楼観剣と白楼剣は、妖忌にあげたわ。白楼剣を扱えたんだもの」

「参りました、父上」

「ふむ．．．．．攻めにいくのは結構だ。それだけじゃ勝てないがな」

俺達が庭に付くと、丁度稽古が終わった所だった。
蓮華がこちらに気付き、楼仙剣を収めて歩いてきた。

「白、来てたのか」

「ああ。ところで．．．．．息子さんか？」

蓮華と同じように楼観剣と白楼剣を収め、こちらへ歩いてくる青年。白い髪、身体のそばに浮いている半透明の勾玉状の餅……………
・じゃ無くて霊。
間違い無く、魂魄妖忌である。

「はい。半人半霊、魂魄妖忌です。

白殿、あなたの話は聞いております。私と手合わせ願います!!」

「……………まあ、良いよ。炎は使わない方が
良いか?」

「使つて下さい。それで、戦えなければ意味がありませんので」

蓮華の方を見て、始めの合図を頼む。
声で「始め!!」という最も分かりやすいものだ。
そして離れ際に、蓮華が言った

「妖忌は強いぞ」

三歩分の距離をとり、お互いに構えた。
俺は柄に手を掛け、妖忌は二振りを抜刀した状態である。

「父上、お願いします」

「蓮華、良いぞ」

「……………始めっ!!」

俺は最初に、居合い斬りの断空を叩き込んだ

白玉楼(後書き)

次は白vs妖忌です。

お詫び

ほ「ほーよくてんしょーです。どうも。」

白「お前のスペースはもつと上だろ？」

ほ「それがね．．．．．今日は大切なお話と、そのお詫びがあるんだ。」

白「で、このタイトルか。また白黒だな」

ル「良いじゃないですか、ご主人様のイメージカラーですよ？」

ほ「ルー、来てくれたんだ。」

ル「勘違いしないで。私はご主人様について来ただけよ」

ほ「ごめんね．．．．．敬語じゃない時の喋り方が不安定なもの。」

ル「次回からはこの喋り方で統一させて貰うわ」

白「俺にも素で喋ってくれればいいのに」

ル「ご主人様とは敬語で喋らせて戴くのがしつくりくるんですが・
．．．．」

ほ「どどん本題から逸れていくよ．．．．」

白「何かお前の喋り方ムカつく」

ル「同感です。『断魂映月』」

ほ「私は普通に喋っているよ。あと作者だからって無敵でも無い。」

白「夜斬召還、大鎌形態へシフト」

ル「魂符「魂縛の黒鎖」」

ほ「え？何で私の事挟んで構えてるの？あと逃げ道無いよ？」

白・ル「瞬符「月刃狩魂風迅斬」！！」

ほ「ぎゃああああああああ！！！！」

B A D E N D

ほ「さ、て、そろそろ本題に入っているか？」

白「どーぞ」

ル「良いわよ」

ほ「次の春の事だ。」

白「そういえばお前花粉症だったっけな」

ル「アレルギーが劇的に多かったわね」

ほ「．．．．．まあそうだけど、もっと大きなものがある。」

白「受験か」

ル「受験ですね」

ほ「そ。受験だよ。あの忌々しい、ね。」

白「で、最近勉強しなくて点数下がったから」

ル「慌てて勉強し始めた．．．．．いや、やる事にした」

ほ「その為炎魔録の更新が出来なく、もしくは疎かになります。」

白「．．．．．本当にやれるのか？」

ル「結局十月ぐらいまでやらなそうね」

ほ「……………いやいやいや。ついでに次回、ルーが出るよ。多分。」

白「あ、お別れ会の事忘れてた！」

ル「無事に終わりましたよ。あとは片付けです」

ほ「そう、そこから始まると思う。」

白「ていうかルーって鎌使うけど、あれ戦いにくくないか？」

ル「戦いにくいです。長剣の方が扱えます。でもキャラが薄まります」

ほ「大丈夫だと思う。私はそう思う。次回長剣持たせる。」

白「大丈夫だろ。俺よりも少し大きい魔力を派手に使えば」

ル「ご主人様がそう仰られるなら、そうします」

ほ「楽しみにして下さっていた読者の皆様、誠に申し訳御座いませ
ん。

そして、これからも駄文・東方炎魔録を宜しく願います。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8568p/>

東方炎魔録

2011年7月27日15時09分発行